324
137

Comparative Religion

BY

TATSU TANAKA

比較宗教雜話

田中達著

東京 教文館

324-13

Comparative Religion

BY

TATSU TANAKA

比較宗教雜話

田中達著

東京 教文館

明治
42 6 30
交換

序

余の比較宗教に於ける、所謂る『下手の横好き』とも稱すべきか。斯學に必要なる語學の知識に乏しく、渉獵の精力に欠くる所あり。觀察の眼光、甄別の能力、また皆余の有する所にあらざれども、嗜好の赴くところ自ら揣らず。乞はるゝまゝに、或は講じ、或は筆したるもの、此の數年來、十數篇に及べり。即ち其中より七篇を撰び、別に、『イヨアサフとバーラーム』の話、一篇を添えて、こゝに此書を成すに至りぬ。其の參考したる書籍は、悉く之を其の場處に掲げ置きたれば、こゝに記さず。而してジョルダンの『比較宗教』や、ギルマンの『新萬國百科全書』は、余恰かも深切なる師友の相談を仰ぐが毎に、屢次之を參考したれども、煩しければ、其の都度々々之を記すことをなさゞりき。最後の一篇『イヨアサフとバーラーム』の話は、余之をチー・エス・ベリーの『基督教及び佛教』に收れり。此話は、殆んど天下萬國の語に譯せられたれど、英語にありては、今日まで完全のものなく、此のベリーの譯は殆ど唯一のものといふも差支なかるべし。シ・ホルストマンの中古英語に譯したるものはありと聞けど

素とより得易きものにはあらざるなり。

余は次に本書の題號として用ゐたる『比較宗教』なる語につき、一言こゝに辯じ置くの必要ありと信ず。さて、比較宗教なる語の用法に關しては、今日未だ學者社會に、一定の習慣あるにあらず。之を狹く解釋する人々は、所謂る『宗教學』(The Science of Religion)の一部分にして、かの『宗教史』(The History of Religions)及び『宗教哲學』(The Philosophy of Religion)と相鼎立するものと認む。即ち宗教史は材料の蒐集に任じ宗教哲學は、理論の構成を掌どり、而して、比較宗教は衆異の中に一致を撰擇するに努むるものとなす。而して此の三種を合せたるもの、即ち宗教學なり。此の意義よりする時は比較宗教は恰も宗教史と宗教哲學との中間に位し、宗教史の蒐集したる材料を取捨撰擇して、宗教學最高の目的たる宗教哲學へと之を送付するものなり。此の見地よりして比較宗教の目的を定むる時は、二つあり。曰く、世界各宗教相互の關係を吟味檢定すること是れ其の一なり。曰く同一宗教中にありても古今の變遷に由りて生ぜし思想の異同あるを取つて之を吟味檢定すること是れ其の二なり。されど、他の一方には、また、比較宗教の目的を極めて廣義に解釋し、粗ぼ之を宗教學なる語と同一に使用する一派あり。例せばシカゴ大學の比較宗教科は、宗教に關する種々の科學を包容せる極めて廣濶のものなるが如き是れなり。思ふに嚴格の意義よりいふ時は、比較宗教本來の目的は、一面宗教史と相簡び、一面宗教哲學と區別したるのものたるべし。而して比較宗教將來の發展は必ず此の明確なる自覺に達し、此の特殊の本領を開拓するに存するならん。されど、斯學今日の發達程度は、尙ほそれほど、堅固なる獨立の地位にありとも思はれず。一面、宗教史に對し、一面宗教哲學に對し、犬牙相錯綜して、境域の截然劃定すべからざるもの尠からず。故に、科學的、專門的のものならば、格別本書の如き非專門を標榜するものにありては、寧ろ之を廣義に解し、此の雜駁なる問題を收めて一書に題し『比較宗教雜話』といふも怪しくはあらじ。

然るに比較宗教學者は、元來素人の侵略を恐るゝこと甚しきものあり。即ちチーレはシカゴの宗教大會の節、朗讀せる文中に、健筆家の手によりて、斯學の流行を來し、遂に素人の餌となるを憂ふといへり(該記錄第一卷五八六頁)。ジャストラウまた獨逸の二十の大學中、一も宗教學の講座を設けしものなき理由を說明して、是れ

斯學が、素人の侵略を受け易きに由るならんと觀測せり（『宗教研究』五六頁）。されど、專門家若し秘密主義を守り、籠城主義を取らば、學問の効果いつの代にか世に知られ、素人の思想、何れの時にか正しき指導を得らるべきぞ。通俗の比較宗教文學は、斯學のためにも、將た又素人のためにも、必要なるにはあらざるか。されば、とて余自ら敢て素人以上を以て任ずるにはあらず。余も亦實は、素人の一員ながら、甚しく專門家の思想を誤解せりとも思はれず。且つ幸か不幸か、余にはチーレの所謂る健筆家の資格家具はらざれば、たとひ毒を流せりとするも、甚しきに至らざるか。是れ余が、せめてもの慰藉にてあるなり。

明治四十一年二月

東京に於て

田中達

目次

一　宗教學界の三偉人……一
二　宗教學と言語學……一六
三　自然禮拜の種類……三三
四　佛教は果して基督紀元前にパレスチナに傳へられしや……四八
五　エッセヲ教佛教及び基督教……五六
六　名に關する研究……六七
七　日本人の未來觀……八三
八　バーラームとイヨアサフの話……九七

宗教學界の三偉人

宗教學界の偉人何ぞ必ずしも限らん。英佛米獨各々斯界にその天才を貢献して、今日の隆昌を來せり。中に就て、マックス・ミューレルとルナンとチーレの三人は、三種の資格、三樣の趣きを具へ、迭みに相補ふて、等邊三角形をなせり。今少しく之を說かん。

一　マックス・ミューレル

一千八百六十年英國牛津大學は、マックス・ミューレルに與ふるに、最初の比較言語學教授の任を以てせり。是れより以後千九百年の其死に至るまで、比較言語學は、渠の專門なりき。比較宗教學は素より其本領にあらず。共著『宗教學務論』（イントロダクション、ツゥ、サイエンス、オヴ、レリジョン）の中にも（此書南條文雄氏に飜譯せられ、『比較宗教學』と題して、博文館より出版せられたり）『余が好める古代言語、神話、宗教』の語ありて、宗教を最後に置けり。されどマックス・ミューレルの宗教に於けるは、醫家の文學に於ける、政治家の禪學に於けるが如くに、一種の道樂、別途の研究たりしにはあらず。共努めたるところは、『思想と

言語の起源を以て、神話と宗教の起源に接續する連鎖『自傳』(アウトバイオグラフヰー)三頁(を發見するにありしは、其の自白する所なり。マックス・ミューレルが宗教研究上に於ける長所短所共にこゝに胚胎す。

マックス・ミューレルは言語學者たりし故を以て、其の宗教學上に於ける貢献專ら言語學の範圍内に於てせり。其の力荷毘陀原本の出版に於ける、東洋聖經の飜譯及び出版に於ける、宗教學に取りての大産物たると共に、また言語學のための珍品なり。渠の著書中、五月蠅さまでに度々説き及ぼせる印度、希臘、羅馬等各國の神名比較はたとひ其の創見にあらずとするも(コールブルックは、十九世紀の初年、逸はやく此の事實を發見し、而して之を對照したる表マックス・ミューレルが『獨逸工場の木片』第四卷四〇四頁に見ゆ)、また其の言語學者的慧眼を以て、新たに附加する所あり。其の比較神話學の創立に至りては、全く渠が言語學者たる手腕に由りて成れるものと謂ふべし。勿論サー・ウイルリヤム・ジョーンスは、一千七百八十八年に於て、業に既に『希臘、以太利、印度の神々に就て』といふ一文を草せしことあれど、こは、未だ以て比較神話學のために基礎を据ゑしものと謂ふに足らず、其の説の皮相なるのみならず、且つ非科學的にして、歴史的關係を明かにせず。蒐集の材料、また如何にも狹隘なるを免かれず。之を其後發達したる比較神話學と比し來れば、其差月鼈も啻ならず。余輩はマックス・ミューレル以前に、グリムあり、ピユルヌフあり、ポップありしを否認するものにあらざるも、是等諸學者の知識は寧ろマックス・ミューレルが比較神話學建設の材料となれるものといはんとす。其の『神話は言語の疾病なり』との説は、今日殆んど、贊成者を見るべからざれど、其の研究方針の正しかりしより見るも、其の學界に及ぼせる影響の多大なるより見るも比較神話學に於けるマックス・ミューレルの勳功は、何人といへども、之を認めざるを得べし。」されど、マックス・ミューレルは、言語の能力を過信したりし人なり。其の神話の根本を研究するに方りても、一々言語學の教ふる所如何と自問し、其の答へを得て、自ら滿足せり。されば、其の神話の定義も、全く言語學より打算せるものにて、『神話は、其の最高の意義よりすれば、心的活動の諸方面に於て、言語が思想に及ぼせる力なり』といへり。是れ神話の問題を解釋するの道言語の外にはあらずとするものなり。其他マックス・ミューレルが、凡ての場合に言語を偏重するは、其の痼疾にして、

或は、『我等肺臓なくしては呼吸するを得ざる如く、言語なくしては、殆んど思想する能はず』といひ、或は『野蠻人の宗教を研究する堅固の基礎は、其の國語を研究するの外はあらず』といへり。是れ學界の諸方面より誹罵嘲笑を招きし所以にして、エールのホイットニーの如き言語學者より手痛き攻擊を受けしに至りては、また奇なる對照と謂はざるべからず。

マックス・ミューレルは、言語學を以て比較宗教學の基礎となせしと共に、梵語を以て比較言語學の基礎と認めたり。即ちいふ、『梵語は、確かに、比較言語學の唯一健全の基礎なり。斯學の研究上、今後も、梵語の外に安全の案内者あるべからず。梵語の智識なき比較言語學者は、數學の智識なき天文學者の如し。或は驚嘆し、或は觀察し、或は發見するとあるべしと雖も滿足を感ずるとなく、確信を感ずるとなく、安心を感ずると無かるべし』(『獨逸工場の木片』四卷一九頁)と。されば、其の宗教に關する研究は自然の勢として、皆印度的臭味を帶び、一千八百七十八年、第一回の『ビッパート』講演者の任に當るやその題目は、『印度の宗教に說明せられたる宗教の起源及發達』(ビ・オリジン・エンド・グロウス・オヴ・レリジョン・アズ・イラストレーテッド・バイ・ヒ・レリジョンズ・オヴ・インディア)なりき。其の出版に係れる『東洋聖經』の如きも、波羅門教に關するもの廿一卷。佛伊那教と佛教とに關するもの十二卷なるに對し、波斯教に關するものは八卷、儒教に關するものは六卷、回教に關するものは二卷に過ぎず。其の好尙のあるところ、知るべきにあらずや。マックス・ミューレルの死するや、同志(此中には、今の英國皇帝もあり。獨逸皇帝もあり。瑞典及び諸威王及び暹羅の皇太子もあり)相謀り、二千五百磅を醵出し、マックス・ミューレル紀念基金として、牛津大學に寄附したり。而して此の基金趣意書の第二條にいふ、『此の基金より生ずる收入は、古代印度の歷史、考古學、言語文學、宗教に關する萬事の調査研究を振作するために、使用せらるべし』と。之を見ても、マックス・ミューレルの學界に於ける勳功の那邊にありしやを知るべきなり。

二　ルナン

マックス・ミューレルが、アールヤ宗教、殊に印度宗教の研究に大功ありしに反し、ルナンは、セム宗教の研究に、其の殊勳を立てたり。渠はマックス・ミューレルと同じく、一千八百二十三年に生れ、またマックス・ミューレルが牛津の比較言語學教授たりしが如く、『佛國大學』の希伯來語教授たりしとあり。一千八百六十三年、『基督傳』

を出版したるため、其の職を免せらるゝに至りしが、爾來星霜を經ること四十年。一千九百〇三年に至り、其の故郷ブリタニーのトレジュールに銅像除幕式ありて、佛國大統領自ら之を除幕せり。是れマックス・ミューレルが、多くの王侯に由りて紀念せらるゝの名譽と相比すべきか。

ルナンがセム人種に於けるは、少き時よりの好尚なりき。其の大學にあるや、『セム語に關して』と題する論文を草して、懸賞を得たることあり。其の『アヴェローエズ及びアヴェローエズ主義』と題する一書は、一千八百五十二年に出でゝ、亞剌比亞哲學に關する空前の名著と稱せらる。それより後ち一千八百五十五年に出せる『セム語略史』は、只首卷を公けにせしに留まるも、數版を重ねしは、人の知るところなり。而して渠は、此書に於て、初めて、大なる宗教學問題に接觸しぬ。他なし、一神教はセム人種本能的の傾向なりとの說是れなり。こは渠が他日(一八八八—一八九四)の著なる五卷の『イスラエル民史』にも見ゆる所にして(一卷四章)即ち其の生涯の持論なり。此說の初めて出づるや、之に對して、マックス・ミューレルは『セム人種の一神主義』と題する一文を草して(『獨逸工場の木片』第一卷三三七頁以下)手痛き攻擊を加へたり。元來マックス・ミューレルとルナンとは、前者が一千八百四十五年パリにありし以來の交友なり。されど宗教上の問題に關しては、此時已に意見の扞格ありしもの〻如く、其の屢次議論を闘はせしと、マックス・ミューレルの『自傳』(一八九頁以下)に見ゆ。而して渠がルナンの一神教本能說に對するや曰く、『セム人種の中には、或はエロヒム、或はエホバ、或はサバオテ、或はモロク、或はニスロク、或はリンモン、或はチボ、或はダゴン或はアシタロテ、或はバアル、或はバアル・ベオル、或はバマル・ゼバブ、或はケモシ、或はミルコム、或はアダラメレク、或はアナメレク、或はニブハズとタルタク、或はアシマ、或はチルガル或はスコテ・ベノテ、或は太陽、或は太陰、或は星宿、或は天の萬軍を拜するものあり。之をしも尙ほ、一神的本能を有するものといふべきか』と。

ルナンは此の批評の出でたる年、去りてスリヤに遊びぬ。而して其の旅中の見聞は、彼が『基督傳』を草するの動機となりたり。此書當路の忌諱に觸れしと前に說きし如くなるが、當時其の評判の高かりしと多く其類を見ず。佛國のみにても、三十萬部を賣り盡し、尙ほ廣く諸國の言に飜譯せられたり。之に次ぎて、『使徒』(一八六六)

『パウロ』(一八六九)等の小著を出せる傍ら、一千八百六十七年より一千八百八十一年にかけて七卷より成れる『基督教起原史』は出でぬ。而してマックス・ミューレルとレヌフに次ぎ、第三回の『ヒッパート』講演者として、『羅馬の制度、思想、教育が基督教と、加特力教會の發達とに及ぼせる影響』と題せる講演を試みたるは、一千八百八十年のことなりき。

ルナンは、斯くして、マックス・ミューレルが、アールヤ語及びアールヤ宗教に於てせしところを、セム語及びセム宗教に於てせり。而して渠は、本來マックス・ミューレルと等しく言語學者にてはありしかども、マックス・ミューレルの如くに、言語萬能主義を奉ぜしものにあらず。其の宗教問題を解剖せんとするや、必ず獨得の熱烈なる同情力を之に應用せり。彼は事實の拾蒐を好み、而して之を觀察するに、一隻眼を有したり。其の宗教の形式に對する同情と、其の經典に對する有意的研究とは、渠が生涯を通じて、宗教研究の方針なりき。曾て基督教を論じて曰く、『基督教は、意思の屈服よりして、秩序、政体、權威、從順を出せり。基督教は、烏合の衆に組織を與へ、無政府主義に教練を施こせり。是れ自然界の法則を犯すものと稱せらるゝ、夫の奇蹟とは自ら別種の奇蹟なるが、こは抑も、何に原因するや。他なし、イエスが、其の弟子等に強く接木したる精神に由る。其の己を捨て、現在を忘るゝ美なる精神に由る。其の野心を殺して心内の喜びを求むる熱情に由る。其の幼兒に對する無比の敬意に由る。イエスの所謂る「爾曹のうち首たらんと欲ふ者は、爾曹の僕となるべし」(馬太傳二十章廿七節)との言の力に由る』(『ヒッパート講演』五九頁)と。ルナンに對して、如何ほど惡感情を懷けるものといへども、之を讀みては、尚ほ首肯せざるを得ざるべし。マックス・ミューレルを呼んで言語學的宗教學者と、いはゞルナンは心理的宗教學者といふべしとするは、實に之がためなりとす(ジャストラウ『宗教研究』(セスタディー・オヴ・レリグヨン)五〇頁を見よ)。而してこは、ルナンの長所なると共に亦その短所なり。」

即ちルナンは、余り詩的の想像に馳せて、冷靜の觀察を勉めず、徒らに判斷の公平を期したるため、明快一定の態度を欠くとの評あり。彼は、問題の兩面を觀察し、之を辯護するに同じ熱心を以てするの傾向、老境に入るも隨ひて、益々甚だしく、或時は、一方の辯護者にして、或時は、他方の辯護者たり。人をして、判斷に迷はしめぬ。而して、ルナンが、其の態度は、一時、佛蘭西の學界に波及し、宗教に對して、公平を標榜し、

其實半ば冷淡に、半ば感情的なるものと稱してルナン主義と呼ぶの風をさへ惹起せり。ルナンの說、孟浪樂天なると共に、曖昧、神秘、諷刺的、理想的、懷疑的なりと稱せらるゝは、蓋し之がためなり。而してルナン自らも亦、己れの自家撞着を認めしが、渠は之を己れの欠點とせず、この一事却て『人類の味ひ得る最も痛切の知的快樂』なりといへり。之が原因は、渠が、人種に於てブリタニー人とノルマンヂー人の血を併有し、敎育に於て、敎會的と科學的の素養を兼具し、双方とも相平衡して、互ひに軒輊する所なかりしためなりといふものあり。或は然らん。

三　チーレ

和蘭のチーレは、前二者よりも年少なること七歲なり。而して言語學者なるに於ては、前二者と相同じきも、其のセム語にアールヤ語に共通せる點よりいへば、正しく前二者を併はせし資格を有す。されば、アールヤ宗敎に關しては、一千八百六十四年、夙に、波斯敎の歷史を著はして、學界に波斯敎研究の精神を鼓吹し、セム宗敎に關しては、一千八百六十九年―七十二年『埃及及びメソポタミヤ宗敎比較史』を出し、英佛兩語に飜譯せられたり。一千八百九十六年に第一卷を出せる『古代宗敎史』は、未完にして著者永逝したりと雖も、其の規模は、埃及、バビロニヤ、アッスリヤ、波斯、印度、希臘、羅馬等に亘りたるものなり。またチーレの宗敎學に於ける、獨りセムにアールヤの兩種族に限られしにあらず。一千八百七十三年には『宗敎史に於ける野蠻人種宗敎の地位』と題する書を著せるとあり。要するに、渠は、世界宗敎全体に關して、豐富の知識を蘊蓄せるものにして、宗敎史の逸品と稱せらるゝ、其著『宗敎史梗概』（一八七六）の中には、（序文一〇頁）、たゞケルト宗敎と日本宗敎とには、通せざることを自白せる程なり。『大英百科全書』の編者が、斯くの如き博識の學者を擧げて『宗敎』なる一項の起草を托したりしは、誠に、其の撰を誤まらざりしものと謂ふべし。

彼は、前二者と異にして、『ヒッバート』講演者には擧げられざりき。されど一千八百九十六年と九十八年との兩回『ギッフォルド』講演者に擧げられ、エデンバラ大學に於て、宗敎の永久的要素と一時的要素につき、蘊蓄を傾けたり、是れ即ち其の『宗敎學原論（レリジョン）』なり。ジャストラウ此書を評して、『現時宗敎學の到達せし高さを示すもの、此書に過ぎたるはあらず』といひしは（『宗敎研究（ヴェルレリジョン）』四九頁）或は師弟の情に私するの嫌なしとせざれども、其の生涯の傑作たるとに於ては、何人も異議なかるべし。而し

て、著者が本來の面目は此書によりて初めて發揮せられたりと謂はざるべからず。そは、著者の宗教哲學は、此書最も能く之を明かにするを以てなり。

チーレは元來、歴史の研究に腐心したりし人なり。現に、此の『宗教學原論』(一卷一七頁)の中にいふ、『余は、何事よりも多く歴史の研究に關係せり。余の公けにせし目星しき著述は、悉く歴史的のものなり。余の故友、キューチン常に曰く、「余若し批評家的ならずば零なり」と』。果然、其の著述に歴史的性質のもの多きは、已に前に說けるところを以て知るべし。其の『バビロニヤ・アッスリヤ史』(一八八五—八七)に至りては、天下無敵の稱あり。されど、チーレが歴史に於けるは、其の生涯の目的にあらざると、猶ほ其の語學が、生涯の目的にあらざりしと等し。チーレは、語學に由りて材料を得るが如く、また歴史によりて材料を拾蒐し、その宗教哲學を大成せんとしたりしなり。其の主として、勞力を、歴史の研究に用ゐたりしは、其の地位、これが主因たり。蓋しチーレは、一千八百七十七年を以て、ライデン大學の宗教史及び宗教哲學教授に任せられたるを以てなり。而も其の頭腦の哲學者的なりしことは、此の『宗教學原論』最も能く之を證明し、その著『比較宗教史に對するアッスリヤ學の結果』(一八七七)之を證し、その『宗教史概概』また之を證す。而してかの『大英百科全書』の『宗教』の項には、比較史的宗教學と心理的人性學と、宗教哲學との三方面よりして之を研究したりしことを記せり。其の素養、其の好尙、其の努力また粗ぼ察し得らるゝにあらずや。ジャストラウが、チーレを呼んで哲學者的宗教學者といひ、以て、言語學者的宗教學者たるマックス・ミューレルと、心理的宗教學者たるルナンとに對比せるに、(『宗教研究』五〇頁)蓋し能くその特色を捕へ得たるものなりとす。而して、マックス・ミューレルや、ルナン等の宗教學に於けるは、其の片手業なりしに反し、チーレが專ら之を本領となせし一事は、宗教學に志ざすものゝ特に記憶すべき一事なり。

マックス・ミューレルが、ルナンに對する友情は、その若き時より其の死に至るまで渝らざりしと、前にも已に之を說けり。また、チーレは、其の『宗教學原論』の開卷第一頁にマックス・ミューレルを呼んで、『我畏友』といへり。故にマックス・ミューレルの他二者に對する關係は明なれど、チーレとルナンとの關係は、如何なりけん、余今坐右に之を知るべき材料なきを憾みとす。而して、三者の宗教的意見は、多く齟齬し

て相容れず。マックス・ミユーレルは、チーレに對して、『多くの點に於て、其見る所を異にす』といひ、(『宗教の起源』七六頁)チーレまたルナンに反對せるもの、一再にして止まらず。例せば、ルナンの所謂る宗教は、人類が、その周圍の妨害力を宥めんとの勤勞に出づとの說は、チーレの取らざる所なり(『宗教學原論』第二卷一三五頁)。然るに三者等しく、宗教界より異端を以て目せられしとあるは、奇ならずや。ルナンが、基督傳を草して、其の地位を失ふに至れるは、前に已に之を說けり。チーレまた屢次キユーチンと共に、破壞的批評家として、所謂る正統神學者の忌むところとなりぬ。一千八百七十三年、ヂーン・スタンレーは、悪書を發して、ウエストミンスター・アツベイに於ける一講演をマックス・ミユーレルに依囑せしに、この事、端なく教界に一波瀾を捲き起せしとあり。喬木風多し。此の三者が等しく異端視せられたるは、必ずしも、神學上の意見にのみ由るにあらざるべし。

ルナンは、一千八百九十二年、六十九歲を以て先づ逝き、次で、マックス・ミユーレルは、一千九百年、七十七歲を以て之に踵ぎ、前後に、チーレは、一千九百〇二年、七十二歲を以て、之が殿をなしぬ。今や、三者の偉勳は內外之を傳へ、その稱讃者は、天下に滿つ。而してルナンのためには銅像成り、マックス・ミユーレルのために研究基金は、募集せられたり。德望この二者よりも高くして、學勳また此の二者に優れたるチーンに對しては、和蘭は、果して何をなさんとする乎。宗教學界また何を以て之を紀念せんとする乎。

(明治三十九年一月横濱浸禮神學校に於ける講演を訂正せるものなり)

宗教學と言語學

宗教の研究上、言語學は誠に必要缺くべからざるの一利器なり。マックス・ミューレルの如くに、之を以て唯一の利器と見るは當らざれど、人類學、人種學、考古學、心理學、神話學、社會學等の補助科學に比して、毫も遜色あるものにあらず。否その宗教學に貢献する所は、却て是等の諸科學に優るものあらんとす。言語學ならば、如何にして、時代を異にし、場處を異にし、人種を異にし、感情を異にせるもの〻宗教を研究し得べきぞ。言語學ありて、宗教研究の範圍益々開拓せられ、其の研究益々緻密なるを得べし。言語學は蓋し宗教學に取て、望遠鏡と顯微鏡との作用を兼ぬるものといふべき乎。

一　範圍の開拓

望遠鏡なき時代にも、天文學は、存在せり。されど、望遠鏡出で〻天文學の視線益々廣く、驚くべき發達を遂ぐるを得たり。宗教學また然り。言語學の發達と共に、從來未發の領土開け、東西古今の宗教、殆んど知られざるものなきに至りぬ。

之を埃及の宗教に就て見るに、プルターク、ヘロドタス、ヂオドラス、歴山府のクレメンスなど、多少之に關して報道を與へざるにあらず。されば埃及古代の宗教が、的確に今人に知られ初めたるは、千七百九十九年、かの有名なるロセッタ石が發見せられ、シャンポリオンや、レプシウスが畫文字解讀の方法を發見したるより以後のことなり。是れより先き、畫文字が一種の符徴と認められし時代には、埃及宗教の神秘、スフインクスの謎と共に、之を解くよしもなかりしなり。然るに、一千八百四十二年、レプシウスは、所謂る『死者の書』(ブック、オヴ、デッド)を世に紹介し、爾後レヴイル、レスーフ、バッジ等の諸家、種々なるパピラス原本を出版するに至りて、學者研究の途略ぼ具はり、爾後新しき材料の發見と共に年一年斯學のために、新しき知識を添へつ〻あり。

眼を轉でて、アッスリヤ、及びバビロニヤの宗教を見よ。ヘロドタス、ユーセビアス、シンセラス等の著書を初め、タルミュードや、舊約書などの中にも、此の宗教研究の材料是れなしとせず。されど、是等は、斷簡零墨にして、到底充分なる知識の淵源といふに足らず。然るに、一千八百四十二年以後、英佛米獨の諸學者は、テグリスの兩岸、ユフラテの谷間の掘に從事し、神社、王宮、神像、家具、石碑等を初めとして、許多の

文書を發見し、次で一千八百五十三年には、英國のレイアードなるもの、ラッサムの補助を得て、ニネベの宮殿に、アスルバニバル王の蒐集せし圖書即ち二萬以上の瓦片を發見するに至り、知識に渴せし學者は、滾々たる水を見るの思ひをなせり。されど、眞に、是等の知識の泉を掬して、此の渴望を醫するを得せしめしは、楔形字の秘密の鍵を發見せし佛國のジュール・オーパル、愛蘭のエドワード・ヒンクス、英國のフォックス・タルボット等なりしなり。

レプシウスやシャンポリオンの大恩人にして、またマクス・ミューレルには、父にも等しかりし男爵ブンセン（一七九一―一八六〇）が、ゲッチンゲンに學生たりし時代には、獨逸人などは、毘陀の存在をさへ知らざりき。それより幾年かを經て、ブンセンは、其弟子なるニウ・ヨルクのアストルの助力に由り、印度に渡航せんとせし時の如きも、其の目的は、印度に毘陀と稱するが如きものゝ有りや無しやを發見するにありしといふ。（マックス・ミューレル『自傳』（マイ・ライフ・アット・バイオグラフィー）一三頁）。斯くて一千八百四十六年、當時の一青年マックス・ミューレルが、力荷毘陀の稿本を携さへ、當時英國駐在の普國大使ブンセンを訪ふや、ブンセン慶して曰く、『余は活きて、毘陀を見るを得たるを喜ぶ。君若し欲する所あらば、余に告げよ。余が君を見ると、猶ほ若返へりし已れを見るが如し』と。（右同書一九三頁）。當時印度宗教に關する知識の狹隘なりしを知るべき而已。勿論印度の文學は、一千七百八十三年、サー・ウィルリヤム・ジョーンスが印度に赴任せし以來、研究の端緒は開かれたれど、當時毘陀は、神聖不可侵のものとして、外國人は之に手を觸るゝを得ざりき。之に手を觸れて、研究を初めたりしは、コールブルックにして、一千八百〇一年には、其の毘陀に關する論文『亞細亞探究』（エーシアチック・レサーチス）誌上に現はれしも、尙ほ多數の注意を惹くに足らず。又一千八百三十八年にはエフ・ローゼンと稱する獨逸の一學者、力荷毘陀の一原本を出版したれども、それは最初の十分の八にて、完璧にはあらざりき。毘陀の研究に、確乎不拔の衝動を與へたりしは、ルドルフ・ロートにして、その『毘陀の文學及び歷史』（オン・ゼ・リテラチュア・エンド・ヒストリー・オブ・ゼ・ヴェダ）はかのマックス・ミューレルがブンセンに面會せしと同年、即ち一千八百四十六年を以て世に出でたり。爾後一千八百四十九年には、マックス・ミューレルの力荷毘陀出でゝ、新舊約書の外に、宗教書なしと思へる人々に一驚を喫せしめ、引續きて、毘陀時代の文學研究熱は、英國及び歐洲大陸を通じて、益々昇騰し、最近五十年に於て、毘陀教研究の材料殆んど具

はらざるものなきに至りぬ。是れ實に梵語學者拮据經營の結果なり。

波斯教の歐洲に知られ初めしは、決して新しきことにあらず。紀元前四百年の頃希臘のプラトン、已にゾロアストルのことを報道し、ヘロドタズの如き、又細かに波斯教徒の禮典、祭司、犧牲、潔齋等のことを記載せり。その他、プリニーの如き、プルタークの如き、古代にありて、驚くべき知識を此の問題に貢献せしものなれど、波斯教研究の新紀元は、佛人アンクテル・ヅペロンによりて開かれたるなり。ヅペロンは、一千七百三十一年パリに生れ、少時より東洋文學の研究に、その身を委ねたり。斯くて彼は、希伯來、亞剌比亞、波斯等の諸國語に通ずるに至り、其の學問に對する熱心は、やがて東洋學者の注意を惹くことゝなりしが、一日パリの王立圖書館に入り、『ゼンド、アヴエスタ』の零片を見て、其の全編を回復し、其の原文を讀み得んがため、印度に渡航せんとの念を起せり。ヅペロンの友人等その志を諒とし、當時恰かも出發の準備中なりし遠征軍に於ける或地位を周旋したりしが、成功せず。ヅペロン遂に、一箇の兵卒となりて渡航するに決し、而も出發の前日までは、何人にも此の事情を告げざりき。是れ人の之を止むべきを恐れてなり。また彼は、其の弟を呼び寄せ、涙を流して之に告別せしが、此の弟が、計畫中止を苦諫するには、耳を假さゞりき。彼の荷物といふは、小さき麻布と、希伯來語の聖書と、數學機械一函と、モンテイヌ及びシャロンの著述の外には、何物もあらざりき。斯くて、他の新兵と共に、雨と寒氣とを侵しつゝ、十日の旅程を重ね、該遠征軍の出帆すべき港にとは到着せしが、此際佛國政府は、ヅペロンが學問に對する熱情に感ずるの余り、兵卒たることを免じ、且つ些少ながら一年五百レヴル即ち今日の二百圓弱を給はることゝなり居れるを發見せり。之と共に佛國東印度會社また彼に無料渡航券を與へたりしかば、ヅペロン即ち一千五百五十五年二月七日を以て印度に出帆す。此時渠の年齡僅かに廿四歲なりき。彼が印度にありし最初の二年は、學問の上よりしては、何等の得る所もなかりき。彼は、病氣に罹り、また旅行をなし、また七年戰爭の余波こゝにも及びたりしを以てなり。一千七百五十九年渠はスラトに到る。こゝには、波斯教徒の一團体居住し居たりしかば、之によりて、其の學問の目的を達せんとてなり。渠は、此の波斯教徒の僧侶に遇ひ非常の熱心、非常の忍耐を以て、ゼンド語の教授と、アヴエスタ原本の供給を懇望し、遂に其の目的を達したり。それより彼は、此の社會にありて起

居すること七閲年。一百八十の貴重なる原本を得て、一千七百六十一年歐州に向ひしが、直接にパリに入らず。却てオクスフォルドに赴きこゝに他の原本と比較して、其の眞僞を確かめ、飜譯に時を用ゆること十年に及び、一千七百七十一年、佛語のアヴエスタに註解を添へて出版せり。今日にてこそ、アヴエスタには幾多の譯本もありて、其中には、ヅペロンの此の譯本に優れたるものもあれ。此時には此書にはアヴエスタ譯本の先驅として、歐州是れより波斯教の眞相を知るに至りし最初の紹介者たるを思へば、また決して捨つべきにあらざるなり。

その他レッグの四書(一八六一年)五經(一八七九—八五年)及び老子經(一八九一年)に於ける、チャンバレインの古事記(一八八三年)に於ける、アストンの日本紀(一八九六)に於ける、何れか、宗教學のために、新たにその領土を開拓せざりしものぞ。言語學と宗教學の關係の親密なる、また言ふを待たざるなり。

二　研究の周到

されど宗教學者として、研究に周到ならんとすれば、自ら飜譯書を去りて、原書に就くを要す。原書によらずして、宗教を研究するは、或は淺薄に驅せ、或は誤解に陷るの基なり。昔しは、學者未だ亞剌比亞語に通せず、『コーラン』及び回教學者の著書を、譯書によりて研究したりし間は、回教に對して種々の誤解を懷き、正確の所見に達すること能はざりき。されど原語に由りて直接に、その材料を研究するの必要漸く學界の認むる所となりてより以來、回教に關する學者の態度、嘲笑、罵詈より一轉じて、大に同情的傾向を顯すに至りぬ。是れ飜譯の書籍は、教義、禮典、實行等の方面讀者に傳へて、遺憾なきを得るとするも、其の宗教の精神に徹底せしむるに由なきを以てなり。之に反し、原書に就きて宗教を研究せんか能く此の經典を生せし國民の精神を酌み取り、能く其の熟語に附隨せる聯想を辨ふるを得べきなり。(南條文雄氏譯『比較宗教學』廿三、四頁參考)

希伯來語に、『ゴエル』といふ言あり。今日は、之を『贖主』と譯して、盛んに、神學上に應用し居ることなるが、若し夫れ此語は、裁判所の設けなかりし時代の用語なるを知る時は、自ら一種の妙味を感ずるに至るべし。蓋しゴエルの元來の意味は、『復讐者』なり。家族の中に、他の殺害に遭ふが如きものある場合には、ゴエルは、之に復讐して、其の損失を贖ふの義務あり。此の復讐制度たる、其の背後には、多少正義てふ觀念

の潜在せざるにはあらず。されど、後世、其罪にあらずして不幸の中に沈淪せるヨブが、其の苦痛を『贖ふ』宇宙の主宰を『贖主(ゴエル)』といひしと相比すれば、(約百記十九章二十五を見よ)其の用法の變遷、また甚だしと謂はざるべからず。また此の兩意味の中間に、猶太民族の宗教的、社會的變遷を窺ふべき一つの面白き意義あり。他なし、裁判法の起ると共に『ゴエル』は復讐者の義務を負はざるも可なるに至り、隨つて、遺族を保護して、之を助くるものゝことをゴエルと呼ぶに至れるとは是れなり。また貧しくなりつゝ親族の財産を『贖ふ』ことも、ゴエルの一義務となりしかば、希伯來人がバビロニヤ人の手に敗られて、其の土地を失へる時、神に對して、此の不幸より『贖(ゴエル)されん』ことを求むるに至りぬ。斯くして、希伯來人の神なるヤーウエは、希伯來人のゴエルと仰がるゝに至り、爾後この希伯來人の神觀進化して、單に國家的の神にあらず、萬民の神なりと認めらるゝに至りては、此のゴエルといふ語の意義も、次第に靈化し、天地の大審判者の義と愛とに無上の信任を表する語として用ゐらるゝこととなれり。(ジャストラウ『宗教學(ゼ・サイエンス・オヴ・レリジヨン)』三三九頁以下、ヘスチングス『聖書辭典』第二卷二二二頁以下參考)。

印度の教論哲學に、三德といふものあり。唯識述記には、三德應名、勇麁闇也、……今云、黄赤黑云々とあり。而して、是れのみにては、其の意義解し難きも若し此言の歴史に溯りて考へなば、人皆自ら首肯するを得べし。今此中の刺闍なる一語に、就て之を說かんに、刺闍とは、ラジュ即ち有色若しくは赤色なる語原より出でし言にて、毘陀時代にありては、空中の雲ある部分を指すに用ゐられし言なり。この意義よりする時は、即ちかの盧遮那(光明徧照と譯せらる)といふ言に反對す。盧遮那は、光のある所にして、刺闍は、こゝに達する能はざりしなり。然るに、毘陀時代以後に至りては、其の義移りて、雲霧暗黑等を意味するに至り、遂にまた塵を指すことゝなりぬ。而して三德の刺闍は即ち此の最後の意義より轉化せるものにして、刺闍は、心を汚染するものといふの義なり。此故に、刺闍を名けて赤といひ、若しくは、塵といふは、決して作爲的の配當にはあらず。此の語の歴史即ち之を固有せるものなりとす。」

日本語にも此類のことは多かるべし。我邦上古、酒のことを『くし』又は『き』といふ。此故に『みき』は御酒にして、酒に對する尊稱なり。然るに後世、『みき』といへば、神に奉る酒を意味することとなりき。また『さかき』は『榮木』にして、繁茂したる木をいふもの

なり。此故に、上古の所謂る『さかき』は、榊、榁、木犀、桂、龍眼木等の總稱なりしに、是れまた、何時の頃よりか、獨り龍眼木を指して『榊』と稱するとなれり。是等の例に當るものは世界何れの宗教にも是れありて、一語の中其の宗教發達の歴史を窺ひ得る場合も尠からず。隨つて是等の熟語だけを精密に研究するだけにても往々にして、其の經典を研究するに等しき價値あることあり。

歐米の人士が、一時、佛教を過重して殆んど之を基督教に同視せんとするほどの傾向ありしは、蓋し譯語の罪に因れるもの多し。即ち、歐語を以て佛教を傳ふるもの、頻りに基督教の術語を用ゐ、以て之が説明を試みたりしかば、人皆基督教の思想を以て直ちに佛教を解し、佛教の『罪惡觀』は基督教の『罪惡觀』にして、佛教の『救拯觀』は、基督教の『救拯觀』なりと速了せり。その他梵語の Trishna (愛)を Lust (慾)と譯し、梵語の Sangha (僧侶)を Church (教會)と譯し、梵語の Sila (戒)を Commandment (誡)と譯し、梵語の Dharma (法)を Law (律法)と譯したるために幾許の誤解を生せしや知るべからず。是等は、只大綱に關するものながら、其の細目に至りては、飜譯に到底原語に存する微妙の意義と聯想とを傳へ得ず、ために、人を誤まりたること必ず多かるべし。斯くの如き弊害を救ふの道は、獨り言語學あるのみにして、言語學の力により、人初めて他宗教の精神を咀嚼することを得べきなり。

三　比較言語學の効用

比較言語學とは、同一系統に屬する諸種の言語を比較研究する學問なり。故にその本來の意義よりすれば、廣く適用せらるべきものながら、之をアールヤ系統のものに局ること、今日學界の慣例なり。而も、此の狹き意味よりするも、其の宗教學に及ぼす効用、偉大なるものありて存す。ビュルヌフ曰く、『比較言語學は、最も古き文書よりも尚ほ古き時代に我等を案内し、該時代に於ける全人種の懐抱せし宗教的觀念が我等を紹介するものなり』と。乞ふ之が事實を擧げしめよ。

所謂るアールヤ系統と稱するもの、歐州にありては、希臘、伊太利、ケルト、チユートン、スラヴ、リスアニア、アルバニヤの七にして、亞細亞にありては、印度、波斯、アルメニヤの三なり。是等の言語に類似あるとの初めて發見せられたるは、一千七百八十六年にして、サー・ウイルリヤム・ジョーンスの力なり。其後コールブルック(コールブルックの各國語對照表は、マックス・ミユーレル(チップス・フロム・ゼ・ゼルマン、ウオイクショップ)の『獨逸工場の木片』第四卷四〇一頁

以下に見え、グリムよりも、ボップよりも、遙か以前に作りしものなり)、シュレーゲル等を經てボップに至り、比較言語學の基礎略ぼ定まりぬ。シュミットの調査によりて拉典と希臘に共通の言語百三十二。希臘と印度、波斯語に共通の言語九十九。スラヴ・リスアニヤと印度・波斯語に共通のもの六十一。スラヴ・リスアニヤとチュートンとに共通のもの五十九。印度・波斯語と拉典とに共通のもの二十ありといふ。試みに一例を擧げんか。梵語に家のことをダマ及びダムといひ、古代波斯語にデマナと呼び、希臘語にドモスと呼び、羅甸語にドムスと呼び、愛蘭語にダームと呼び、スラヴ語にドムと呼び、而して英語にはドメスチックといふ語あり。抑も此の諸人種は、今日極めて遠隔せる土地に住しながら斯く相似たる言を有するものは何ぞや。是れ彼等が、曾て、相接近して、共に家屋の内に住居せる時代あるを證するものにあらずや。又梵語に船のことをナウといひ、波斯語にもナウといひ、希臘語にナウスといひ、拉典語にナヴイスといひ、古代愛蘭語にノイ若しくは、ナイといひ、古代獨逸語にナワ若しくはナウイといひ、波蘭語にナワといひ、而して英語にはナウチカル若しくはナヴイゲーション等の語あり、されど、帆檣、帆、帆桁等の語に至りては、此各國語相同じからず。以て知る、此の諸人種、曾て相接近して居住せる頃は、多少航海上の知識を具へしものなりしも、舟を行るには、檣を用ゐしものにて、風力を借ることなく、只小さき河々を上下する位に止まりしものなることを。斯る事情にて、シュミットの時代に、夙に、如上の各種族、元は、同一人種なりと揣摩するものを生じ、マックス・ミューレルに至りて此說非常の勢を得て、人種上の正統說と認められ、亞細亞のパミール高原近傍を此の人種の原住地となすに至りぬ。今日にては、此の同一人種說は、孤城落日の觀ありて、亞細亞を原住地とするの說、また殆んど倒れたれど(テイロルの『アーリヤ人の起源』(ゼ・オリジン・オヴ・ゼ・エリアンス)を見よ。特にその第一章を見よ)、此の異種の國民が、歐亞何れかの部分にて、曾て同住せしものなるを證せし比較言語學の功、決して沒すべからず。

マックス・ミューレルは、此の比較言語學の方式を、比較神話學に應用し、所謂るアーリヤ語族が、有神論者なりしことを證明せり。即ち、希臘の神話中、最も神聖の名たるゼウスは、梵語のヂアウス、拉甸語のジュピトルのジュ、アングロ・サキソンのチュウ、舊獨逸語のチオに當るを以てなり。マックス・ミューレル曰く、「こは、希臘語が、梵語

より借りしにもあらず。羅馬人、獨逸人が、希臘人より借りしにもあらず。即ち、此諸人種の祖先が同一の言語を用ひ、同一の宗教を奉ぜし時より存在せしものなり。即ち同一の土地を辭して、右と左に分かれし前より存在せしものなり。さすれば、此の尊き語により、アリヤン人種の最も舊き宗教思想の幾分を見るを得べし』と。

(因みにいふ、エドキンス氏は、支那語の『帝』も、之に關係あるにあらずやと疑へり。(『古代宗教思想の傳播』三六、七頁)雖者或は此神に關する各國の神話相符合せず。また之に應ずるの名、波斯語とスラヴ語とには存せずと唱ふれども、(テイロルの『アーリヤ人の起源』三二二頁を見よ)波斯語にデーワといふ語あり。リスアニヤ語にデヴアスといふ語あるを知らざるべからず。且つ神話の變化は珍らしきことにあらず。波斯の善神阿修羅は印度の惡鬼にして印度の善神提婆は、波斯の惡鬼たるが如き例あり。獨り此場合を怪しむべきにあらず。

要するに、比較言語學は、文學の示さゞる所、歷史の說かざる所を補遺するものにて、比較宗教學に取りては、その効用頗る多し。少くとも、其の起源に取りては、最大要素たりしと、猶ほ近代の發掘事業が、比較宗教學の進化を助くるに等し。マックス・ミュールが、元來比較言語學者にして、比較宗教學者となりしもの豈偶然ならんや。

(明治三十九年一月横濱浸禮教會神學校に於ける講演に訂正を加へしものなり)

自然禮拜の種類

低度の文明にある人類の宗教は、之を其の禮拜の對象に由りて分類せば凡そ四種となすを得べし。曰く、自然禮拜、曰く幽魂禮拜、曰く庶物禮拜、曰く一神禮拜。而して此の諸禮拜は、更に幾多の小部に細分するを得るものにして、今は其中の自然禮拜に就て述ぶる所あらんとす。

佛國のレヴィルの說によれば、自然禮拜を分ちて二となす。大とは風、雨、雷電、天、地、日、月、湖、海、等にして、小とは、山、河、岩、石、泉、井、植物、動物等なり。マックス・ミューレルの可觸物禮拜、半可觸物禮拜、不可觸物禮拜は、此の自然禮拜に庶物禮拜を加へて三分したるものゞ、ヂーレの高等自然宗教、劣等自然宗教とは、鬼神禮拜を高等とし、庶物禮拜、幽魂禮拜、自然禮拜を劣等としたるものにして、共に特長ある分類法ながら、レヴィルの明白に如かざるべし。是れ余が、こゝに此の分類法を用ゆる理由なり。

一　小自然禮拜

山嶽禮拜は、廣く世界に行き亘れる習慣なるが如し。希臘人のアルゲウス山に於ける、埃及人のゲベル・バーカルに於ける、セム人種のホレブ、シナイ、ヘルモン諸山に於けるが如き是れなり。彼等は、山に生命あり、魔力あり、感情ありとなして或は之に祈禱を捧げ、或は之に宣誓し、或は之に犧牲を献ぐ。其の理由は、いふまでもなく高大秀麗、日月を生じ、穹窿を支へ、越へ難く、敵し難きの觀あるより來りたるなれど、又之を神仙の接處、祭祀の靈場とするより變じたるも尠からざるべし。マックス・ミューレルが、山に祈禱を捧ぐる理由を記して、山は、人の祈禱に傾聽するの觀ありと言ひしは、決して空想といふべからず(「宗教の起源」一九五頁)。

河川禮拜の實例は、其數夥だし。恒河や閻牟那の印度人に於ける、チベルの羅馬人に於ける、ナイルの埃及人に於けるが如きは、蓋し其中の著しきものなり。セチカ曰く、「我等敬畏を以て、大河の本末を觀念す。我等突如、暗中より奔跳し來る小川のために祭壇を設ゝ」と。彼も亦河川禮拜者の一人なりしものか。蓋し河川は、田地を肥やし、牛羊に飲ひ、敵襲を防衛するの外、奔流激湍、何處より來り、何處に往くを知らず。是等は、勿論幼稚なる原人に敬畏の念を起さしめし重もなる原因なり。

岩石禮拜（Litholatry）に二種あり。(1)特種の石(巨石、奇石、天石等)の禮拜と(2)平凡な

れども、而も由緒ある石の禮拜。是れなり。第一種に關しては、フインランド人、ラプランド人、亞弗利加黑人、南洋諸島人の間に、其の著しき實例を見るべく、白露人の中にもまた多少その形迹あり。隕石の禮拜は、希臘人、羅馬人の間にも盛んに行はれたりし所。今日にても、エスキモーを初め、其他の野蠻人種は、大抵皆之を拜す。雷石に至りては、文明人の中にすら、尙ほ多少之を畏敬するものあり。更にこの形狀の奇なる石を禮拜するものは、印度人(特に南部印度人)の如き、ヘブリヂーズ島人の如き、ピレニーズ山間の住民の如き、北米赤色人の如きあり。また古代にありては、セム人種、希臘人種、羅馬人種の如き、中古にありては、チユートン人種の如き何れも石に膏を塗り、犧牲を献げ、(時としては、人身犧牲を献げしことあり)また祈禱をなせり。次に、第二種の禮拜はたとへば何人かの守り本尊たりし石が、神變不思議の力ありとして、禮拜せらるゝが如き場合をいふ。ブッシユメン、バタゴニヤ人、エスキモー人、アンダマチス人等何れも此の習慣あり。かの石像禮拜は蓋し是れより發達せるものにて、文明の程度の高尙なる埃及、バビロニヤ、墨斯哥、印度、希臘等を初め、フインランド人、ポリヂシヤ人の間にも、また行はれたり。其他一たび何等かの不思議を顯せし石の禮拜を受くるに至れるもあり、祭壇變じて、神と崇めらるゝに至れるもあれど、是等は寧ろ、庶物禮拜に加ふべきものならん。岩石禮拜の特別の例としては、回教徒の禮拜するメッカのカアバ石の如きあり。又エペソのヂアナ神祉の石の如きあり。歐羅巴の各部、亞細亞の南西部に散在せるメンハーと稱する立石は、即ち岩石禮拜の名殘りなり。此のメンハーは、パレステナ附近の諸國には、許多是れあるに、その國内に是れなきは、正統教を奉じたる諸王之を破毀せしに由るとは、コンドル少佐の説なりとす。(メンジーズ『宗教歴史』(ヒストリー、オヴ、レリジヨン)五七八頁參考)。

泉、井は、古蹟聖處として尊崇せらるゝ實例、世界各國に是れあり。聖書に見ゆるものゝみにても、カデシ(創世記十四章七)、ラハイロイ(同十六章十四)、ベエルシバ(同廿一章廿九以下)、エンロゲル(列王記上一章九)、ギホン(同三十八節)等あり。埃及にも、ヘリオポリスに一つの井ありて、是れは、日の神、レーが顏を洗ひし所なりと稱せられ、國王のレー神祉に參詣するもの、亦皆此の例に倣へり。爾來、此の井は、神聖視せられて、今日に至り、亞剌比亞人は、之を日の泉と稱し、基督教徒は處女マリアが、イエスの襁褓を洗へる所なりと信ず。(ロベルトソン・スミス『セム人種の宗教』六六頁以下

參考)。其他、此類の事實は、枚擧に遑あらざると共に、泉井を直ちに神とし崇めたる例も亦是れなきにあらず。ロベルトソン・スミスは、民數記廿一章十七、十八の『井の水よ、湧き上れ、汝等之がために歌へよ』といふを引用して、セム人種が、井水を活物視したるの例となし、且つ附言して、神聖の井は、託宣の力を具へ、供物受否の意思あるものと思はれたりといへり、(『セム人種の宗教』一三五頁)。アナトリヤ人が、泉を神と思ひて、之を禮拜するとは、ラムゼー之を記し(ヘスチングス『聖書辭典』第五卷一二〇頁左)、英人の、井に祈禱と供物をなし、以て其の恩寵を求めたりしとは、メンジース『宗教歷史』三〇、五七頁)之を說けり。回教徒のゼム・ゼム井に於ける、また此の一種なり。ジェヴォンスはいふ、『今日平凡なる、神聖の井なるものは、素とは、神とし拜せられしなりとの說は、粗ぼ明了なり』と(『宗教歷史緒論』二三二頁)。若し然らんには、泉井禮拜の實例また世界に普しといふべし。

植物禮拜(Phytolatry)に就ても、泉井禮拜と同樣、神の聖處としての禮拜か、將た神としての禮拜か、明了に區別すべからざる場合少からず。されど、之を神とし禮拜せしものゝ例を擧ぐると、必ずしも難からず。マンハートの『原野及び森林禮拜』や、フレーザルの『黃金の枝』などには、歐羅巴の農民間に、樹木禮拜の習慣存せることを列擧せり。或は亦、北米赤色人のアルコンキン族の如き、チユートン人種の如き、桑皮樹を人類の祖先と認めて之を禮拜たる人種もあり。その他セム人種は、雌棗を、印度のドウヴイヂアン人種は、他の雌樹を、埃及人は、桑を、白露人は、玉蜀黍若しくは、馬鈴薯の如き食用植物を、レヴイルの『白露及び墨斯哥宗教』一六五頁)を禮拜せり。カナン人の禮拜したりてふアシラ像は(士師記三章七、六章二十五、列王記下二十三章六)大木の幹なりしは、能く人の知るところ、而してアシラとは、神の處にはあらず、此の大木を呼ぶものにて、女神アシタロテを代表す。希臘にも植物禮拜の證迹多く、或は之に衣服を着せしめ、或は之に冠を戴かせ、或は行列をなし、或は犧牲を供し或は祈禱を捧げ或は接吻をなし、此の樹下を過ぐる時は、必ず相當の儀式を行ひ相當の敬意を表すべく、之を欠くは、不敬と認められしと、ラムゼーの記するが如し(ヘスチングス『聖書辭典』第五卷一一三頁)。又セム人種の間にも、之と同樣樹木に對して、或は病氣の平愈を祈り、或は收獲の豐穰を求め、上衣や粧飾を之に捧げ、恰かも活ける人に對する如くに、之に膏沃ぐの風俗ありしは、ロベルトソン・スミスの報ずる

所なり(『セム人種の宗教』一九五頁)。英國には玉蜀黍の穗を束ねて女の人形を造り、紙の衣服を着せて、之に祈禱し、翌年の豊年を求むる習慣なり(ゼヴオンス『宗教歴史緒論』二一二頁)。白露には、玉蜀黍の最も熟せし部分を取り、其所持する最上の衣服に包みて之を拜し、之を敬する風俗あり(同處)。印度に於ては、蘇摩を、白露に於てはクカを拜するは、是れ亦人の知るところ。その他、森を禮拜するものに至りては、印度のドラヴイヂアン、チユートン人、希臘人、羅馬人等あり。

動物禮拜(Theriolatry 或は Zoölatry)の組織最も發達したるものは、埃及とバビロニヤと、北米赤人種間に於て之を發見せらるべし。されど、此の風俗亦全世界に洽く、小は昆虫より(小亞細亞人は蜂を拜し、埃及人は甲虫を拜したり)大は象の如きものに至るまで、算じ來れば、凡この動物殆んど皆禮拜せられざるものなき狀あり。否、之に加へて亦人類の想像的動物を拜せしもの、埃及人のスフインクスに於けるアッスリヤ人のダゴンに於けるが如きあり。而して動物禮拜の動機如何は、學者の説明に苦しむものゝ一なるが、近代最も、勢力を得つゝある一説は、かのトーテム禮拜と稱せらるゝものなり。蓋し人類の或程度の文明にあるや、部落を設け、種族を立て、而して甲部落は、自ら甲動物と、乙種族は、自ら乙動物と關係ありと信じたり。斯くて、各部落、各種族は其の動物の名を取りて之れを己れに命じたると共に、各箇人また該動物の形を文身せり。例せば、ベキユアナ人の如き、鱷魚人、魚人、猿人、水牛人、象人、獅子人等に分れて、各自、その動物を敬ひ、此の肉を食ふことをせず。此の風俗の今日に存するまの、世界各國決して、その例に乏しからざれど、其の最も著名なるは、蓋し北米赤色人の中に見るもの是れなり。之を稱してトーテム禮拜といふ。而して、此のトーテム禮拜は、以て埃及、バビロニヤ、希臘及びセム人種間等に於ける動物禮拜の起源を説明するに足るものと稱せらる。されど、動物禮拜の如き現象は、マックス・ミユーレルもいへるが如く、只一つの動機もて之を説明し得べきにあらず(『宗教の起源』一一〇頁)。即ちトーテム禮拜の外、輪廻説の如きも、亦多少之に關係あるべし。例せば、或種の猛獸は我酋長の再生なりとして、之を尊敬するが如き塲合、是れなり。その他、虎の獰猛なるに怖れ、狐の敏捷なるに感じ、兎の駿足なるに驚き、海狸の技巧なるに舌を捲く等の原因より、之を禮拜するに至れるものもあること、疑ふべからざるなり。

龍蛇禮拜（Ophiolatry）は、動物禮拜の一種なると勿論なれど、其の現象の普及せるより見れば、別に之を說くの必要あり。亞刺比亞のジンは、多くの場合に於て蛇と同一視せられ、エデンの惡魔は蛇となりて出現せり（惡蛇はサタンの一時的假体にあらず。然らざれば之を處罰せると無意義に歸すとはロベルトソン・スミスが『セム人種の宗敎』四四二頁に論ずるが如し）。羅馬のジニウスも蛇にして、白露のウルカグアイは大蛇なり。バビロニヤの水神エーアの女なるニナも蛇にして、希臘のアポロまた、アスクレピオスの蛇に關係あり。而して、蛇神の性質は、東西に由りて善惡相同じからざるのみならず、時としては同一の蛇神が、時代の變遷と共に、其の性質を變ふるともあれど、龍蛇禮拜と關係して、東西の觀念往々相符合するものあるは、一奇とするに足る。其第一は龍蛇禮拜と生殖器禮拜とを關係せしむるものにて、印度のドラヴィヂアン族と、北米赤色人の如き是れなり。又第二は龍蛇禮拜と、錢財とを關係せしむるものにて、埃及のオシリス神、カルデヤのホア神、白露のウルカグアイ神等は皆財寶の神たると共に其形は蛇なり。第三は、龍蛇禮拜と水との關係にして、亞刺比亞人は、マルッアンの溫泉を以て、蛇神ムサウドの湧出せしむるものと信じ、（『セム人種の宗敎』一六八頁）バビロニヤの水神エーアは、其形蛇なりと認めらる。是等は、我邦の辨財天が、女にして福德の神たり、且つ水に緣あることと共に、併せ考ふべき點なるべし。

二　大自然禮拜

以上述ぶる所のものは、何れも地方的、局部的のものにて、甲地にあれど、乙地にはなきものあり。是は之を小自然禮拜といふの理由なり。されど、天地、日月、雷電、水火の如きは、世界的、普遍的のものにて、遊牧の民、たとひ、其地を變ふるも、其物なきことあらむ。故に之を大自然といふ。

天地は、男女に配せられて、禮拜せらるゝこと多し。埃及にては、天をニュートといひ、女神なり。地をセブと稱し、男神なり。バビロニヤにては、天をアンシャルといひ、男神なり。地をキシャルといひ、女神なり。印度に於ては、天をヂアウスといひ、男神なり。地をプリチヴイといひ、女神なり。希臘にては、天をウラノスといひ男神なり。地をゲーアといひ、女神なり。而して、是等は、天地を併せ祭りし者の例なれど、或は、天を祭りて、地を祭らざる者もあり。或は全く天地を祭らざりし者もあり。」

日月禮拜の風俗また區々一定ならざりしもの丶如し。バビロニヤに於ては太陰の禮拜先づありて、太陽の禮拜は之に後れたるもの丶如し。ジャストウラの意見によれば、こは太陰禮拜は、社會の遊牧的狀態と相伴ふがためなりといふ。(ヘスチングス『聖書辭典』第五卷五四一頁左)印度のアールヤ人種の禮拜は、之と反對にて、太陽禮拜先づ起り、太陰禮拜之に次げり。或はホッテントフト人の如くに、太陰のみを禮拜して、太陽を禮拜せざるものあり。或はバビロニヤ人の如くに、太陰を男性と見るものあり。或は、印度人の如くに、太陽を女性と見るものあり。或は、ドラヴィヂアン族の如くに、太陽を惡魔として恐る丶ものあり。或は、ムンダ族の如くに、之を善神として信仰するものあり。或は、亞弗利加の黃金海岸(亞弗利加)に住する黑人の如くに、太陽、太陰何れをも禮拜せざるものあり。ヴアイッは此の最後の點につき說明して曰く、日月の出沒は、余り規律的にして、野蠻人の好奇心を呼び起すに足らず、且つ又天体は余り遠隔にして、敬意を激せざるがためなりと(ジエヴオンス『宗敎歷史緖論』一九頁の註)。

風雨禮拜も多少區々に別れたれど、各國概ね其の習慣ありしを見る。先づ風に就ていへば、獨逸のウオダンは風の神なりき。米國のハラカン亦然り。墨斯哥のクエッアルコートルは、東風にして、極めて尊き神と崇めらる(レヴイルの『墨斯哥及び白露宗敎』五三頁以下)。印度の力荷毘陀にも亦ヴアユ、若しくはヴアタと稱する風の神ありて、全世界の王とさへ稱へらるゝとあり(マックス・ミユーレル『宗敎の起源』二〇三頁)。また風に種々の區別を設くる國民もありて、希臘にては、北風をボレア、北西風をコーラス、西風をアキロ、南西風をムータス、東風をユーラスと稱し、何れも荒神と認め、獨りゼフイラスは、習々たる南風にして、人類に一陽來復を報ずる神なりと信ぜられぬ。マックス・ユーレルの說によれば、パンと稱する神も、穩かなる風の神なり(『獨逸工場の木片』第二卷一五七頁)。或は同じ種類の風にても、甲國にては、善神と認め、乙國にては之れに反するとあり。たとへば、東風は、印度人に取りては、惡神なるに、墨斯哥人に取りては善神なるが如し。是等は氣候の關係に由るものならん。次に雨に就ていへば、最も之を貴びしもの、恐らく墨斯哥に過ぎたるは無かるべし。即ち墨斯哥にては、之をトラロック(滋養者の義)と稱し、雷電を其の屬性と看做し、太陽を其の眼と看做し、雲霧を其子と思へり。其の祭典は、小兒を犧牲

として獻ぐる殘酷のものなりしといふ(レヴィルの『墨斯哥及び白露の宗教』六〇頁以下)。而して白露にては、之をヴイラコカと稱し、また非常の尊敬を加へ、且つ人身犧牲等の祭式あると、猶ほ墨斯哥人のトラロックに於けるが如くなりき(右同書一五三頁以下)。マックス・ミユーレルの說によれば、印度の因陀羅は、インド・ウ即ち雨滴を意味する言より出でゝ、授雨者即ち雨の神なりといふ(『宗教の起源』二〇四頁以下)。されど因陀羅の意義に就ては、從來梵語學者の間に異論ありて未だ決せず。而して之を雨の神といふは、或は當らざるべく、暴風雨の神と見ば恐らく何人も異議なかるべし。カナン人のバールまた是れ雨の神なるは、ロベルトソン・スミスの說けるが如し(『セム人種の宗教』一〇五頁以下)。

雷電禮拜が風雨禮拜と親密の關係あるは、素とより是れ自然の勢なり。即ちチユートン人種の禮拜する雷神ソルは、曾て風神ウオダンと混一して禮拜せられたるとあり(メンジース『宗教歷史』二六七頁)。印度の雷神ルドラ、また暴風の神マルッの父と認めらる。されど、雷霆と電光との間に、親密の關係ありとするは、是れ一層自然の勢なり。即ち希臘にては、雷霆を雷光、電擊をブロンテス、ストロペス、アルゲスと稱して、天と地との間に生れし兄弟なりといひ、白露人また此の三をチユキラ、カチユイラ、インチアラバと稱して、之を雷神カテキルの三變形なりといへり。希伯來人の神話によるも、ケルビムは、雷雲にして、セラビムは、即ち電光なりとす。

水火禮拜は河川禮拜若しくは、地方的の火の禮拜よりも、後に起りしは、勿論ながら亦決して、舊からずと謂ふべからず。されば、印度に於ては、水をアバスと稱し、火を阿耆尼と、稱して之を禮拜し、既に力荷毘陀の中、已に之に對しての祈禱なり(例せば、十、卷十六章の如き)。又希臘に於ては、火をヘペスタス、水をポセイドンと名けて、いと古くより神とし崇めらる。墨斯哥の火の神キユテカトリは、一名ヒユエヒユエテオトルと稱し、而して其の意味は、『古き神』といふの意なるは、一奇といふべし。波斯のゾロアステルが發起したる宗教改革は、畢竟在來の宗教の、火を神とし崇むるに對する反動なれば、アールヤ人種間に、拜火の習慣の行はれしと、其の由來久しといふべし。(隨つてゾロアストル以後の波斯教を拜火教と呼ぶは當らず)。

湖海禮拜は、大自然とはいへ、事情自ら、各國に普きと能はず。而して、此の禮拜の最も、盛なりしは、蓋し希臘ならん。希臘の神話によるに、ウラナス即ち天と、ゲーア即

ち地との間に生れたる幾多の子の中に、オシアナスあり。即ち海の神なり。されど其の甥ジユピトル位に即くに當り、遂に之を貶して、チプチユーンを之に代らしめぬ。故にチプチユーンは第二の海神なり。その他チプチユーンの妻サラシアもサラシアの父チレシウスも、皆共に海神なりき。ホーマルの『イリアド』に、ルデヤの君主は『ギゲアク湖の産めりし所』とあるを見れば、此の湖水も亦、擬人否擬神せられたりしものと知らる。さはいへ、湖海禮拜の例は、獨り、希臘に限れりといふにはあらず。かのバビロニヤの三神の一なるエーアは、實に波斯灣を擬神せるものなりき。小亞細亞のアスバミヤ湖(アスバミヤとは、『七の水』といふ意義なるべしとは、ロベルトソン・スミスの考證せる所なり。(『セム人種の宗教』一八二頁を見よ)は、眞の誓をなすものに、恩惠を施すも、僞誓をなすものには、その兩眼と手足を擊ち、且つ水腫と癱瘓とを起さしむと信ぜらる。その他、此類の實例算し來れば、決して一二に止まらざるべし。

三　雜

以上の中に加へ得ざるものにして、尙ほ禮拜の對象となるもの尠からず。今その中の著しきものを擧ぐれば、第一は即ち人類禮拜(Anthropolatry)なり。世になき英雄豪傑若しくは、祖先を禮拜するは、世界各國に其例多し。されど、世にある人類を神とし崇むるの例も亦、尠きにあらず。特に帝王、祭司などに、此の榮譽を得るもの多し。かの埃及のパロの如き、神の直系と認められて、『美はしき神』なる名稱を帶びしたりしといふ。

第二は、生殖器禮拜なり(Phallism)。その流行の範圍、狹しとせざれども、埃及と印度の如きは其の著しきものならん。印度に於ては、大自在天(シヴァ)の名を以て男生殖器を禮拜し(Lingam)舍支(サクチ)の名を以て女生殖器を禮拜す(Yoni)。埃及のアモンまた生殖器を代表すといふ。その他、その神話には、男女の淫事に關係するもの多し。

第三は都市禮拜なり。こは多く他國にその例を見ず。余輩の寡聞なる、獨り埃及に於て之を見る。ヴイデアンの記する所によれば、(ヘスチングス『聖書辭典』第五卷一九一)文書に屢次に載せらるゝものは、シーブスを其最とすといふ。スリヤのカデシ、また女神と認められて、禮拜せられたり。

(明治三十九年一月中、横濱浸禮神學校に於ける講演を訂正するもの也)

佛教は果して基督紀元前にパレステナに傳へられしや

基督教と佛教との間には類似の點多し。故に第十八世紀の頃にありては、西洋の學者間に、佛教は基督教を模寫せるものなりとの議論行はれたりしとあり。その後、東洋の年代判明するに及び、斯る議論は維持すべからずなりしと共に、また他の極端に馳せて、佛教は基督紀元前パレステナに入り、基督教の形成に影響を與へたりとの意見を主張する人を見るに至りぬ。例せば、佛國に於ては、ルナンの如き、ブルヌーフの如きあり。英國に於てはマンセルの如き、リリーの如きあり。愛蘭に於てはマハフィーの如きあり。佛教果して基督紀元前にパレステナに傳へられしや。

此種の論者が第一に擧げて以て其證となさんとするものは、かのメガスゼニスの『インヂカ』と題する書なり。釋迦の滅後凡そ百六十年を經て、歷山大王の所領なりし東洋諸邦及び小亞細亞に君臨せしものも、セリウシヂー王朝第一世ニケトルといへるあり。王は紀元前三百〇二年を以てメガスゼニスと名くる一使節を印度の摩揭陀なる旃達羅(チャンドラグプタ)多王の許に派遣せり。メガスゼニス、歸來『インチカ』と名くる一書を著はし、印度の事情を叙述せしが、此書不幸にして今日に傳はらず。但し其の面影だけはヂオドラス、ストラボ、アリヤン等の引用に由りて、之を髣髴し得ざるにあらず。英國のリリーは、歷山府のクレメンスにも此の『インヂカ』よりの引用ありとして轉載して曰く(『初代基督教に及ぼせる佛教の感化』(ゼーシフリユーエンスオヴブデスムオンブリミチリーヴクリスチアニチー)八九頁以下)印度の哲學者なるものに、二つの種類あり。一を沙門(サルマネ)といひ、他を波羅門といふ。沙門は「ハイロビイ」と稱し、都會に住せず、家屋を有せず。木皮を衣とし、木實を食とし、手に水を掬して之を飲む。今日の自治宗徒(エンクラチテス)と稱する修道僧等と同樣、結婚を知らず。隨つて又子を生むことなし。また印度人の中には、釋迦の教に從ふものもありて、釋迦は其の無上尊貴の故に、彼等に神とし崇めらるゝなり』と。リリーは此の沙門を以て直ちに佛徒のことと看做さんとせり。されど、英國のマクツス・ミユーレル、獨逸のラツセンは、其に沙門は佛徒にあらず、波羅門なりとせり。果して然らば、右の記事は、波羅門中の二派を記したるものといふべし。是れ其の沙門なるものゝ風習、

佛徒に類せずして、波羅門に似たるを以て見るも明了のことながら、尙ほ下に釋迦の、ことを記せるより見るも、却て佛徒以外のものを指せりと解すること、當然なり。よし、亦一歩を讓りて沙門とは即ち佛徒のことなりとするも之を以て、直ちに佛教希臘に傳はりし證と見るべきにあらず。希臘に傳はりし證とさへなし得ざるものを、パレステナに傳はりし證となさんとするに至りては、無謀も亦甚だし。然るに、リス、デビッズの如きは、更に一歩を進め、クレメンスの引用文なるものをさへ非認して曰く『(佛教時代の印度(ブダストインガア)三六頁)『當時摩揭陀の首府婆旺羅子城には、一箇の希臘社會構成せられ居たれども、彼等は宗教のことなどには頓着せず。我等の知れる限りにては、メガスゼニスは、其の印度の記事中に、釋迦に關し、また佛教に關し、一語をも漏らしたることあらず』と。要するに『インヂカ』は、佛教の傳播問題に、何等の光明をも與ふるものにあらず。

第二の證據とせらるゝものは、右の旃達羅毱多の孫に當れる阿育王に關するものなり。阿育王は、紀元前二百七十年、その位に即き、二百二十三年まで生存せし、人にて、其の領土は南グラントハラより北コラ及びパンジャに達し、西はカッチ灣頭のギルナルより東はガンジャムに及べり。此の王その勅令を處々の岩石に刻み、若しくは之を石碑に記したるが、その今日までに發見せられたるもの、總計三十四あり。就中、第十三勅令(紀元前二百五十五年頃のものなり)は、其の子及び其の孫に宛てたるものにして、初に先づ、劍に由りて勝てるよりも宗教に由りて克てることの愉快を叙し、スリヤ埃及、マケドニヤ、エピラス、クレチの諸王に對しても、南印度のコラス、及びパンジャに對しても、錫蘭に於ても、其の國境諸國民に對しても、所謂る宗教的勝利を得たりといひ、終りに至りていふ『宗教に關しては、到處人皆我王の教に從ふ。たとひ我王の使節の到らざる處にても、既に我王の宗教を聞けるものは、皆自ら宗教の義務を遵奉し、亦之を遵奉せんとす』(下欠)と。博士マハフィー之に就て論じて曰く『キリストの教が北部パレステナに於て說かれしに先だつこと二百年。佛教の宣教師此時夙にスリヤに達し居たるものと見るを得べし』と。また曰く『歷史上の大事變には、必ず前驅あり。國民の心を導びきて神靈の賜たる新らしき大眞理に達せしめんには、漸を以てせざるべからず』と。即ち佛教を以て、基督教の前驅と認めたり。されど、此の勅令は、果して事實を記せるものと見るを得るや否や。

是れ學者の夙に疑を挾める點にして、或は文章の潤飾上、希臘諸王の名を列ね、以て其の盛譽を衒へるものならんかとの説もあり。而して此の説は、必ずしも根據なきものにはあらず。今日、錫蘭に存する記錄『島記錄』(チバーヴァムサ)第八章、『大記錄』(マハーヴァムサ)第十二章)には、阿育王が第三結集の時の議長たりし比丘帝須が迦濕彌羅と健駄羅と、雪山地方と、恒河々邊と、緬甸海岸と南印度及び錫蘭とへ傳道者を派遣したるとを記たるも、希臘諸國へ派遣したるとを記さず。また此の兩記錄の記事は、カンニングハムがサンチ近傍の窣堵婆内より發見せしものと符合す。果して然らば、かの第十三勅令にいふところは、大言壯語にあらざるか。余は必ず然るべしと思ふなり(リス・デビッズの『佛教時代の印度二九八頁三〇二頁を參照せよ)。

第三の證據とせらるゝは、末田地の迦濕彌羅傳道なり。露國のウアシリエフ、是れより推定して、佛教は紀元前四百五十年、已に西波斯にまで、達し居たるなりといへり(リリーの『初代基督教に及せる佛教の感化』九九頁引用)。抑も此のウアシリエフの説は、蒙古僧多羅那達(一名光聖)の記事に基きしものにして、其の年代の太く當を失したるは、止むを得ざるとといふべし。いで、少しく之を辯せんに、元來この末田地は、上座部の派祖と稱せらるゝ人にて、前項に掲げたる阿育王が、派遣したりといふ九人の傳道師の一人となり、初めて迦濕彌羅の傳道を開拓せり。此故に、迦濕彌羅の開教さへ紀元前二百五十年以後のことにして、こゝより更に土耳其斯坦全部に佛教の傳播したるは、(若し傳播したりとするも)更に後のことに屬す。即ち末田地の後ち一百年、迦濕彌羅に迦多衍尼子と稱ふるものありと、かの末田地が上座部に反對し、別にその旗幟を飜へせり。之を説一功有部といふ。是れより以後、上座部は遂に分かれて十一部となりしが、最後の經量部が鳩摩羅駄によりて設立せられしは、佛滅後四百年の初めなりといへば、小乘は紀元前七十年頃までは、即ち西漸の機會を有せしものなり。されど此の十一部傳播の範圍を見るに、至那撲底といひ、咀叉始羅といひ、何れも北天竺の外に出でざりしが如し。然るに是より推測して、佛教は、阿富汗斯坦及び波斯をも席捲し、遂に土耳其斯坦全部に佛教の傳播を見たりと斷定せるは、ウアシリエフの想像、余り大膽なりと謂はざるを得ず。果して然らば、こも亦、基督紀元前、佛教がパレステナに傳はりし證據となすに足らざるなり。」

第四の證據とせらるゝものは、夫の『大記錄』(マハーヴァムサ)の一文に『アラサッダ』とあるもの是れ

なり。此の記錄によれば紀元前百六十七年、印度のルアンエリの大塔建築成りし時、ヤヴアナ國の首府アラサッダより三萬人の僧侶參會したりとあり。獨逸のヒルゲンフエルトを初め、其他の學者、この一文中のアラサッダは、即ち埃及の歷山府なりと解し、之を證として、佛教夙に、西方諸國に傳播し居たるものと推斷せり。されどライトフットは、此の想像を頗る信じ難きものとなし、(『哥羅西書注解一二五頁』)、英人ターナーまた其の『英譯大記錄』中にヤヴアナとは、印度の一部分なるべしこの意見を提出せり。抑も此の時代に、歷山府と稱せられし土地は、一にして足らず。例せば、『那先比丘經』(藏帙第八五十丁)にいふ、『那先問王(畢隣陀王)云、本生何國王言、我本生大秦國、國名阿荔散、那先問王、阿荔散去此間幾里、王言去是二千由旬、合八萬里』と。茲に所謂る大秦國とは何れを指すものなりや。漢西域圖考によれば大秦の東境は、今の土耳其にして、其の西境は今の意太利なりとあり。この記述は、漠然として頗る要領を得ざれども、何れにもせよ、埃及のことにてはあらざるが如し。然るに、リス・デビッズは、英譯那先比丘經の序文に之に關して論じて曰く、(『東洋聖經』第三十五卷廿三頁)此のアレキサンドリヤはバクトリヤにあり。印度河中の都の名と思はれど、多分、島の名なるべく、此島の上にカラシといふ都ありたりと。さすれば、畢隣陀の誕生地たるアラサッダとは、即ちヤヴアナ國のアラサッダなるにあらざるか。言を換へて之れをいへば、リス・デビッズのアラテッダとターナーのアラサッダとは、即ち同一なるにあらざるか。若し然りとすれば三萬人の僧侶、このアラサッダよりルアンエリの献堂式に參會せりとの記事を見るも、左迄怪しからず。試みに思へ、基督紀元前百五十年の頃埃及の歷山府に斯程多數の僧侶を印度に派遣し得るほど、佛教流行し居たりとは、果して信ずべきことなるか。亦若し斯程に強大なる佛教團体、埃及に存在し居たりとせば、希臘若しくは羅馬の歷史家の中、必ず之に論及せしものあるべきに、一人も是れなきは、怪しむべきならずや(ケロッグの『亞細亞の光と世界の光』九一頁參照)。されど、アラサッダにして印度若しくは印度近傍にありしとせば、斯くの如きことは勿論あり得べきとなり。故に大記錄のアラサッダも佛教西漸の證となすを得ず。

要するに、基督紀元以前にありては、印度の思想、パレステナに流入せし史蹟、絶えてなし。その是れありしが如く見ゆるものは、事實にあらずして想像の影なるのみ。

(右は福音新報第六四五號に掲載せし一文に訂正を加へしものなり)

エッセ子教、佛教及び基督教

エッセ子教は、佛教にも似たるところあり。基督教にも似たるところあり。こゝに於てか基佛兩教の間に歴史的關係あるを主張する論者は、佛教その形をエッセ子教に變へ、以て基督教の形成に影響　與へたるなりといふ。乞ふ余輩をして、簡單に、是等三教の異同を吟味せしめよ。

一　エッセ子教と佛教

エッセ子教と佛教との異同に就ては、こゝに英國の東洋語學者ビールの説を引用せしめよ、ビールは、その一般的類似に關していふ、

元來『エッセ子』若しくは『エサイコイ』はパリ語の『イシ』(物主格『イシノ』、複數『イサイ』若しくは『イサヨ』)と其語原等しかるべし。『イシ』とは、聖徒若しくは聖人の義なり。是れ即ちフイローンの解釋に符合す。

パリ語のイシは、梵語の『リシ』なり。『リシ』の上に『マハ』を加へたる『マハーシ』なる熟語は、屢次、佛の性質形容詞として用ゐられたるを見る。

佛陀なる名稱が、西洋にあらざりし故を以て、佛教西洋にあらざりしといふは、是れ妄論なり。

佛陀は、覺者を意味する形容語なり。名詞にはあらず。阿輸迦の石碑文にすら、此の性質形容詞は、只一回見わたるのみ。

然るに聖徒若しくは大聖徒なる形容語は、普通に用ゐられ、其の弟子等亦『イサヨ』若しくは『イサイ』として知らる。(オルデンベルグは釋迦を呼んで『イシ』即ち聖徒といひ、又チルデルスは釋迦と阿羅漢の通稱を『イサイ』といふと記せり)。

斯くてビールは、更に格別の類似を論じて曰く、

一　ジョシフアスのいふ所によれば、『エッセ子』宗徒は結婚を賤みたるも、亦全然之に反對せざりし如し。佛教の優婆塞亦妻帶の禁なし。只妻帶者は妻帶せざるものよりも其聖階一段劣るのみ。

二　又ジョシフアスは、『エッセ子』教徒の財産を賤み、且つ之を共有することを記せり。是れ佛教優婆塞のなす所なり。即ち大阿輸迦は其の財産を擧げて悉く之を寺院に寄附し、之を沙門の共有財産となして其修行を奬勵せり。此外、佛

書の中に捨身慈悲を奬勵したる點極めて多し。

三　『エッセヲ』教徒は、醬油を用ゐず。是れ佛教に於ても、明白にその命令あるところなり。

四　『エッセヲ』教徒は、常に白衣を着せり。佛教の律藏に於ては、終始優婆塞を素衣といへり。

五　『エッセヲ』教には、別に事務員ありて、俗事を處辨せり。佛門また羯磨陀那なるものありて、一切の俗事みな其手に處辨せられたり。

六　『エッセヲ』教徒は、同教徒の旅人を歡待し、且つ商賣をなさず。佛門また然り。今日にても寺院は、能く旅人を歡待し、無料を以て飲食せしむ。

七　『エッセヲ』教徒は、日出前と日沒時に祈禱をなす。而して義淨のいふところに由れば、是亦佛徒のなしたるところなり。

その他、會員の年齢入會候補者、放逐の原因等に關する『エッセヲ』教徒の規則は、全く佛教にも是れあり。

されど是事の類似は、余輩を以て之を見れば、寧ろ偶然的の類似なりと謂はざるべからず。而して兩教相違の點を比較すれば、却て是れよりも甚しきものあり て存す。試みに之を擧げしめよ。

一　佛教徒には、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆弟の區別あるも、『エッセヲ』教徒にはなし。『エッセヲ』教の區別は、階級の區別にて、性質の區別にあらざりき、即ち男子ありて女子なく、出家ありて、在家なかりき。

二　財産を賤むに於ては、兩教相同じと雖、『エッセヲ』教徒は全く之を放棄せず。隨つて佛徒の如く乞食をなさざりき。否團体以外のもの丶調理せし食物は、彼等の食せざりし所なり。

三　商業を營まず。兵器を作らざるは、兩教相同じと雖も、農業に從事し、また種々の工業を勵みしは、『エッセヲ』教徒にありて、佛徒になきところなり。

四　噉肉飲酒は、佛徒の禁せし所なりしも、『エッセヲ』教徒の禁せざりし所なり。從來『エッセヲ』教徒の之を禁せし如く唱へしは、誤謬なり（ニウマン『教會歴史』第一卷五一頁參照）。

五　『エッセヲ』教徒は舊約書を遵奉し、モーセの律法を守るの嚴重なる、最も嚴格

の猶太人さへ驚嘆せしところなり。（『基督教傳記辭典』に於てギンスブルグ）。即ち神に次でモーセを貴み、モーセの名を瀆すものは死を以て罰せられしといふ（ジョシフアスの『戒記』二卷八章九）。是れ勿論佛徒になき處なり。

六、『エッセヲ』教徒は、安息日を嚴守するに於て、凡ての猶太人に優り、此日には食物の調理をなさゞりし而已ならず、火を點ずるとなく、器物を動かさず。否之を撤去するとすら是れなかりき（ジョシフアスの『戒記』第二卷八章九）。是れ亦佛徒には全くなきところなり。

七、『エッセヲ』教徒は、下級の者に觸るゝを厭ひ、之に觸るゝは汚るゝなりといへり。是れ波羅門教徒のなせし所なるも、佛徒になき所なり。

その他割禮なき者が神の名を唱ふるを忌み、死を以て之に擬せしといふが如き、偶像を嫌ふがために、貨幣を携ふることをさへ謹みしといふが如き、數へ來れば、佛徒に存せざる特色頗る多し。

要するに、『エッセヲ』教と、佛教との類似は、却て其の相違の大なるに如かず。此故に、ザイデルや、リリー等の輩は、佛教との關係を喞々するに對し、ヒルゲンフエルトや、ライトフットは、波斯教の感化を受けしものなりといひ、チエレル、カイム、シユーレルの如きは、ピタゴラス派の分子を存すといひ、リプシウスはシロ・バレステナ的異教より來れりといひ、（ニウマン『教會歴史』第一卷五三頁參照）、コニーベアは、希臘文明に負ふ所あるべしといひ（ヘスチングス『聖書辭典』第一卷七七一頁右側）、英國の東洋學者ブリドーの如きは、古くより埃及に行はれし一宗教の名殘なりといひ、佛教說の味方は孤城落日の觀なしとせず。而して崭然衆說に一頭地を拔けるものは、スミスの『基督教傳記辭典』に記載せられたるギンスブルグ博士の一文なり。博士は『エッセヲ』教に、外國的分子なしと斷言し、是れ『タルミユード』の中に、第七種のパリサイ徒と稱せらるゝものなり。而して『エッセヲ』教徒が犧牲に反對し、太陽を禮拜したりといふが如きは、畢竟彼徒の信仰と習慣とを誤解せしものなりといへり。萬一『エッセヲ』教をして佛教の變形せしものたらしむるも、基督教は、果して『エッセヲ』教より出でしものなるや否や、是れまた論者のいふ如くに容易に斷定し得べきことにあらず。此故に、第二に余輩は、『エッセヲ』教と基督教との異同につきて辯ずる所あらん。

二　『エッセヲ』教と基督教

『エッセヲ』教と初代基督教との類似を說けるもの、コニーベーアのもの、簡にして要を得たり（ヘスチングス『聖書辭典』第一卷七七〇頁右側）。今之を抄譯すれば、左の如し。

一　財產共有と自爲的貧究。

二　豫言術。初代の基督教會には豫言者と稱する一種の階級ありたること、使徒行傳及び『十二使徒の教訓』に由りて之を知るべし。

三　來世と陰府とに關しての教。

四　結婚に關する愼重の態度。

五　官黨に從順なりし事。

六　內治、即ち『エッセヲ』團にありては、收入役、後見役、救濟役、事務役、などの異名ある公吏を撰擧せしが、此の撰擧は初代教會が監督を撰擧する時と等しく擧手を以てせり。ヒッポリタスは、此の公吏を呼ぶに會長（プロエートーテス）といふ名稱を用ゐたるが、こは、第二世紀の頃、基督教會が、監督を呼ぶに用ゐし稱號なりしは注意すべきことなりとす。

七　『エッセヲ』教徒が食事を共にしたりしは、使徒行傳に於けるエルサレム教會の記事と相似たり。されど兩者の目的は相同じからずして、『エッセヲ』教徒は儀式上欠點なき淸淨の食事をなさんためなりしも、基督教徒のは、主として愛と交通の目的に出づ。

八　『エッセヲ』教の食事は基督教會の晩餐禮に同じ。『エッセヲ』教會の祭司なるものは、即ち此の食事を司どり、且つ之を調理するために撰ばれしものなるが、基督教の教師なるもの、晩餐に於けるも亦斯くの如し。『エッセヲ』教徒は團外のもの、食事に加はるを許さず。基督教會また洗禮なきもの、晩餐に陪するを許さず。

九　一般の組織　（甲）上長に對する從順。『エッセヲ』教徒の擧止行狀は、學童がその畏敬する學校教師に對する如くなりき。（乙）『エッセヲ』教徒は皆兄弟なりき。されど少者が長者を敬するは恰かも父母に對する如くなりき。（丙）『エッセヲ』教徒は村落（シテツス）、宗派（ハイレシス）、人々（ナーセス）、次序（タグマ）と總稱せられたり。就中、初めの二つは、何教徒に拘らず、信仰を同ふするもの、總稱にして、基督教徒の如きも異邦人より斯く呼

び做されたり。(丁)『エッセヲ』教徒が旅行の時服膺すべき教は、イエスが七十人に對しての教に似たり。彼等は、何物をも携ふるを得ず。只、強盜に對して、防衛することを許され居たる而已。(戊)『エッセヲ』教徒は其上衣と其靴とを着用して破るゝまで之を代ふるを得ざりき。(己)『エッセヲ』教徒に四階級ありしは基督教徒の問答者の四階級に似たり。されど、斯る階級は、古代の秘密結社、大抵皆之を有し、決して基督教會のみの特有にあらざりき。

十　『エッセヲ』教徒は猶太教の普通の潔めを以て滿足せざりしこと、猶ほ基督教徒の如し。されど、基督教徒の洗禮は、只一回のみなりしに反し、『エッセヲ』教徒は、日々に之を行へり。又『エッセヲ』教徒が食物の清潔を貴ぶは、猶太教徒に過ぎ、基督教徒の晩餐を貴ぶに似たり。また試補の之を食するを許されざるは、基督教會に同じ。又希臘教會にては、今日も尙ほ其の神品、晩餐の、パンを燒くが如くに、『エッセヲ』教にありては、祭司之を調理せり。

コニーベーア附記して曰く、『エッセヲ』教徒と初代基督教徒との類似は是れより以上を擧ぐるを得ず。されど『エッセヲ』教徒が安息日を守るの嚴なる、猶太教徒に過ぎ、又割禮を教徒の必須條件となせしを見れば、『エッセヲ』教徒と基督教徒とは同視すべきにあらずと。

故にコニーベーアを以て見れば、以上の十點の外は、悉く皆同じからずとするものなるが、試みに兩教相違の點を擧ぐれば、

一　基督教は、隱遁主義を主張せざる事。

二　基督教は、普通人民と交通し、夫婦父子の倫常を擁護したりし事。

三　基督教は、安息日を始め、モーセの法律を守るに於て、比較的寛大なりし事。

四　基督教は、復活を信ぜしに、『エッセヲ』教徒は然らざりし事。

五　『エッセヲ』教徒は入會者を試むる事三年にして始めて其の入會を許せり。基督教徒には斯くの如き制度なく、是れあるは、第二世紀以後のことなり。

六　『エッセヲ』教徒は、秘密結社にして其の誓約を他に漏らすを得ず。之を漏らすものは放逐せられしも、基督教徒は然らざりし事。

七　『エッセヲ』教徒は、靈魂の前在を信じたりし事。

八　『エッセヲ』教徒は、救主によりて救を得るの望を有せざりし事。

九　『エッチセ』教徒は、一種特別の天使學を有し、天使の名は、惡鬼に對しての利器なりと信じたり。

十　『エッセチ』教徒は、疾病を愈すべき草根奇石を求め、之を一種の魔術と信じたり。

是等の相違を以て見る時は、キリストは『エッセチ』教徒にして、基督教は『エッセチ』教の變形なりとの説の如きは、頗る不通の論といふべし。

（右は曾て雜誌太陽に掲載せし一文に大訂正を加へしものなり）

名に關する研究

名は今人より見れば、物の偶然の附屬物なり。その最も善き場合にても、名は實の賓たるに止まり、甚しきに至りては、名の實に反するものも亦多し。されど、原人及び原人程度の末開人種に取りては、名はさる輕々しきものにあらず。彼等は主觀と客觀とを混淆し物と其像とを混淆したりし如く、また實と其名とを同一視せるとは、からず。遂に名と稱する一箇の實物ありとさへ思ひしもの埃及人の如きあり。斯くの如きは稍極端の例なれど、名と物との間に、今人の思慮し得ざる一種密接の關係ありとせるは、未開人種普通の思想なりしが如く、而して其名殘りは、發達したる宗教思想にも尚ほ混入せるを見る。

蓋し物は、その名を思ひ起せば、之と共に、人の心頭に浮び來るものなり。此に於てか、物と名との間に、眞實の關係ありて存すとするに至ると、未開人種にありては、強ち不理にあらず。已に物と名との間に眞實の關係ありとする以上は、名の發音直ちに、その物に善惡何等かの影響を及ぼすとするに至ると、蓋し自然の勢なり。ギ

ーセブレヒト、此の未開人種の思想に基き、名に定義を下して曰く、『名は一種、人と並行せる或物にて、比較的には、その所持者と獨立のものながら、其の吉凶禍福と重要の關係を有し、其の所持者を說明するものなると共に、また之に影響を與ふるものなり』と。然り、原人の思想にては、名は人の吉凶禍福に影響あり。此故に己れの名を公けにするを忌むは、今日にても、未開人の間に往々發見せらるゝ事實なり。是れその名によりて人に咒詛せらるゝを恐れてなり。甚しきに至りては、己れの不注意より其名を公けにすることあるべきを恐れ、始めより全然己れの實名を知らざるものもなきにあらず。之と同じ道理に由り、神の名を秘密にする風俗ある國も亦尠からず。蓋し神の名を知れる以上は、何人にても、此の神に祈願を捧ぐるを得べし。然るを之を公けにせんか、他種他國の人、不正姦惡の輩でも均しく之を使用して種々の弊害を醸すべければなり。

要するに、名に關する思想の研究は、宗教史の研究上、頗る興味ある、また重要なる一問題なり。乞ふ、以下各國古代の名に關する思想の奇異なる方面を研究する所あらん。

一　名と人格

名と人格との間に、特別の關係ありとせし國民、古代には少からず。否、名即ち一種特別の人格を有するものとせし國民すら是れありしと、前にも一言したるが如し。」印度の毘陀經の注釋に、婆羅摩といへるあり。此の婆羅摩の一種に、シャタパタといへるものありて、其中にいふ(オルデンベルグの『佛陀』四四六頁の引用に由る)『ジャラトカラヴァ・アータバーガいふ、ヤジュナヴァルカよ、人の死せる時、之を脫離せざるものは何ぞや。ヤジュナヴァルカ答へて曰く、名なり。名は實に無限なり。神は無數なり。是に於てか名は無限の完全に達す』と、又同じ婆羅摩に曰く、『世界は三位を以て成る。名と色と行と是れなり』と。佛教も尙ほ此思想を全然脫却せざりしが如し。即ちかの十二因緣の名色は、心色の謂なりと解釋せらるゝを常とすれど、(例せば『西谷名目』上本十六葉の註の如き)オルデンベルグは、佛書中に、尙ほ此の婆羅門教的解釋の存するを見るといへり(『佛陀』二二八頁註の二)。俱舍の七十五法、唯識の百法の中にも、名身といふ一項目あり。聊か注目するに足る。

ゾビロニヤに『エヌマ、エリシユ』と稱せらるゝ一種の天地開闢談あり。その第一行

第二行に曰く、『上には天の未だ命名せられざりし時、下には乾ける地、未だ名を有せざりき』と。所謂る命名といひ、名といふは、ジャスドラウのいへる如く、勿論存在といふの義なり。又その第八行には、萬物の未だ創造せられざりしを描出すとて、『名は未だ一も命せられず。運命は未だ一も決せられざりき』とあり。是れ名と實とを同一視せし一例と見て差支なきこと、いふを待たず。

埃及にては、人の名をレンといふ。レンと、レンを記したる碑石との存する限り、また之を紀念する祭典の存する限り、死者は、他界にありて存すとは、埃及人の信仰なりき。此のレンを最も重んじたりしは、第廿六朝即ちサイス朝(紀元前六百年代)のことなるが、當時、往々にして、レンとケーとを同一視せしことすら、是れあり。ケーとは、人類の複身体ともいふべきものにて、人の生るゝ時、共に生れ出で、人死すれば、長くその木乃伊の傍らに止住するものと埃及人は信じたるなり。

埃及人は、名に就て斯る思想を抱きし結果、種々の面白き創造神話あり。例せば、神の創造事業に從ふや、一語を發すれば、聲に應じて、その物出現し、また時としては、音相似て、意義全く異なる言を發せし時にも、その物は、出現せりといふが如き是れなり。その世界破壞談にも、亦之と相類せる話あり。即ちレーの神人類を滅ばさんとし、セケトの神を遣さんとするや、曰く、『我汝に汝の使者を遣すべき權威を與ふ』と。然るに其際、朱鷺(ハビ)は出でたりといふ。又曰く、『我汝をして北方の民に向はしむ』と。然るに、その際、狒(アーナーン)は出でたりしといふ。

舊約に現はれし名の觀念は、素とより野蠻人の未熟なる迷信と同日に語るべからざれど、イスラエル人の間にも、名と人格との間に、密接の關係ありとの思想、存したりしは、他と同じ。先づ、エホバの名に就て觀察せんに、『エホバの名』てふ語は、『エホバの榮光』『エホバの面』『エホバの使者』などゝいふ語と、同一類に屬する語として用ゐられし場合いと多きは勿論のことながら、エホバの人格といふと同意義のところも頗る多し。出埃及記二十章二十四に、エホバがモーセに命ぜし言にいふ、『汝土の壇を我に築く……べし我は凡てわが名を憶えしむる處にて、汝に臨みて汝を祝(かぶ)まん』と。而して此の律法に基き、エホバのために壇を築きし實例を檢するに、創世記十二章七、廿二章九、廿六章廿四、廿五、士師記六章廿四等、皆エホバの出現を記せざるはなし。之に由て是を思ふに、所謂る『エホバの名を憶えしむる處』とは、即ちエホバ

の出現したる處といふの義にして、名と人格との關係についての思想、知るべきに、あらずや。また申命記の時以來、エルサレムは、一種特別の意義に於て、神の所在地と、なりたるに、之を申命記十二章十一その他には、『エホバその名を置かんために、一の處を擇ぶ』といへり。隨つてイザヤの如きも、シオンを呼んで、『エホバの聖名のところ』といひ(以賽亞十八章七)撒母耳後書七章十三、列王記上八章十七―廿二には、神殿を呼んで、『エホバの名の爲の家』といへり。預言書や、詩篇の中には、『エホバの名』と記せるところ尠からず。而して從來、註釋家の多數は、之を一樣に、性質の表現、神性の含示と解して滿足したりと雖も、斯くては、此言の眞の妙味を味ひ得べからざる場合、一にして足らず。たとへば、『エホバの名をおそる』といひ、『エホバの名を愛す』といひ、『エホバの名を敬ふ』といひ、『エホバの名を崇む』といひ、『エホバの名を待ち望む』といふ句の如きは、『エホバの名を宣ぶ』といひ、『エホバの名をほむ』といひ、『エホバの名を讃美す』といふ諸句に比し、その意義自ら異ならざるを得ず。之を單に、我等是を用ゐ慣れし名の意義に解するは、勿論當らず。此故に、右の諸句は、寧ろ、神の人格を指していへるものと解すること頗る穩當なり。特に詩五十四篇六、七に於ける『エホバよ我れなんぢの名は善く且つなんぢの名はすべての患難より我を救へりと宣べて之を讃美せん』(是れカウチの譯なり。英譯、和譯皆之と異なれり)との句の如きは、斯く解するにあらざれば、意義をなさず。箴言十八章十の『エホバの名はかたき櫓のごとし』といふも、亦同じ。

下りて新約に至りても、『イエスの名に託て預言す』といひ、『イエスの名を信ず』といふ句の如きは、舊約の『エホバの名に託て預言す』といひ、『エホバの名を信ず』といふと、同一意義と見て差支なし。またヨハネの如きは、或時は、『イエスの名を信ず』といふ句を用ゐながら(約翰傳一章十二、二章二十三、三章十八)又或時は、『イエスを信ず』との句を用ゐ(三章十六、十八、六章四十)その筆法交互錯綜したるを以て見るに、此の兩者の間に區別を見ず、名即ち人格と解せしものなること明なり。その他使徒行傳一章十五に『百二十人』と譯せられ、默示錄十一章十三に『七千人』と譯せられし『人』の原語は、何れも希臘語の名(オノマタ)なり。こは日本語との類似も思ひ合されて、一層興味あるを覺ふ。(支那には、『百二十人』を『百二十名』といふ習慣なしとは、菊池三九郎氏より聞く所なり)。

二　名の力

名に力あるとは、古代の人民おしなべて信仰せし所なり。今聊か、その實例を擧ぐれば、波斯教の經典「アヴェスタ」の「オウマズド讃歌(ヤスト)」中に、オウマズドの神の名を唱ふれば、諸の危難を免かるべきを說けるところあり(『東洋聖經』二十三卷二一頁)。即ち曰く、「ザラスストラ、オウマズドの神に問ふて曰く何の聖言か最も强く、最も尊く、最も有効に、以て惡魔を退治すべく、以て病を醫すべきや。又邪神と人の惡計を滅ぼし得べきやと。オウマズドの神、答へて曰く、我等の名は最も强く、最も勝利的に、最も尊く、最も有効に、亦最も惡魔退治の驗ありと。ザラスストラ即ち曰く、嗚呼オウマズドの神よ、願はくば、汝のその名を我に示し給へ」と。斯くて該讃歌には、神名二十を擧げ、之を唱ふれば、必ず勝利を來すべしといへり。その他「アヴェスタ」の中には、惡魔を退治し、身の安全を保證し、清潔と此の大敵たるアングル・マイニウを屈服するに、オウマズドの神の名最もその驗ありとせられたるところ多し(『東洋聖經』第四卷十、十一章(ファガルト)、第二十三卷七四、一三八、一六八、二六〇頁以下等)。

佛教に於ても、念佛宗徒が阿彌陀佛の名號の力を信ずるとの篤きは、能く人の知るところなり。「觀無量壽經」に曰く、「稱佛名故、於念々中、除八十億劫、生死之罪」と。印度思想の一班粗ぼ之にて察するを得べし。

バビロニヤにても、此の信仰存したり。たとへば、人の神社に詣でんとするや、こゝに合祭せられたる神の名を知り居て、之をその媒介となさゞるべからず。隨つて、何れかの神の名を知れるものは、神社參詣の目的を達し得べきも、之を知らざるものに至りては、遂に何れの神の助けをも得るに由なかりしといふ。又バビロニヤには、エーアの神といへるありて、こは、最も力ある神の名を獨り承知せるものとせられたり。エーアの神は、蓋しバビロニヤの知慧の神なりしなり。

埃及の神話に、女神イシスなるものあり。太陽の神レーの名を知らず。レーも亦その名を秘して之に語らざりしが、或時イシスは、僞計を用ゐて、その實名を伺ひ知り、之と共に又太陽の神の實權を得て、至尊無上の神となれりといふ。また人の死して下界に至るもの、若し鬼の實名を呼び得れば、斷じて其の害を受くることなかるべく、門また正しくその名を呼ばるるときは、その扉を開かざるを得ずとは、古代の埃及人の信じたる所なり。

舊約全書に顯れし信仰は、その中に精神的の要素他と比較すべからざるほどに、多量に含蓄したると勿論ながら、尙ほ前諸國の信仰と同一線路にありしものと見て、差支なかるべし。たとへば、舊約には、名に人の運命を形づくる力ありとせし場合多きに似たり。アビガル、その愚かなる夫ナバルを評していふ、『彼はその名のごとし』と(撒母耳前書二十五章二十五)。同處に又曰く、『かれの名は愚にしてかれは愚なり』と。嬰兒の生るゝや、その語尾に神の名を付したるは、神の名には、不朽の力ありと信じたればなり。後世の猶太教には、天使の名にさへ、ミカエル、ラハエルの如き神の名を付せるもの多し(エルは、希伯來語にて神の義)。その意、蓋し知るべきにあらずや。後世の猶太教徒は、かのモーセの杖に、エホバの名、刻み込まれ居たりしを以て、能く種々の奇蹟を行ひ得たるなりと信じたり。

新約の時代に至りても、普通の猶太人は、名の力に關して一種の迷信ありしが如し。即ち馬太傳七章二十二、使徒行傳四章七等の如きは、イエスの名に一種の魔力ありと信ぜられ居たる證據なり。コニーベーアの話によれば、初代の基督教師父たちの間にも、イエスの名に魔力あるを信ぜしもの少からざりしといふ。

三　名を秘密にす

名は斯くの如き力あるものなるが故に、名を知るは、古代の人に取りては、他の急處を捕ふるに等しく、又鋭き武器を握ると同樣にて、頗る大切のことなりき。こゝに於てか、名を秘密にするの習慣は、古代の諸國に於て之を見ることを得べし。かの羅馬の安固なりしは、氏神の名を秘密にして敵に之を知らしめざりしによるといふ。而して之を秘密にすることは、獨り神の名にのみ限れることにあらず。人の名に於ても亦同樣なり。

かの印度人の如き、邪神にその名を知らるゝを恐るゝこと甚しく、若し之を知らるゝ時は、之に由りて種々の災禍を招くべしと思ひたりしなり。今日の印度教徒、否回教徒さへ、夫は、妻の名を呼ぶを喜ばず、妻は夫の名を呼ぶを一層嫌忌するものは、全く此の遺風と察せらる。ラボックの說によれば(『文明の起源』(オリジン、オヴ、シイヴリゼーション)二四八頁以下)之と同樣の觀念は、亞弗利加の黑人、アビシニヤの土人、濠州の土蕃、及びその他の未開人種間にも存すといふ。またモニエル・ウイルリャムスの說によるに(『波羅門教及び印度教』(ブラフマニズム、エンド、ヒンヅイズム)三七二、三五八頁)印度に於ては、嬰兒の命名の際、秘密の名を付して却て之を

實名となし、以て他より咒咀せらるゝを防禦することありといふ。

埃及にても、亦此の風俗ありて、敵に、その名を知らるゝを恐るゝの結果、往々にして二の名を有するものあり き。一は即ち俗名にして日常の呼稱に用ゆるもの。他は即ち法名にして、宗教上の祭文の如き、危險の恐れなき場合にのみ用ゐられ、決して廣く人に知らしめざるもの是れなり。前項に掲げし埃及の神レーの言にも、『我名は我父と我母と之を口にしたりしのみ。爾來父母は之を我にも秘して我を魔術に罹らしめざる樣にせり』とあり。されば、大なる神々の名は、多くは秘密のものとせられ、殊に紀元前二千年代以後はアモンといふ神の名さへ、實は『秘密にせられしもの』といふ義なりとの牽强附會なる解釋を受くるに至りぬ。焉んぞ知らん、秘密といふ語の語根は、アメンにして、アモンにあらざることを。

猶太には、魔術的の意義にて、神の名を秘密にする習慣ありしや否や、聖書の上には、明らかならず。カウチの說によれば、創世記三十二章三十、(和譯にては二十九)士師記十三章十八の如きは、此の觀念の痕跡なりといへり。されど、之れを聖書以外に求むる時は、必ずしも是れなしといふべからず。かの十誡の第三なる『エホバの名を妄に口にあぐべからず』との禁令は、カウチのいへる如く、その源蓋し人の之を濫用して神を强迫するが如きことなからしむるの用意に出でしものならん。然るに、猶太人は、此の禁令を文字の儘に解釋し、普通の人民は、斷じて、神の名を唱ふることをせず、只祭司のみが、一年一回至聖所に入りて之を唱ふるの習慣を生じたり。而して、『正義者』と綽名せられたる祭司の長シモン(此人の年代に關しては、紀元前三百年頃の人なりといふと、二百二十年頃の人なりといふと異說あり。何れが正しきか、確かならず)は即ち之が最後の唱名者なりしといふ。隨つて、此の名の發音は、一種の神秘なれば、之を能くする者は、天地をも動かし得べき力ありと信ぜられ、ビの仲間にては、斯る人々に『名師』といふ名を命じきといふ。カバラアと稱する一派の猶太教徒の如き、また之を發音するを恐るゝこと甚しく、『四字の名』(希伯來文字にては、四字あるを以て)と唱へて、エホバとはいはざりき。斯く秘密にせられし結果、眞正の發音今日に傳はらず。今日我等の口にするエホバなる發音は、全く第十六世紀の神學者の誤解より出でたる過失にして、眞正の發音は、ヤーウエならんとは、方今學者社會の一般に認むる所なり。

四　希伯來人の思想の發達

神の名てふ思想に關しては、希伯來人の觀念、必ずしも他國民とその種類を異にせざるは、以上述ぶるが如し。されど其の性質に於ては、初めより非常の逕庭ありて、且つ希伯來に於ては、時代の推移と共に、益々進歩し、歩々着々精神的となりたる痕跡を認むるを得べし。今之を舊約に就て觀察するに、凡そ之を四期に分つを得べし。

第一期　ヤーウエは先づその名をシナイ山に於て名宣り給へり(出埃及記三十四章五―七)。是れヤーウエと其民との間に於ける眞の精神的關係の基礎といふべし。而して此名に對する希伯來人の精神が、如何ばかり高潔なりしかは、約書亞記七章九、九章九、廿三章七、撒母耳前書十七章四十五、以賽亞十二章四、亞麽士書二章七、五章八、六章十、九章六、十二等を見ば、思ひ半に過ぐる者あらん。されば、第一期に於ける希伯來人の思想は、大いに他の國人の思想と相類似する所あるに相違なけれども、此時已に希伯來の思想には、一種特異の精神的要素ありて胚胎したりしなり。

第二期　下りて申命記時代に至りては、神の名に關する精神的發達の迹益々著るし。當時の希伯來人は、以爲へらく、彼等の他國民に優るは、神の名を知りて、之を喜ぶを得るがためなりと(申命記四章七を見よ)。又以爲へらく、神の殿に至るの幸福なる理由は、神そこに其名を置き給へるが故なりと(申命記十四章二十四、十六章二、六、十一)。斯くてヤーウエとイスラエル人との關係は、預言者の精神的信仰に激せられて、(米迦四章五、申命記廿八章十)純然たる精神的のものとなりぬ。

第三期　バビロン囚虜期時代は、希伯來人が非常に高尚なる精神的神觀に達したりし時代なり。即ち純一の一神主義は行はれ、神の性質は、全く超然的のものと思量せられたればなり。隨つて神の名の神聖なること、此の時代に於て、特に高調せられ、神の名を詛すの罪を惡むこと、實に甚しきものあり。利未記十七章―廿六章に至る『神聖法典』中、十八章二十一、十九章十二、二十章三、二十一章六、二十二章二、同三十二、二十四章十一、十六等の如き、所謂る第二以賽亞の中、以賽亞四十七章四、五十章十、五十六章六、六十章九の如き、すなはち然り。

第四期　囚虜期後の預言者及び歴史書に於ては、神の神聖を高調すること、依然として前時代の如く、その名を瀆すの罪を責むること、また峻烈なり(馬拉基一章六、十

一、十二、十四、二章二、四章二、歴代史略上十三章六、但以理九章十九、尼希米亞九章五等)、されば神に屬する榮光を毀損し、神に屬する名譽を辱むるが如き言行は、堅く之を禁止せられしが、遂にはヤーウエと呼ぶことをさへ憚かり、只單に名といひ若しくは主といふに至り、神の名を重んずるの風、その極點に達したり。

(明治三十八年日本基督教會大會教授者會に於ける講話に訂正を加へしものなり)

日本人の未來觀

一　緒言

日本人の未來觀とは純日本的未來觀を意味す。外國思想輸入後の未來觀は本論の關する所にあらず。隨つて其の研究の材料極めて乏しく、恐らく古事記と書記の一書とに記載せられたるかの冉尊黄泉譚の外には是れあらざるべし。且つ此神話すらも政治的鬪爭の譬喩なりとするもの久米氏の如きあり(「日本古代史」七十五頁以下)。若し然らば此の研究或は全く見當違ひなるやも知るべからず。されど、余輩を以て見れば、久米氏の此の解釋余り穿鑿に過ぐることなきか。之がため國史の奥床しさは甚しく傷害せらるといふべく恰かも青山白水の間に、ペンキ塗りの家屋を築きたるの觀あり。且つ「之を實事として解釋するには、參考の料なきに苦む」とは、氏も亦明言せらるゝ所なるを以て、余輩は寧ろ之を文字通りに解釋するを以て、穩當安全なりとし、而して神話の中にありては、一種の事物始原(ユチオロジカル)說明の神話なりと思ふなり。

抑も神話は、思想に混亂あり、條理に錯綜の觀を呈せるをその常とす。されどこは後世の見地より判斷せるがためにして神話時代の人に取りては然りしにあらず。是れ今日神話に就て學者の皆等しく認め居る所なり。今この神話も此の通則に漏れず。背理不通の點種々あれど、之がために、此の神話の價値を疑ふは當を得ず。余輩は、此背理不通の點を見て、却て我國初時代の信仰の反影たるを信じ、純日本的未來觀を窺ふには、即ち絶好の一材料と認むるなり。

二　古事記の記事

初めに先づ古事記の記事を擧げんに、冉尊、火の神迦具土を生みたまふや、急所を焦れて神避りまし、出雲と伯伎との界なる比婆山に葬られ給へり（書記の一書には、紀伊國熊野の有馬村に葬るとあり）。こゝに諸尊、悲泣慟哭して『愛しき我が那妹の尊や、子の一木に易へらるかも』と嘆きたまへりといふ。斯くて諸尊思慕の情に堪へず、現身の儘にて冉尊の在せる黄泉に追ひ往き『愛しき吾が那妹の尊、吾れ汝と作れる國、未だ作り竟へず。故に還り給ふべし』と曰へりしに、冉尊見て『何ぞ來ますとの晩きや。吾は已に黄泉の餐を食ひたり。然れども、愛しき吾那兄の君、入り來ませるを恐こし。故に還りなん。且らく黄泉の神と相議せん。その間我を視給ふな』と。斯くて殿内に入り給ひしが、この間、久しかりしを以て、諸尊待ち兼ねたまひ頭に刺せる櫛に點火し入りて冉尊を見給ふに、其身体には、膿湧き蛆集り、且つ八種の雷神、胸腹その他の各部に占居せるを發見せり。諸尊大いに驚き、逃げ還らんとし給ふ時、冉尊曰く『我言葉に違ひて我を見、我に辱を見せたまへり』と。由て黄泉醜女を遣して諸尊を追はしめ給ふに、諸尊御鬘を取りて之を投げたれば、乃ち蒲子生じたり。黄泉醜女、之を撫ひ食ふ間に諸尊稍逃げ延び給ひしが、醜女尚ほ追ひ來りしかば、こたびは、其の櫛を引き欠きて投げたまふに、乃ち筍生じぬ。醜女之を食ふ間に諸尊亦逃げ延びしが、冉尊遂に八雷神に、千五百の黄泉軍を副へて之を追はしむ。諸尊由て其の佩び給へる十拳劍を拔き、之を後手に揮ひつゝ逃げ走りて漸く黄泉比良坂に達し、其の坂本の桃子三箇を取りて之を抛うちたまふ。八雷神等悉く逃げ去る。諸尊乃ち桃子に大加牟豆美命なる名を命じたり。最後に冉尊自ら追ひ來りしが、諸尊千曳の石を引き來りて比良坂を塞ぎ、絶妻の誓をなせる時、冉尊曰く『愛しき我那兄の尊斯くなし給はゞ、汝の國の人草一日に千頭絞り殺さん』と。

諸尊曰く『愛しき我那妹の尊、汝然かし給はゞ、吾一日に千五百人を生み出さん』と。是れより以後、一日に必ず千人死し、一日に必ず千五百人生るといふ。

三　希臘神話との比較

希臘には、之と相似たる神話多し。即ちヘラクリス、アドニス、プスケー、セセウス、オルセウス、アイナイアス等皆現身を以て陰府に下れるものなり。今その中の一なるオルフエウスの話の梗概を記せんに、美女ユーリヂシー、蛇のために螫されて死するや、その夫、オルフエウス、轉た斷腸の思ひに堪へず。好める音樂もその手に付かず。力なき脚を曳きつゝゼウス神の許に至り、その准允を得て、下界に赴けり。夫妻の至情を描けるところ、我が神話と異曲同巧といふべきなり。斯くてオルフエウスは、黄泉王プルートンの前に進み、其の嘆きを琴の音に合せて歌ひしに、さすがの黄泉王夫妻も、感極まりて涙に咽び、遂にユーリヂシーを復活せしめて再びその夫の手に返へすに、同意するに至れり。但しプルートンのオルフエウスに命せし一條件あり。即ち黄泉の門を出づるまでは、妻の面を見るべからずといふもの是れなり。オルフエウス喜んで此の條件に服し妻を伴ひて左右を顧みず。只一直線に現世に向ひて進みしが已に黄泉の門を出でんとする刹那、自ら禁ぜんとして禁ずる能はず。遂にかの條件に背きてユーリヂシーの面を顧みしが、之は已に遲かりき。妻の姿は、此の時已に消えて夢よりも淡し。オルフエウス悔ゆれども及ばず。爾來遣る瀬なき悲嘆に沈み、その奏で出づる琴は悲調を帶びて歡樂を買はんとするものゝ意に滿たず。之がために、体軀を裂かれて、ヒープラス河に投せらる。その頭の河水を漂ひ下る間、その生命なき唇は尚ほユーリヂシーと囁きて止まざりしといふ。

之を我神話に比するに、黄泉神の同意を求むる條の如き、その姿を見るべからずとの禁の如き、目的を達するに近くして、遂に失敗に終れる點の如き能くも相似たるものかな。たゞオルフエウスは、黄泉王の命を畏みて久しく面を廻らさゞるに對し、妻は『情』なしとかこち、之に反して諸尊は『我を視給ふな』と禁められながら、遂に之を見て諸尊の怒りを買ふ。東西女性美の相違は、此間にも、ほの見えたり。

四　兩神話の解釋

オルフエウスの神話に關しては、學者間に種々の解釋あり。即ち一説にはオルフ

エウスは、岩を擊ち、枝を鳴らして、天然の音樂を奏する風を代表し、ユーリヂシーは盛り短かき曉の光が夕と稱する毒蛇に殺さるゝを擬人せるものなりといふ。然るに、又他の一說にいふ、オルフエウスとは太陽なり。亡せにしユーリヂシー即ち曉を取り返さんとて、黑暗々の裏に突入す。されど東方より昇りて之に面を合はさんとすれば曉は消えて跡なく、夫妻は相見るに由なしと。何れにしても、オルフエウスの神話は、自然神話に屬し、希臘の歷史に取りて、オルフエウスは、何等有機的關係を有するものにあらず。紀元前六世紀の頃オルフエウス派なる神秘的の結社を生じ、オルフエウスが下界に赴ける時の旅行記と稱する詩も出でゝ、勸善懲惡の目的に供せられしこともあれど、これとて、下界のことを語り得るものは、一たび下界に赴けるものならざるべからずとの理由より、其名假りに利用せられたりしに過ぎず。我が諾冉二尊は、史上の實在者にして、之を國史のページより除くを得ず。隨つて神話と古譚とを區別する嚴密の意義よりすれば、是は彼と異にして、即ち後者に屬するものなり。冉尊已に古譚中の一人物とすれば、その死は即ち文字通りの死と見るは蓋し自然の解釋にして、之を久米氏の如くに、上國下國の不和合のため、耦神の位を棄てゝ歸國せることの譬喩となす必要なし。斯くてこそ、古事記に諾尊その遺体の旁に泣き伏し給へるを記せる文字も、また無用に歸せざるなれ。

五　二世連續說

世界に行はるゝ來世說は、其の種類頗る多し。されど、之を大別すれば、二世連續說と賞罰說との二となる。此中、二世連續說先づ起りて、賞罰說之に次ぐことを論明したるは、專らタイロル氏の効績に歸すべきものにて、進化論者も亦同意するところなり。二世連續說とは現世と來世との間に甚しき相違あるを認めず。善惡貴賤悉く一處に至るとするの說にして、賞罰說とは即ち天堂、地獄說の謂なるが、我民族の信仰は、蓋し此中の前者に屬するといふまでもなし。隨てその如何ばかり古きものなるを察するに難からず。さて、一概に二世連續說といふも此中に種々の小區分あり。例せば、現世の人格その儘に來世まで繼續し、創傷瘢痕の末までも來世に傳はるとするものもあれば、靈魂輪廻して人格全く一變するとなすの說もあり。來世は現世に優れる世界なりとするもあれば、來世と現世とは優劣なく、或は來世は現世よりも劣れりとするものもあり。中に就て我民族の懷抱したりしものゝ

如きは、頗る現實的のものといふべく、死の關門を經て、黄泉に出入の自由なる、朝鮮海峽を渉りて、韓國に往返すると左まで差違あるとともなさゞりしなり。二尊の御子、素盞嗚尊が妃國即ち黄泉に往かんことを主張して止まざりしも、是等の事情に由る。（されど他日、素盞嗚尊及びその子大國主命が到り給へる根坐洲國も、等しく冉尊の黄泉なりとするは、余り拘泥に過ぐ）。隨つて黄泉に關する記事は悉く有形的にものせられたり。我邦の古俗墓中に、食器、兵器及び曲玉管玉等の粧飾品を併せ埋むる風ありしは、この二世連續説の信仰と照應ありて面白し。當時の信仰、靈魂と肉体とを區別せざりしを尤むるなかれ。余輩は寧ろ有形的の黄泉に下るに現身の儘にてしたりてふ信仰の素朴なるを愛す。希臘の神話に、オリオンの靈陰府に下りて野獸の靈を狩るといひ、緬甸のカレン族の傳説に死後彼等の靈、斧と剖刀との靈を用ゐて家を建て、稻を苅るといひ羅馬の詩人ヴオルジルの詩にディフオボスの靈、アイチイアスに、その瘢痕を示すといふが如きは、只發表の形式、無形たるに止まり、思想は有形的にして自ら滑稽の感を起さしむ。之に比すれば日本の神話は其の形式その思想と相調和せりといふべし。舊約全書に、セオルにあるものを、靈といひし所是れなきことも亦蓋し注意すべきことならん（ヘスチングス『聖書辭典』第一卷七九三頁左側參照）。希伯來人の思想はセオルにあるも、人格は滅びず、死は現世の人の滅亡ならずとしたりしなり。

六　來世の所在

來世を有形的に解釋する以上は、勿論來世の所在に關しても、一定の信仰なかるべからず。今世界に行はるゝ各種の信仰を分類すれば、之を三種となし得べし。天上と地上と地下即ち是れなり。就中、我が民族のは、即ち此の第三種に屬するものにして、ジエヴオンスの説に據れば（『宗教歷史』二九九頁）第二類の地上説最も古きものといふべく、第三類の信仰は、屍体を埋葬する習慣起りしより後のものなり。若し此の分類に屬する信仰を求むれば墨斯哥人のミクトラン然り。希臘人のハイデース然り。羅馬人のオルクス然り。巴比倫人のアラル然り。希伯來人のセオル亦然り。而して此の地下説の特徴として見るべきは、何れも之を不快陰鬱の處とすることにして、墨斯哥人はミクトランを望むに嫌惡の心を以てし、曾て愉快の思ひを以てせしことなしとは、ダイロルの説くところ。ハイデースまた暗冥に

して其の門は來者には廣く開かるゝも三頭蛇尾のケルベロスなる犬ありて、嚴に往者の出門を禁ずといふ。アラルは塵と泥とを飲食するところにして、セオルは神の暖かにして且つ豐かなる光の達せざる絶望の境涯なり(例せば約百記十〇二十二の如き)。而して我民族の信仰は、如何といふに是亦前記するところと符節を合するが如し。即ち火を點せざれば物を見るに由なく、冥官の許可なければ、身体の磨亂治するに由なし。黄泉醜女こゝに住し、蛆虫こゝに生ず(以賽亞十四〇十一參照)。その不快陰鬱何れの民族に比しても遜色なしといふべし。特に古事記には諸尊、黄泉より歸り給へる時『我は穢き國に至りて在りき』といひ、筑紫日向の橘の小戸の阿波岐原に至り、禊祓をなし給へりとの記事あり。黄泉の嫌惡すべき處とせられしこと知るべきのみ。

八　來世の門戸

死者の住むべき來世にして地下にありとする以上は之に至るべき門戸なかるべからず。而して此の門戸なるもの、大抵洞穴の類なるは、怪しむに足らざることなり。墨斯哥人の信仰にては、此の種の洞穴二つあり。一をカルカトンゴといひ、他をミクトランといふ。羅馬人のはコミチウムと稱し、死者の靈は、一年三回(八月廿四日、十月五日、十一月八日)此口に來りて供物を求むと傳へたり(或はいふ、オルクスへの門戸は、アヴエルヌスといふと)。バビロニヤ人は信ずらく、陰府への門戸は、ユフラテ河口の沼澤の中にありと。希臘人は思へらく、テナルム岬の近傍にありと。セオルの入口は舊約書中、一定の名を擧げし所なく、墓を以て、それなりとせし箇所は往々あり。(後日賞罰說の發達し『パラダイソス』と『ゲヘンナ』とを分つに至りては、ヒンノムの谷をゲヘンナの門戸としたりしこと、ヘスチングス『聖書辭典』第二卷三四五頁左側に見えたり)。今我民族のは、黄泉比良坂を以て之に當つ。比良坂とは古事記本文にも見ゆる如く、後世の伊賦夜坂にて、出雲國意宇郡にあり。今日揖夜神社の鎭坐せられある處なりといふ。而して諸尊が冉尊を訪ひたまふに、その埋葬所たる比婆山(若しくは紀伊の有馬村)よりすることなく、此の比良坂を撰みたりしは、注目するに足る。當時黄泉の門戸は、一般に此の比良坂と認められ居たる證と見るも、太過なかるべし。ジエヴオンスの說に由るに『宗教歷史』三〇六、七頁)是等の門戸なるものは、何れも地方的なるを以て、只一地方の人にのみ知られ居るに過

ざず。然るに、此の地方的の門戸以外、一般に認められ居る門戸あり。即ち日の沒する所なる西方是れなり。されど、此の西方說なるものは、アールヤ人種の例を以て推せば、稍後世に發達せし思想なるを以て、我が比良坂說の如きまた甚だ古きものたるを示すといふべし。

八　結論

余は以上の比較研究によりて、(1)我民族の信仰また意外に、鮮かに學術の歸納せる結果に符合せるを見、快心のことなす。されど、此の神話にして若し他民族の思想を交へたるか、或は之を借用せるものならしめば、勿論余輩の研究に取りて、何等の價値あるべからず。されど、小泉八雲氏『ジャパン』一二八頁)以下にいへるが如く、此の神話は、記紀の諸神話と其撰を異にし、日本特有のものたる證迹分明なり。げに來世の信仰は普く神の萬國民に授け給へる觀念なり。アールヤ人種の專有にもあらず。セム人種の特產にもあらざるなり。(2)我太古の民族は、靈魂と肉体の區別をさへ辨せざりし程に未開なりしにはあらず。かの幸魂、奇魂のことといと早くより我國史に記載せらるゝもの即ち之を證す。而も來世を見ること殆んど現世の如く、住む處と住む人と共に有形的にして、他國民に屢次見るが如く曖昧神秘ならず。一面、近世唯物論者等の淺識を嘲けるが如く、他面聖書の靈肉共救說(オールの『基督教世界觀』第五講第三節及び其附錄參照)に相呼應するに似たり。(3)來世を見ること斯く現實なりしにも拘らず、來世を忌むこと彼れの如く甚しかりしものは何ぞや。是れ賞罰說の未だ發達せず、陰闇なる下界の外に、光明の天堂あるを知らざりし時代には、誠に止むを得ざりしとなり。來世の信仰は、發達せる神の觀念及び善惡の觀念を以て補はざる可らざること明なり。

(開拓者第二卷八號あり)

バーラームとイヨアサフの話

題原

Ιστορία ψυχωφελὴς ἐκ τῆς ἐνδοτέρας τῶν Αἰθιόπων χώρας, τῆς Ἰνδῶν λεγομένης, πρὸς τὴν ἁγέαν πόλιν μετενεχθεῖσα διὰ Ἰωάννου τοῦ μοναχοῦ, ανδρος τιμίου καὶ ἐναρέτου μονῆς τοῦ ἁγίου Εὰβα ἐν ᾗ ἑ βίος Βαρλαάμ καὶ Ἰωάσαφ τῶν αοιδίμων καὶ μακαρίων.

イヨアサフ物語

中古東西兩洋に亘りて廣く行はれし宗教小説に『バーラームとイヨアサフ』(羅甸に從へばジョアサフアトなり。)の話といへるものあり。原本は希臘語なるが東洋語に於てはスリヤ語、亞刺比亞語、エテオピヤ語、アルメニヤ語、希伯來語等にも飜譯せられ、西洋語に於ては、羅甸、佛蘭西、以太利、獨逸、英吉利、西班牙、ボヘミヤ、波蘭等の諸國語に飜譯せられたり。其他紀元千二百〇四年の頃、諾威の一王は、夙くも之をアイスランド語に飜譯したりといひ、それより稍年月を經て、ゼズイット派の一宣教師之を比律賓島の古語なるタガラ語に飜譯したりといふ。

此の小説の著者は、果して何人なるべきや。之に關しては、頗る激烈の論爭あり。是れ此書の題號只『修道僧ヨハネ』とのみ記せるより起れるものなり。されど古來よりの傳説は、是れダマスコのヨハネなりといひ、而して此説大いに根據あるものなるが如し。先づ此の書中、聖像禮拜の問題顯著なるの一事は、此の書がよし他人の手に成りしにもせよ、ヨハネよりは非常に前ならざるを證明す。亦此の書の文体とヨハネが他の書の文体との間には、必ずしも相牴語する所なきも

丶如し。亦此の書中には、ヨハネが他の著書中に屢次引用せるバシリウスとグレゴリアス、ナジアンゼヌスとの語を引用す。また書中屢次ヨハネの他の著書より斷りなく長文を引用したるが、こは著者自身の所爲ならではあるまじきことなり。また羅馬教會殉教者傳の中には明かに此書を以てダマスコの聖ヨハネの著と記せることも無視すべきにあらざるべし。

抑もダマスコのヨハネとは如何なる人物なりや。父はセルギウスと稱し、亞細亞土耳其の一部なるバグダッドの王アルマンスルの大藏卿にて、紀元七百年頃王の元の首府ダマスコに生れたり。父セルギウスは奴隷として買ひ入れたる伊太利の修道僧コスマスなるものを以て、其子ヨハネの師となし、當時與へ得べき最上の教育を之に與へたり。セルギウス死してヨハネ暫らく、アルマンスル王の顧問長官なりしとありしが、紀元七百二十六年希臘皇帝レオ・ゼイサウリアンより聖像禮拜禁制の勅令發布せられしに激して三通の書翰を公けにし以て聖像禮拜のために氣焔を吐けり。而してバグダッドは希臘皇帝統轄の外にありしを以て、ヨハネは其震怒に觸るゝを免かれしかど、是より自ら其の地位に安んせず。紀元七百三十年マル、サバ修道院の僧となれり。院は死海の西岸に近く、エルサレムの南東十八哩ばかりの處ろにあり。彼れ其の殘年をこゝに送り、『正教信仰論』を始めとし、神學上の著作を出せること尠からず。紀元七百五十四年を以て死す。其の雄辯なりし故を以て『金口』ヨハネの稱あり。博學にして當時『第一流の哲學者なりしと目ざゝれ、羅甸教會にては、之を博士の一人として尊重す。されど判斷薄弱、批評眼また欠くる所あり。現に此の『バーラームとイヨアサフ』の中にも、譬喩話の能く當て箝まらざる場合一にして止らず。

本書著作の目的は、基督教と佛教と其前提相同じきも、其の結論は基督教遙かに佛教に勝るを示さんとするにあるが如し。或はいふ、釋迦若しキリストの教を聞かば、遂に基督教に入りたるべきを暗示せしものならんと。何となれば此書の主人公イヨアサフは、釋迦を、代表するものたること、勿論なればなり。されば、本書を實記事と認定し、バーラームとイヨアサフの名を等しく列聖傳中に記入して八月廿六日に之を記念する希臘教會と、十一月廿七日に之を記念する羅馬教會とは、知らず、識らず、釋迦を崇敬し居るものといふべし。

バーラームとイヨアサフの話

余近頃、一塲の有益なる話を聞けり。印度と稱ふるエテオピヤの邊境より來れる信者等はいふ、是れ信憑すべき記錄に基きて飜譯したる話なりと。昔は主人より金を預托せられながら、之を地中に埋め置き、主人の譴責を受けしとの譬話も（譯者曰く、此の譬話は馬太傳廿五章十四節以下に見ゆ。）あれば、余は、今默示すべきにあらず。さて、其話といふは左の如し。抑も印度の國は、土地廣く、人口多く、而して埃及と相距ること遠し。その埃及に面せる方には、海あり。又船の航通に堪ふる幾多の灣あり。內地は、波斯と其の境を交ふ。此地偶像教の暗澹裏に包まるゝこと、年久しかりしが、神の獨子、その弟子等を萬國に派遣して傳道せしめ給へる時、十二使徒の一人たる聖なるトマス、救世の使命を傳ふとて、此の印度にとは、派遣せられたり。主エホバ之と共に働きたまひ、且つ口にて說きしところを證するに、諸の休徵を以てし給ひければ、迷信は地を拂ふに至り、國民眞の信仰に歸するに至れり。

修道院の續々、埃及に於て建立せられ、且つ許多の修道者、之に參集するに至れる頃ほひ、其の道譽と德聲四方に聞こへ、遂には印度人にまで達して、彼等をも、同じく發奮興起せしめたり。即ち彼等の多數は、其の持てる一切のものを拋棄して、砂漠に到り、朽ち果つべき肉体にてありながら、朽ちざる者の生活を送り、且つ其中には、黃金の翼を搏ちて、天に昇り往きしものも多かりきといふ。

此頃、その印度の國にアペチルとなん呼ばれし王出でたり。富み且つ强くして、歐を服し、戰に勇なり。その身幹の偉大にして、其の容貌の美麗なる、共に一世の驚嘆する所にして、現世有形の財產には、欠くる所とてもなかりしが、其の靈魂は却て貪究と罪惡との擒なりき。是れ此王は、希臘の愚俗に倣ひ、太くも、迷信と偶像禮拜とに惑ひ居たりしを以てなり。

王は贅澤の有らん限りを盡し、酒池肉林の樂みを恣にし、その欲するところ、一も之を滿足せしめざることはなかりき。されど茲に一つ、王の幸福を減じ、その心を安せざらしめしものあり。他なし、その未だ儲貳を得ざりしことなり。

基督教徒及び傳道僧等は王の威嚴を憚らず。また其の脅迫を意とすることなく、只管に神の勤務に係はることに、其身を委ねたり。されば、世の歡樂を賤むこと恰かも糞土の如くキリストのために死を思ふこと渴けるが如く、殉教者の多幸を羨みて、恐れ

ず、憚からず、救主なる神の名を言ひ播めぬ。彼等が、口にするところは、キリストの外になく、此世の萬物の變遷無常にして、來世の生活獨り恃むべく、且つくちざるとを萬民に說き敎へぬ。此故に、虛妄の暗中より救はれて、眞理の心地よき光明裡を歩むに至れるもの多く、宮中のやんごとなき人々の中にすら、此の世の一切の望を抛ちて、修道僧となれるもの、是れありき。

王此の事を傳へ聞げる時、烈火の如くに憤り、勅令を發して基督敎徒に悉く其の宗敎を棄てしめんとせり。即ち天下の法官及び知事等をして、義人に課するに罰と死とを以てせしめたり。斯くて王は特に、修道僧社會の首長たるものを啣みければ、之に對して激烈なる戰を挑み、その結果、信者の社會にも、心を動かせし者多く、酷刑に堪ふる能はずして、蔑神の布達を奉せし者もありき。されど修道僧の重もなる者等は、苦を忍びて敎に殉し、然らざるものは、曠原若しくは、山林に隱れしが、是れ必ずしも、刑罰を恐れしためにはあらず、一種聖高の目的を抱きたればなり。

此の頃、王の一大臣に、勇氣、体格、容貌等その他、風采といひ、心術といひ、萬人に勝れし一好漢ありき。王の發したる蔑神の勅令を聞き、是までの浮華陋劣なる榮耀榮華を抛うち、修道僧の許に往きて、身を雲水に托するに至りぬ。斯くて此の大臣は、或は斷食に、或は徹夜に、或は讀經によりて、淸淨堅固に行ひ澄まし、情念の炎を抑へて和樂寂靜の光を輝かせぬ。

王は、元來此の大臣を愛すること深く、之を敬して至らざる處なきものなりしかば、其の一たび基督敎信者となれりと聞くや、其の友を失へるを慨くと共に、修道僧に對する憤怒一層激甚となりぬ。されば、草木を分けて、之が探索に手を盡くし、遂に砂漠に於て、之を捕へ得て、即ち法廷に曳き出せしに、錦繡の衣服今は襤褸と變り、贅澤の富者櫛風沐雨に窶れ果て、出家遁世の樣子紛ふべくもあらず。王は、一目此の落魄の樣を見て、憂悶憤怒の情に堪へ難く、覺えず絶叫して曰く、『噫、汝愚蒙の沒分曉漢よ、何がために名譽を棄てゝ汚辱を取り、光榮を抛ちて此の見る影もなき樣に陷ゐれるや。曾ては帝國の重臣にして、國家の柱石たりし汝、今は兒童が物笑となる。汝は我が友誼と交情とを忘れ果しのみならず、又自然に戻り、己れの子女を憐れまず、富貴顯榮を土芥の如くに思ひ、前の利達を以て、今の零丁に代ふ。是れ果して何の目的に由るや。イエスと名づくる者を崇めて、凡ての神、凡ての人に優れりとな

し、疾苦困厄の生活を取りて、幸多き此世の喜樂を捨て、而して何の得る所ぞや』と。」今は神の人となれる大臣、此言を聞き、莞爾として答へて曰く、『陛下よ、若し臣と親しく語らひ給はんとならば、願はくは、此の法廷より陛下の敵を一人も殘らず退居せしめ給ふべし。さすれば、臣、陛下の下問に答へ奉らん』と。王曰ふ、『して、其の敵とは何物ぞ。汝の退居せしめよといふは何者ぞ』と。聖者答へていふ、『怒と慾となり。此の二つのものは、上帝、昔より人間天性の協力者たらしめんとせしものなれば、肉に從はで、靈に從ふ人には、今も即ち然り。されど、陛下の如く慾に溺れて、靈を有せざる人には、兩者即ち其の敵なり、其の反對者なり。陛下にありては、慾かなへば快樂起り、かなはざれば、怒生ず。此故に陛下、今日を限りに斯る妨げを掃ひ捨て、之に代ふるに、謹正方直を以てし給ふべし。陛下願くは我が言ふ所を聞きて裁斷なし給へ』と。

王は快く之を諾し給ひしかば、件の出家曰く、『第一、陛下は、臣が現世の事を一掃し、來世永遠の事に身を委ぬる理由を質し給ふか。乞ふ聞こし召し給へ。今は、年經りたれど、臣が尚ほ少かりし頃、味多き佳言を耳にせしことあり。此言今に至りて臣が心を離れず。恰かも神の播き給へる種子の如くにして、其の芽、我心に萠え、今陛下の見そなはす如き花を開き、果を結ぶに至りぬ。さて、其言といふは、概略左の如し、曰く、「愚者は、實有のものを虛妄のものゝ如くに賤しみ、却て虛妄のものを實有のものゝ如く信じ且つ貴む。實有のものゝ美味を嘗めざるものは、虛妄のものゝ本性を知ること能はず。已に之を知ること能はず。いかで之を賤しむことを得んや」と。所謂る實有のものとは、即ち永遠不變のものゝことなり。是に反して所謂る「虛妄のもの」とは、今日誤まつて、幸福快樂のものと思はるゝ現世のことなり。噫陛下よ、陛下の心は、此の虛妄のものに繫がれたまへり。臣も前には曾て、之に心を奪はれ居たりしが右の言、暫らくも我が靈魂を尤めざりしことあらず。臣が道しるべたる臣が心は、善道を取らしめんと臣を促せども、罪の法、絶えず臣の心の法と相戰ひて恰かも鐵鎖の如く臣を縛し、此世の物の魔力、臣を捕へて之を放たざりき。

『されど救主なる神の慈愛と恩寵とは、此の恐るべき繫縛より臣を釋き放ち、斯くて、臣が心に力を與へて、能く罪の法に克たしめんとし、又臣が眼を開きて、善惡を見分けしめんとせり。此時臣は定かに大賢ソロモンが何書かの中に記したる現世の

事、空虛捉風なりとの意を解したり。之に次で、罪の慢、臣が心より撤去せられ、肉の重荷より湧きて、臣の靈魂に鍛きし暗雲消散し、臣は何のために、創造せられしかを悟り、神の誡めを守りて、上帝に歸るべきものなるを了得せり。此に於てか臣萬事を拋ちて之れに歸順し、奉れり。また臣は「和泥、作甎」(出埃及記、第五章十四節。)の勞役を免かれしめ暴慢なる此の世の君の權下を脫せしめ給へるに就きて、主イエス、キリストに由り神に謝し奉る。又此の泥土の現身にて、天の使の生活を送り得べき捷徑を示し給へるとに就ても、主イエス、キリストに由りて、神に謝し奉る。臣は之に達するを望むを以て、窄くして直ぐなる路を踏み、全然世の虛しきとを棄てゝ顧みず。凡ての變遷無常に遠からんと欲す。臣は實に善なるものを、善と呼ばざらんと決心せり。願くは、陛下も斯るものを棄て去り給へ。是れ臣等が之を棄てたる所以のみ。陛下は、慕地に、滅亡の地に突進し給ひつゝあり。而して臣等も、之と其の厄を共にせんとしつゝありたるなり。

『俗世間の義務に關しては、臣等未だ一も、其の盡すべき本分を疎かにせしとあらず。臣未だ曾て尸位素餐の誹りを受けしことなきは、陛下の知り給へるが如し。されど陛下若し臣が善の善たる宗教を奪ひ、臣をして惡の惡たる背神を決行せしめんとし、之がため、名譽利達を說くが如きとあらば、臣いかで、陛下は、善の善たるものを知らずと謂はざるべき。陛下は、神を以て、變化測られざる人間の交情に比するものにて、權衡を誤まれるものなり。臣等いかでか、陛下に同意し奉り、交友、名譽、親子の情、その他斯くの如きものを捨つることなきを得べきぞ。左すれば、少なくとも、臣だけは陛下に盲從し奉らざるを照明あれ。陛下たとひ臣を野獸に投與し、或は又白刃紅火に由りて臣を殺さんとし給ふとも、臣敢て恩主と救主を棄てじ。臣は死を畏れず。現世のものを求めず。臣その生滅無常なるを賤しむ。その何れが果して、有用、永在、完全なりや。啻に然るのみならず。此世のものゝある處には、亦多くの苦惱、多くの悲哀、多くの憂悶あり。愉快歡樂は、是より生ずれども、艱難苦痛は必ず之に伴ふが故に、其の富は、實は窮乏にして、其の光榮は實は、汚辱なり。天啓を受けし臣の一教師曰く、『舉世は惡者も服す』と(約翰壺書、第二章十九節。)又曰く、『此世あるひは此世にある物を愛する勿れ、凡そ世にあるものは皆肉体の慾、眼目の慾また勢より起る驕傲なればなり』と(約翰壺書、第二章十五、十六節。)又曰く、『この世と其慾とは逝るものにて、神の旨を

行ふ者は、永遠存るなり』と（約翰書第二十七節。）臣は、神の慈愛を求むるを以て、一切を放棄し、同一の希望を抱きて同一の神を求むる者の社會に投じぬ。此の社會には、爭鬪なく、嫉妬なく、痛恨なく、憂惱なし。皆等しく、光の父が、己れを愛するものゝ爲めにとて備へ給へる永遠の邸宅に達せんとし、相競ふて同じ馳場を走りつゝあり。此の人々は是れ臣が父母、臣が兄弟、臣が知己友人なり。臣今や、前の友人兄弟を避けて、曠野に住し、暴風怒濤の中より臣を救ひ給ひし神に事へつゝあり』と。

さて此の神の人が欣然として、如上の佳言を說ける間に、王は憤怒の情に堪へず。嚴に此の聖者を罰せんものと思ひしが、其の威嚴と令聞とを憚かり、暫らく之を差控へたり。されど最後に遂に叫んで曰く、『匹夫、汝今や自ら滅亡を速く。是れ運命の致すところならん。汝心と舌とを研ぎて、猥りに、此の愚蒙の言を吐く。若し我、初めに、此の法廷より、怒を一掃せんと約するとなからんには、汝を火中に投棄し去らんものを。されど汝、賢しくも、斯る約束を以て、我を縛したれば、こたびは前の交誼に免じ、其の無禮を恕す。今は、疾く我が面前を立ち去れ。再び過ふとあらば、其時には、嚴刑を赦すとなからん』と。

神の人は、此時、殉教を遂げ得ざりしを不本意に感じつゝ、砂漠へと立ち去りぬ。而して、一方には、亦、王、怒りに任せて、修道僧に對する迫害を一層嚴酷にせり。

此の頃、王は玉の如き一子を得たり。其の容顏は、己に人をして將來を臆測せしむるに足る。人はいふ、此の國にて、斯まで艶麗の子の生れ出でし例なしと。此に於てか、王の喜び譬ふるに物なく、名をイヨアサフと命じて、其の誕生祝賀の會を諸方に開かせ、人民を饗し、高官、軍人及びそれより以下の者にもそれ〳〵恩賜あり。さて此の太子誕生日の宴會にカルデヤの天文學に熟通せる五十五人の名家集まり來りしが、王、胸襟を開いて、之と議る所あり。その一々に對して、太子の將來如何あらんと下問せり。彼等は暫らく、熟考の体なりしが、やがて曰く、太子は其富と其力とを以て、世に知らるゝに至るべく、前代未聞の名王となり給ふべしと。然るに五十五人の中、特に卓越の聞えある一占星者は曰く、『陛下、臣が星の行路を解せし所を以て見るに、太子將來の光榮は、此國土の中に在せず。此の國よりも更に廣大に、更に優良なる國に存す。其故他なし、太子は、陛下の迫害し給ふ基督教を奉ずるに至り、如何ほど力を盡すとも其の目的を變じ、其の希望を奪ふ能はざればなり』と。さ

て、此の占星者の斯く述べしは、猶ほ昔のバラムの如く、（民數紀略廿三章。）其の占星術之をして斯く豫言せしめしにはあらず。神その敵たる者を使用し給ひ、眞理を明かにして、此の蔑神の國民に推委の言なからしめんとしたるなり。王は此言を聞きて心甚だしく憂悶し、喜悅之がために中斷せられたれど、尙ほ其の首都に莊麗なる宮殿を設け、太子の住まふべき樓閣を新築せり。

太子、稍長じたる頃、王は太子と世界との交際を遮斷すべしとの命を發し、年少にして氣品ある敎師及び侍從數名を扳擢し、之に命じて太子が世間悲慘の事を見聞するなからしめんとせり。即ち太子は、死、老、病、貧その他、憂を催ふし、樂を殺ぐ程のものを、一切見聞すべからざりしなり。侍從は、只愉快悅樂のものをのみ太子に接觸せしめ、之を魅し、之を醉はせて、その來世のことを考ふる力を殺ぐべかりしなり。特に太子は、一語だも、キリストと基督敎のことを聞くを得ざりしなり。王は、かの占星者の豫言を聞き、此點特にその配慮する所たりしなり。王命じて曰く、太子の從者中、若し病に罹るものあらば、少しも猶豫なく之を退居せしめ、その代りに健全活潑のものを入れ、暫時と雖、不快の事を其の眼に觸れしむるなかれと。げに王は、如上の計畫をなし、如上の事を實行せり。是れ全く見れども、見えず。聞けども悟らざりしを以てなり。

王或時、修道僧の痕跡、殘らじと思ひ居たるに反し、尙ほ多少の者、居住せりと聞き、怒りに堪えず、使を都鄙各處に派遣し、凡ての修道僧は、悉く皆三日以內に退居すべく、期を過ぎて、尙ほ殘留するものあらば、活きながら、之を焚殺すべしと令したり。王曰く、是れ、人に勸めて、禁死者を神とし崇めしめんとするものは、即ち彼等修道僧なればなりと。

既にして太く王の心を刺激し、修道僧に對する憤懣を絕頂に達せしめたる一事件起れり。事の次第を言はんに、王の宮中に首相某と謂へるものあり。溫厚敬虔、救を求めて倦まざりしかど、王を憚かりて之を秘密にせり。然るに王の、首相に對する寵を嫉む二三の人あり。心を合せて、之を彈劾せんことを計り、只管その機會の到來を待てり。或時、王常隨の者と共に、出獵せることありしが、首相も亦、此の一行の中にありき。而して相携へて歩む中、攝理の致す所と覺しく、荊棘中に倒れ臥したる人を發見せり。其の足は野獸のため、無殘にも嚙み碎かれたるが、今首相の過ぐる

を見るや、徒らに看過ぐすことなく、一顧を垂れて、其の不幸を憐れみ、其宅に伴ひ歸られたしと乞へり。且つ曰く、『我は背德忘恩の擧に出づることなかるべし』と。首相曰く、『我敢て正義のために、汝を助け、又我が力に應じたる保護を與ふべし。されど今汝のいへる我に報ゐんとする利益は何ぞや』と。憐れむべき負傷者即ち答へて曰く、『我は、讒誣の治療者なり。此故に閣下若し讒誣が陰言のため、中傷せらるゝが如きことあらば、適當の治療を施し、閣下をして害なきを得せしめん』と。首相は之を左程に意味あるとも思はざりしが、神の誠に基づき、意を決して、之を其宅に伴ひ歸り、且つ丁寧に之に看護を加へたり。

偖前に說きたる嫉める人々等、久しく蓄へて發せざりし害心を、此に至りて曝露せり。即ち首相を王に讒していふ、首相は神々を棄てゝ基督敎を奉じ、以て王平生の寵を蔑ろにする而已ならず、國民を唆かして己れに與みせしめ、反旗を翻へすの陰謀ありと。且つ曰く、『陛下若し、臣等の言ふ所の實否如何を知り給はんとならば、密かに之を召して、自ら試み給ふべし。即ち陛下は、祖宗の宗敎國王の榮位を拋ち、前非を悔ひて、曾て迫害したる修道僧たらんとすと僞り給へ』と。王固とより首相の

己れに對して誠忠僞りなきを知る。隨つて、如上の、建言は、讒誣に相違なく、之を審明せずして承認するが如き無からんと決心せり。此故に王は、首相を別室に召し、而して曰く、『我友よ、汝は、我が修道僧に對し、凡ての基督敎徒に對し、如何なる感情あるかを知る。されど、我今前非を悔ゆ。自今以後、俗界のことに執着せず、却て彼等の說き播むる希望を我が希望となし、死のために斷絶すると疑ひなき我世に代へて、未來永遠の國を嗣がん。而して我この目的を達するの途、基督敎徒となりて、王位を拋うち、人生の愉快歡樂を捨つるの外、なからんと思へり。我即ち今後は、曾て無謀の迫害を加へし各處の出家及び修道僧を探出し、以て之に加擔せんとす。汝が之に就ての意見果して如何。我に何等の忠告を與へんとするか。有りの儘に之を告げよ。我汝が彼等と同樣、誠忠義心の人なるを知る』と。此時、この善人は、王の言の全く陷阱たるには氣付かず。却て深く之を心に感じ、涕淚滂沱とし曰く、『陛下、萬歲なれ。陛下の建てたまへる策、善にして良し。是れ天國は、求め難きものなるも、之を求むるには、我等全力を盡さゝるべからざればなり。此故にキリストといふ、「求むる者は得べし」と（馬太傳七章八節）抑も現世の榮華は、愉快歡樂を生ずるの觀を呈す

れども、之を捨つるは却て益あり。是れ此中に實あるとなく、之に由りて滿足を得たるものは、後ち七倍の苦痛を受くべきを以てなり。其の苦、其の樂共に蔭よりも淡く、其の去り行くは、海往く船、空飛ぶ鳥よりも尙ほ速かなり。之に反して基督教徒の希望する來世の希望は、堅確にして鞏固なるも、之に伴ふて、現世の苦痛あり、現世の快樂は久しきと能はず。且つ報ゐとしては唯刑罰ある而已。只竭きざる苦痛ある而已。即ち快樂は短かく、苦痛は永し。然るに、基督信徒を以て見れば、苦痛は一時的にして、幸福及び利益は永久的なり。希くは陛下の善き思ひ付き、水泡となりて、終らざらんとを。是れ朽つべきものに代へて、永遠のものを受くるは、至幸なればなり」と。

王之を聞ける時、心中、憤りに堪へざりしかど、怒りを抑へて、之を言に發せざりき。されど首相は、敏捷慧眼の人なれば、王の己れを怒れるとと、且つ己れは其の術中に落ちたりしとを看破せり。たゞ如何に王を宥むべきか、如何に其身に迫れる危險を遁がるべきかを知らず、懊惱として歸宅せり。斯くて夜一夜眠るとを得ざりし間に、かの足を噬み碎かれしものゝとを思ひ出し、即ち之を召していふ、「汝は讒誣の治療者なりと言へると、是れ我が記臆するところなり」と。答へて曰く、「然り。而して閣下望みとあらば、今我が技倆を御覽に入るべし」と。首相即ち王の己れに對して親切懇到盡さゞる所なかりしを說き、斯くて己れが端なく其の狡獪の策に陷あり、腹藏なき答辯を吐露したりしとに及び、王は、此の忠告を懌ばず、胸中痛く怒る所ありしもの、如く、顏色を變じたりしとを語れり。

憐れむべき病者は、暫らく熟考したる後、やがて曰く、「王には、閣下に異志あるとを疑ひ、術を設けて閣下を試みたるものなり。果して然らば、閣下宜しく其の髮を削り、其の美服を脫し、粗毛の衣を着て、朝、參殿せらるべし。而して王若し此の奇行の理由如何と問ふとあらば、宜しく左の如く答へ給ふべし「陛下昨日、臣に下問し給ふ所ありしを以て、臣即ち今後陛下の取り給はんとする途に隨行するの準備をなせり。思ふに榮華は、慕ふべく、亦樂しきものには相違なきも、陛下之を捨てたまふ上は、臣いかで獨り之に執着すべき。正しき途は、崎嶇羊腸に相違なきも陛下と共に行かば平滑にして且つ愉快ならん。陛下己に此世にありて臣に其の快樂を分與し給ひたれば、又今陛下と其の苦痛を共にし、以て來世に其の幸福を共にせんと欲す」と」

首相即ち此の可憐の友の忠告を聞き、且つ之を實行せり。而して之を見、之を聞きし王は、其の誠忠を諒として、之を喜びぬ。斯くて王は、首相に對する非難の無根なるを看破し、從來に優りて大なる名譽、親しき交情を之に加ふるに至れり。されど、修道僧に對しての怒りは、以後益々強く、人をして快樂を捨てしめ、夢の如き希望を以て之を欺かんとするものは、即ち修道僧の敎なりと放言せり。

さて、余が前に說きたる王太子は、特に設けられし宮殿の中に別居したりしが、今は長じて一箇の少年となり、エチオピヤ人及び波斯人の一定の學課を卒業せり。太子、人品高貴、心術愼重、また德行を以て聞ゆ。自然に關して疑問の生ずる每に、之を敎師に質すに、敎師は、其の聰明敏慧なるに驚くの外はあらず。王は其の外貌の秀麗にして、其の內心の氣品あるを愛する事深く、之に伴たるものを警めて、一切人生悲慘の事を之に知らしむると勿らしめ、死に關するとを口にして、現世の快樂を減殺するが如きと勿らしめんとせり。されど王は、望むべからざるとを望めるものなり。即ち諺に所謂る天を試み、天を擊たんとして箭を放つ人の如きものなり。死豈人類の耳目に觸れずして止むとあらんや。然り死は、太子の耳目にも漏れざりき。太子、その智能の次第に啓發するに當りてや、自ら思へらく、何故我が父王は斯く世間と交通せしめず。我に面會せんとて來るものを拒んで入らしめざるやと。而して斯くの如きは、全く父王の命令に出づるものなるを熟知し居たれども、さりとて、亦之を問ひ出すを恐れたり。是れ父王が我益となるとを禁止すべしとは、信ずべからざりしを以てなり。之に加ふるに、太子は亦思へらく、事若し父王の意に出でしとせば、たとひ之を問ひ出でたりとも、到底事實を發見するに由なかるべしと。由て太子は之を父王以外の人に質問するに決し、或時その殊に親近なる一侍講に、特別の饗應をなし、美麗の贈物を與へ、而して王が、何故、この殿中にのみ我を籠居せしむるかと質問せり。且つ曰く、『汝若し我に告ぐるに、事實有りの儘を以てせば、我は永く汝と朋友たるとを誓ふべし』と。此の侍講は能く己れを知るの人なると共に、また太子の聰明をも知る人なり。而して其の將來を慮かるが故に、一切を打ち明けて之に語れり。即ち王が、基督信徒殊に修道僧に對して迫害を加へたると。修道僧等が追放せられたりしとと。太子誕生の時、占星者豫言をなしたりしと等是なり。斯くて尙その語を續けて曰く、『斯る理由にて、王は、殿下が基督敎を

聞き、基督教に傾くを喜ばず。之がために、王は少數特撰のものをのみ太子に近づかしめ、且つ我等に命じて、斷然、人生の暗黒面を說くと勿らしむ』と。

太子之を聞ける時、別に言もなかりしが、大に感ずる所あり。爾後聖靈また其の恩寵を以て、彼れの靈眼を開き、遂には、下條に說き示すが如くに、眞の神を知るに至りぬ。王は太子を愛するの故を以て、屢々之を訪問せしが、太子曾て王に問ふて曰く、『陛下よ、臣の心、憂愁煩悶に燃えんとするが故に、一言奏問し奉りたきとあり』と。父王之を聞きて心膽の寒きを感せしが、即ち曰く、『我愛兒よ、汝何の憂ふる所ありて、其心を痛むるや。語れ、我之を變じて喜となさん』と。太子いふ、『臣何故なれば、此の城門の內に閉ぢ込めらるゝや。臣何故なれば、世間との交際を遮斷せらるゝや』と。王答へて曰く、『我子よ、我は汝の心を痛ましめ、汝の喜びを紊るが如きものゝ汝が眼に觸るゝを欲せず。我は汝が愉快歡樂の中に圍まれて、生涯を安らかに送らんとを望むなり』と。太子曰ふ、『されど陛下、今日の如き樣にては、臣の生活は、喜樂幸福にはあらず。寧ろ苦痛困難なり。此故に、臣飲食共に、口に甘からず。臣は此の門外にあるものを見んとするの情、切なるものあり。陛下若し、痛苦の中に生活するを好み給はずば、願くは、臣をして門を出で、是まで臣の見るを得ざりしものを見て、樂むことを得せしめよ』と。王、心に之を憂ひしが、若し其の要求に應せずば、却て太子の苦痛を增さしむる恐れあり。此を以て、王は太子の出門を欲する時、何時にても差支なき樣、馬と隨員との準備をなさしめしが、之と同時に、左右に命じていふ、太子の眼に快からざるものを、一切見せしむべからず。美にして且つ面白きものをのみ之に見せしめよと。加之、王は又、數組の樂隊に命じ、面白ろき歌を謳ひ、樂しき曲を演じつゝ市街を練り行きて、太子の心を轉じ、且つ之を樂しましめよと言へり。

爾來、太子は、屢々出門するを得るに至りしが、或時左右のものゝ落度に由り、一人の癲者と、一人の盲人、太子の眼に觸れぬ。之を見し時、太子は其心に苦痛を覺え、己れの傍にありしものを顧みて曰く、『是れ如何なる人々ぞ。此の悽まじき樣は、果して何ぞ』と。隨員等已に太子の眼に入りしものを隱蔽するに由なく、即ちいふ、『是れ人類を苦むるの不幸なる人、病ある時は皆斯くの如し』と。太子曰く、『斯くの如きは、萬民、誰にもあるとあるか』。彼等曰く、『萬民必らずしも皆然りとは謂はじ。唯氣分の勝れずして其の健康を害せられし人にのみ是れあるなり』と。太子また問ふて曰

く、『此事若し萬民誰にもあるとならずとせば之に罹るべきの人、豫じめ之を知ることを得るや。抑も亦、忽然何の豫報もなくして來るものなるや』。彼等曰く、『誰か能く未來を洞見し、また之を豫知せんや。是れ人間能力以上のことにして、全く神の特權に出づるものなり』と。太子は、その目に視たることに心を痛ましめたれば、此上、もはや其問を發せず。その顏色は、自ら常ならざるものありき。

その後、幾日も經ざるに、太子また門を出で、一老人の、顏に靑海の波を寄せ、腰に梓の弓を張り、手足痿え、髮白く、齒脫け落ちて、聲顫ふものあるを見たり。太子大いに驚き、あの老人をこゝに近づけよといひ、而して此の奇異なる有樣の意味如何と問へり。隨員曰く、『彼れ已に其の壽命の極度に達したるものにて、其力は次第に衰へ、其手足は弱く、今樹はすが如き憐れむべき狀態に陷いれるなり』と。太子問ふて曰く、『而して之が結果は如何なるべきや』。隨員曰く、『只死あるのみ』。『死なるものは、萬人皆免かれざる運命なるや。或は又たゞ特別の人にのみあることなるや』。『死或は不時に人を拉し去ることあり。然らざるも、年月の推移と共に、死の經驗を免るゝ人は、即ち是れあらず』。其時太子また曰く、『幾年の後ちに、人間皆此の經驗に過ふものなるや。且つ死は絕對的必然のものなるや。此の不幸を免かれ、此の不幸を救はるゝの途はあらざるや』。隨員曰く、『人、八十歲若しくば百歲に達すれば、即ち老ゆ。此時彼等は死すべく、而して死せざること能はず。死は自然に對しての負債にて、最初より人に課せられたるものなれば、之が來襲に過ふべきは、必然なり』。聰明の太子、此の事を聞くや、心の底より之を憂へ、而していふ、『此事若し眞ならば、げに、人生は苦なるかな。萬の苦痛と悲哀とに滿てり。死若し汝等のいへる如く、不可避にして、又不時なりとせば、誰か死を豫想して、心に疑懼なきを得るものぞ』。斯くて、太子は、是等のことを思ひ廻らしつゝ立ち去りしが、爾後、造次顚沛にも之を考慮せり。死は今にも、襲ひ來るが如く思ひては、且つ憂へ、且つ悲みしと幾何ぞ。而して自ら其心に思へらく、『死は、何時、我に來らんとするや。我死せば時間は、萬物を湮滅すべく、誰か我を記憶するものぞ。我死せば果して滅無に歸するものか。抑も亦次生及び來世なるものありや』と。太子は、間斷なく此の問題に腐心したる結果、顏色憔悴、形容枯槁するに至りしが、さりとて、其の父王に面會する時には、其中心の苦痛を外に露すを欲せず。さも愉快げなる面色を粧へり。されど其心を滿足せしめ、また

慰撫の言を發し得る人を求むる念は、暫らくも止みしと、是れあらず。斯くて太子は、悒々として樂まず、心に善きものを求めて怠りなかりし際、萬物を視たまふ眼、彼を顧みたまひぬ。萬物を救ひて、之に眞理を示すを喜びたまふ神、彼をも看過られにし給はざりき。即ち神は平生の慈愛を之に顯し給ひ、斯くして之に其の歩むべきの途を示し給ひぬ。

其頃一人の修道僧あり。神の眞理に通曉し行ひ正しく、主義健全にして、勇猛精進に、修道者の規則を悉く實行せり。其の出身地は何處にて、其の血統は如何。余は今之をこゝに明言すると能はず。されど、彼はシナルの寂しき地に住まひ、遂に高僧の地位に達したる人なり。此の老人の名をバーラームといふ。神の默示に由り、太子に關したる一切の事を知得したりしかば、砂漠を出でゝ、人里に入り、服裝を變じて、華麗なる衣を纏ひ、船に乘じて、印度に渡航し、身を商人に扮して、太子の宮殿ある都へとは到着しぬ。斯くて、彼は、太子に關し、又太子の侍臣等に關し、調査をなすと數日。遂に、前にも擧げたるかの侍講が太子と最も親近なるとを確かめ私かに之を訪問して言ふ『閣下、余は、商人として遠國より來れるものなるを御承知あれ。また余には、天下無類の一寶石あり。余今日まで、之を人に語りしとあらず。されど、余今之を閣下に告ぐるは、閣下の愼重明達なるを見込みしに由る。閣下若し余を太子に紹介し給はらば、之を殿下に奉らんと欲す。此の寶石は、凡ての財寶に優りて貴く、心眼の盲ひたる者に智慧の光を與ふべく、聾者の耳を開くを得べく、啞者には語るを得させ、病者には健康を與へ、魯鈍の者を智にし、惡鬼を逐ひ出し、其他、その所持者には、凡ての善きものと、愉快なるものとを與ふ』と。侍講答へて曰く、『余は足下が謹直の人なるを疑ふにあらざるも、其の言ふ所は、誇大なりと感ず。余や、今日までに見たる寶石眞珠の幾許なるを知らず。されど、足下の述べられし如き効能を有する寶石のとは、未だ曾て見聞したることあらず。兎も角、今余に一覽せしめよ。而して其物若し、足下の言の如くならば、余直ちに之を殿下に進獻すべく、足下即ち其の報酬として殿下より最大榮譽と贈物とを得らるべし。余自ら其の實物を見て、滿足するにあらざる以上は、此の怪說を我が君主に告ぐるを得ざるなり』と。バーラーム答へて曰く、『閣下が、此の寶石に具はれる効能を未だ曾て見聞せられしとなしといふは、當然なり。余の言ふ所は、決して生平の常事にあらず、却て奇異に

して且つ驚くべきとなればなり。されど今閣下、之が一覽を求めらるゝが故に、少しく我が言はんと欲する所を述べしめよ。抑も、此の寶石には、諸他の能力と共に、また一の特性あり。即ち非常に健全の視力と、清潔無垢の身体を有する人にあらざるよりは、之を見るを得ず。然るを此の二つの資格なき人、之を見るが如きとあらば立刻に其の固有の視力と、心力とを失はん。さて、余は、醫學にも聊かの素養あるものなるが、今閣下の視力強からざるを知れり。此故に、余閣下がその視力を失ふに至らんことを恐る。されど太子は、日常方直にして、其眼は強く且つ美なるを聞き及べり。隨つて余は此の寶石を太子に示し奉るを恐れず。閣下、願はくは、躊躇なく之を殿下に告げられよ。時を失はゞ、殿下また此の寶石を得るに至らざるべし』と。侍講答へて曰く、『事實若し足下の言の如くならば、今こゝにて、其れを示し給ふ勿れ。我身は多くの罪に汚れたるものにして、我眼は、足下の見たまふ如く強からず。されど足下のいふ所、又棄て難きものあるを以て、之を殿下に告げ奉るべし』と。

太子、此の侍講の言を聞きし時、心に愉快歡喜を感じ、恰かも其の靈魂に靈感を得たるが如く覺え、その人を伴ひ來れよと命じたり。

バーラーム其の御前に出でたる時、第一に先づ、式の如く挨拶をなしぬ。斯くて、侍講の退坐するや、太子イヨアサフ、之に言つて曰く、『汝が驚くべき効能ありと吹聽したりといふ其の貴重の寶石を、今我に一覽せしめよ』。バーラーム答へて曰く、『我は殿下の如き地位にある方に對し、僞り若しくは邪を語り奉るべきにあらず。殿下が我に就て聞きたまへる所は、悉く眞なり。されど先づ、殿下の氣質を試みたる上ならでは、我は秘密を打ち明くること能はず。我主の言にも、「種まく者播きに出でしが云々」（以下馬太傳十三章三節以下に見ゆる播種者の譬喩を略す）とあり。此故に殿下の心、若し沃壤の地ならんには、少しも躊躇なく之に神の種を播き、以て大秘密を明かし奉るべし。されど若し磽地なるか、荊の中なるか、或は又多くの人に踏まるゝ路旁ならんには、善き種子を播くも何かせん。是れ空の鳥、地の獸の運び去るが儘に委すると等しく、斯くの如きものゝ前に、眞珠を投ずるは、我が禁止せられ居るところなり。されど、殿下が、「此に怨れると、即ち救に近きこと」（希伯來書六章九節に見ゆる語）は我が信ずる所なり。語を換へて言へば、殿下が此の寶石を見ると共に、その光の力にて百倍の光を見、百倍の果を結

ぶべきは、是れ我が信ずる所なり。元と我が此の長途の旅行をなすに至れるは、全く殿下のためにて、殿下に其の未だ見ざりしものを示し奉り、其の未だ聞かざりしものを敎へ奉らんとの意に出づ」。

此時太子は、眞理を知らんとするの念、篤く、今謁見を許すに至れるは、實は、此意に出づるとを告げぬ。パーラーム曰く、「殿下の此の處置、眞に其の地位を辱かしめず。殿下の心、虛妄の榮華に眷戀たるものにあらで、隱れたる望を懷きたまふと明了なり。昔曾て一の大王あり。或時、金光燦爛たる戰車に駕し、其の隨員と共に、旅行したりし際、二人の不潔なる襤褸を纏へるものに遇へり。その顏色は蒼白にして、且つ憔悴せり。王の之を見るや、直ちに其の車を降り、地に跪きて、之に頓首し、次で、起ち上り、之れを懷きて、最も慇懃の挨拶をなしぬ。隨員一同之を見て、其の王位の貴きを顧みざるものとなし、頗る憤激したりしが、さりとて、公然その非を鳴らすものなく、王弟に乞ふて、今後斯る威嚴冒瀆の所爲なき樣、諫告せしめたり。王弟即ち王に面して諫むる所ありしに、王が之に對しこの處置は、王弟初め之を解するに苦めり。抑も此王は、人に死刑を宣告したる際は、必ず使者を送りて、其の門前に喇叭を吹かしむ。此故に、此喇叭を名けて、死の喇叭といふ。此の喇叭を聞けるもの、皆その人の死に處せられしを知れり。而して、王は、其夜、此の死の喇叭を、その王弟の門前に於て、吹かしめぬ。王弟之を聞き、即ち其の一切の望みを拋ち、其夜を徹して後事を整頓し、曉に喪服を着し、妻子を伴ふて、且つ泣き、且つ悲みつゝ王宮に至れり。」王即ち其の入殿を許可し、且つ其の悲みを見て謂て曰く、「噫無智無覺の者よ、汝は我と同等の人間たるにあらずや。又汝は我に對して、罪を犯せしとなきにあらずや。然るに、我が使者を恐るゝと、斯くの如く甚だしとせば、我れ吾神の使者に敬意を表せしを尤むる道理やある。此の使者は、喇叭を以てするよりも尙ほ明瞭に、我死を豫告し、また我が屢次罪を犯せし主の降臨切迫せるを豫告す。今、我れ、汝の愚を悟らせんとて、斯くの如き手段に出でぬ。また之によりて、汝を介して、我を尤めさせし者等をも警めんと欲す」と。王は此の忠告を與へし後ち、其の弟を歸館せしめたるが、後ち木製の盒四箇を作らしめ、その二箇には、金を張り、此の中には、死者の骨を盛り、且つ金の鎖を以て、之を束ねたり。次に亦殘りの二には、瀝青を塗り、之に容るゝに、寶石、眞珠、香水を以てし、而して之を束ぬるに、毛綱を以てせり。斯くて王は、か

の襤褸の貧人の待遇を快しとせざりし侍從を召し、四箇の盒を彼等の前に並べて、甲、乙二組の價値をいはしむ。彼等即ち金を張りしものを貴しと鑒定し、而していふ、『此中には、王冠、王綬あるに相違なし』と。之に反して、彼等は、瀝青を塗りしものを、取るに足らざるものと鑒定せり。其時、王は彼等に語りて曰く、『我は汝等が必ず斯く鑒定すべきを知れり。汝等は只肉体を用ゐて、其の肉眼の見るものをのみ判斷すればなり。斯くの如きは、汝等のなすべからざるとにして、貴重のものと無價のものとを監別するには、宜しく辨別の眼を以てすべきなり』と。斯くて王は、金を張し盒を開くとを命せしが、之を開きし時、惡臭と醜觀、面を背けしむるものありき。王曰く、『是れ絢爛の衣を纏ゐて、其の美麗に誘るものゝ摸型なり。されど、彼等は、その内部に、毒と惡事とを盛る』と。次で瀝青を塗りし盒を開くべきを命せしが、座に在るもの、皆その内より出で來る美觀と芳香とを、喜ばざるはなかりき。王即ち曰く、『汝等、是等のものが、誰に似たるかを知るか。是等のものは襤褸をその身に纏ひ、外觀如何にも下賤にして、我若し跪いて、之に禮する時は、汝等必ず非難すべき人に似たり。されど辨別の眼を以て、彼等の眞價と威嚴を知る。我は斯くの如き人に接するを以て、一身の光榮となす。是れ、我は王冠紫衣にも優りて、彼等に尊敬すべき價値あるを認むればなり』と。斯くて王は、彼等をして、自ら恥づる所を知らしめ、且つ外觀に誤まらるゝとなく、必ず内實に注意すべきを教へしが、今、殿下も亦、此の賢明篤信の王と等しく、我を近づけたまふ。是れ全く殿下が善き望を求むるがためにして、余は思ふ、殿下必ず之に失望するとなかるべし』と。イヨアサフ曰く、『汝の言は、善且つ巧みなり。されど、我今こゝに一事の知らんと欲するものあり。汝曩きに汝に播種のとを教へしといひし汝の所謂る主とは、何人ぞや』。

（こゝに天地創造の事、人類墮落の事、偶像禮拜進歩の事、アブラハム、神に召されし事、ユダヤ人の歴史、神子化身の事、キリストの生死復活昇天の事、基督教會發生の事等に關するバーラームが長談、話の記事あり）

太子是等の言を聞き終れる時、光その心に入りぬ。由て、喜びに滿ちて其座を起ち、バーラームを懷きていふ、『尊者よ、今汝の說けるところは即ち、かの珍寶ならん。隨つて、汝之を秘密に付し、必ずしも求むるものに悉く之を示すとをせず、只强力の靈眼を有するものにのみ示せるならん。見よ、我れ今、この言を聞くと共に、最も愉快

なる光、我心に入り、久しく我を掩ひたる憂の雲、全く消散せり。我言、當れるや否や。また汝、今いひしよりも以外のことを知るあらば、乞ふ猶豫なく我に告げよ。

〔斯くてバーラームは、基督教會に入るには、洗禮を受くべきものなること、及び來世永生の望み等に就て語り、また復活を詳說せり。次で其の問答中バーラームは、偶像禮拜の愚に言及したるが、左は即ち其の例解なり〕

『偶像禮拜の罪を犯すものは、果して之を何に譬ふべきや。我今、一聖人より聞けるところの例解を說かん。該聖人曰く、偶像を禮拜するものは、鶯と名づくる小鳥を捕へて之を食はんとせし捕鳥者の如し。此時鶯、口に辯說の力を與へられ、而していふ、「今、君、我を殺せりとも、何の益かある。我を食へりとも、其飢を滿足せしめ得ざるにあらずや。されど、君、今、我を放たば、生涯君に大利益を與ふべき三の心得を傳ふべし」と。捕鳥者、大いに驚き、且つ約して曰く、「若し汝、我が知らざることを語らば、汝を放ち遣らん」。斯くて鶯は、その人に向ひ、而していふ、「自らなし得ざることを目論むなかれ。既往のことを悲むなかれ。信ずべからざる話を信ずるなかれ。君若し此の三箇條の敎を守らば、大いに益を得べきなり」と。捕鳥者即ち此の三箇條の價値あるを感じ、鶯を放ちしが、鶯は、捕鳥者果して其の敎訓の意義を解して實益を收め得るや否やを知らんと欲し、之を試驗するの擧に出でぬ。即ち鶯は、再びかの捕鳥者の方へと飛び行き、叫んで曰く、「噫、汝愚人よ。汝、今日、大いなる寶を失へり。我は、腹內に、駝鳥の卵よりも尙ほ大なる眞珠を所持すればなり」。捕鳥者之を聞ける時、甚しく鶯を放ち遣りしことを悲痛し、再び之を捕へんと欲して叫びていふ、「我が家に來れ。我篤く汝を饗し、而して我敬意を表し終りたる上は、再び汝を放ち遣るべし」と。鶯答へて曰く、「我は、汝が如何ばかり愚かなるかを知る。汝は我が告げしことを喜んで聞きたるも、其敎訓は何等の實益もなし。我は既往のことを悲むなかれと言ひしに、今汝は、我の自由を得たるを悲むこと甚だし。是れ既往を悲むものにあらずして何ぞや。我亦汝に、自らなし得ざることを目論むなかれと言ひしに、今我を捕へんとす。されど汝は、我を追及する能はざるべし。我亦、汝に、信ずべからざることを信ずるなかれと謂ひしに、汝は我身體よりも大なる眞珠の我が腹內にあるを信じ、我自ら駝鳥の大きさに及ばず、隨つて其の大きさの眞珠の我が腹內にあり得べからざるを思はず』と。

凡そ偶像を信ずるもの丶思も亦斯くの如し。彼等は己れの手にて偶像を作り、自ら其指にて作れるものを拜し、而していふ、『汝は我造主なり』と。されど彼等如何にして、其手にて造りしものを、自ら成りしものと思ふことを得るや。彼等は、用心堅固に其の偶像を保護し、賊のために盗み去られざらんとす。而も彼等は、此の偶像を呼んで、保護者といふ。而して自ら守ることを得ざるものが、他を守るを得るものと思ひ、而も其恐を悟ることなし。主曰く、『いかで活者のために、死者にもとむることを爲ん』と（此句以賽亞書八章十九節に見ゆ）。

（此時バーラームは熱心以て、イヨアサフに偶像教を棄つべしと勸め、イヨアサフ亦自ら之を棄つるの意ありと述ぶ。新くて洗禮を受けし後には、如何なる生活を送るべきものかと質問し、バーラーム之に基督教徒の義務を說き、基督の弟子たるもの丶送るべき生活を記述して、遂に修道僧の禁慾主義に及ぶ。其中、大いに釋迦の戒律に似たるものあり）

『或者は、戸外に住して寒暑に曝され、風雨に沐浴す。或者は自ら茅舍を結び、若くは洞穴、地窖に隱接す。彼等皆德を修むるに熱心にして全く肉体の快樂を顧みず。其の食物は、蔬菜と菓物とにあらざれば、即ち乾き硬まれるパンのみ。而して彼等は斯くの如く食物の性質に禁慾主義を行ふのみならず、又その量を最小限にまで減殺し、只僅かに生命を支へ得るだけを食ふのみ。或は一週を通じて、斷食するものあり。或は日曜日だけ食事をなすものあり。或は一週二回だけ食事をなすもの、或は一日一回づ丶食事をなすものあり。彼等は、祈禱と不眠とに於て、殆んど天使の如く、絶對に金銀賣買を無視して、殆んど之を存在せざるもの丶如く思へり。彼等は、出家の生涯に甘んじ、常に死を恐れ、溫和、忍耐、寡默、貧困、恭謙、平和、能く神を愛し、能く人を愛し、恰かも、天使の性質を具ふるもの丶如くにして其日を送る。此故に、神は、彼等に賜ふに、各種の異能、休徵、奇跡を行ふの力を以てし、且つ彼等が生活法を、世界の極端にまで、聞えしめんとし給へり。

『之に反して、絶ねず肉慾の奴隷となり、其の靈魂疲弊して罪惡に壓抑せらる丶人は、是れ猶ほ怒れる一角獸に逐はれて逃遁する人の如し。或人、一角獸の恐ろしき吼聲に驚きて、其の呑噬に遇はんとを恐れ、全速力を以て走る際、測らずも深き穴に陷ぬりぬ。其の陷ゐる際、手を擴げて、一つの莖に觸れたりしかば、堅く之を握り、また

一つの足場を得て、之に其の足を安んじ、今はゝや大丈夫なりと思ひ居たり。然るに、不圖その眼を轉じて、白鼠と黑鼠とが、代る〳〵、其の生命の綱たる蔓を嚙むを見、もはや、其の二つに斷ち切らるゝも間なきを認めたり。己にして、彼は、下を顧みて穴の深きを知らんとせしに、思ひきや、こゝには亦恐ろしき龍ありて、來らば呑まんと口を開き、火炎を吹き、眼を光らせ居たり。それより又その足を置ける足場は如何と見るに、其の石の根元に、四の蛇ありて、頭を突き出し居たり。而も彼は、頭上を顧みて木の枝より少し計りの蜜の滴り來るを見、凡ての危險を打ち忘れ、かの外部の一角獸が已れを食はんとすると、根の殆んど絶えんとするとも、其の足が滑り易く動き易き石の上にあるとも一切、是等のことには頓着なく、恐かにも、僅かばかりの蜜を味はんとするに夢中となれり。夫れ現世の榮華に迷へる人は、皆斯くの如し。乞ふ聊か之を說明せん。一角獸は、猶ほ死の如し。常にアダムの子孫たるものゝ跡を逐ひ、而して之を捕へんとす。穴は是れ現世にして、此中に、凡百の災害と恐るべき陷阱あり。黑白二頭の鼠に其の根を嚙まるゝ蔓とは、人間各自の生涯なり。晝と夜と代る〳〵之を嚙みて、遂に之を斷ち截らんとす。四の蛇とは、人間の身体を構造せる動搖不定の四大にして、之に變調紊亂ある時は、身体全く破壞するに至る。之に加ふるに、かの恐ろしく且つ火を吐ける龍とは、是れ地獄に似たり。來世の幸福に代へて現世の快樂を望むものを求て喘ぎつゝあり。又蜜の滴りといふは、現世の快樂の味ひにして、現世は、之に由りて、其友たるものを欺き、來世の救ひを求むるものを妨害す（此話譬喩經に見ゆ。佛教聖典三百四十五、六頁を見よ）。

「之に加ふるに、此の世の榮華を慕ひ、其の快樂に耽り、常住のものを捨てゝ、之に代ふるに無常のものを以てするが如き人は、猶ほかの三人の朋友を有し、特に其内の二人を尊敬して、これがためには如何なる危險、如何なる勞苦をも厭はざる人の如し。此人殘る一友人を輕侮して、之に恩顧を與ふることをせず。また其の友情に報ふるの擧に出でず。たゞ形式ばかりの交誼を有するのみ。然るに一日荒くれたる一隊の兵士ありて、來りて此人を捕縛し、急ぎに急ぎて、王の前へと曳き行きぬ。こは此人、一千兩の負債ありしが爲めなりけり。さて此の究迫の時に際し、何人か負債償却に助力を與ふる人もやあると思ひ廻らせる末、先づ最も親たしき友人の許に往き、言つて曰く、「友よ、余が足下のために生命をも輕んじたるは、足下の知る所。今、

余究苦に陥ゐりて足下の助力を求む。足下、余に幾許を貸與すべきや。我斷金の友たる足下に、幾許金を望み得べきや」。友答へて曰く、「人よ、余は、足下の友にあらず。余、足下の何人たるやをも知らず。余は今日、別に樂みを共にすべき友あり。今後は、此人々即ち我友ならん。こゝに足下が旅行用に持去りても差支なき襤褸二あり。或は足下に用なきかも知れざれど、是以外には、余より何物をも求むべからず」。彼此の言を聞ける時、全く其の助力に依頼するの念を斷ち、第二の友に往きて言て曰く、「余が足下を敬し、足下に助力を與へたりしは、是れ足下の知るところ。今日、究乏と不幸とに陥ゐりたれば、足下の助力を求む。乞ふ、余は何物を足下に期待して差支なきや。漏らし給へ」。友答へて曰く、「余、今日、足下に關係すべき時間なし。余には余だけの苦勞、心配、困難あり。こは足下に用なきとならんも、少し足下と同行すべく、かくて歸宅の上、我務めを勵まん」。斯くの如き事情にて、此人は亦もや手を空ふして歸り、全く其の爲すべき所を知らず。我交情を蹂躙したる亂暴不德の友に望を繫ぎしを悔ゆるのみ。次で、彼は、殆んど念頭に置きしともなく、亦纔筵に招きたるともなき第三の友を訪問し、伏目になりて之に言て曰く、「余は足下の許に至るに、頗る闕の高きを覺ふ。是れ余が足下に親切ならず、友人の取扱をなさざりしは、足下の熟知せらるることと思へばなり。然るに、今や、恐るべき災害は、突如として余の上に降り來れり。余が他の友人等は、皆余の願ひを斥けて顧みず。由て厚顏の至りながら、聊かにても助力を與へらるべきかとて、今こゝに來れり。足下願くは、辭絶するなかれ。又余の不深切を說きたまふな」。其時、此人、滿面笑を湛へて答へて曰く、「否とよ、足下こそは余が大々的親友なれ。足下の表せられし深切は、たとひ聊かのものなりとも、皆悉く利子を付して返上すべし。恐るゝなかれ、心配するなかれ。余先づ王の闕下に伏して、足下のために悃願すけべれば、足下は、敵手に渡さるゝを免かるべし。余が親しき友よ、勇み喜びて、また悲むことなかれ」。彼れ此の言を聞ける時、涙を流し、感極まりて叫びて曰く、「噫、余は先づ、無情忘恩の僞友のために悲むべきか。抑も亦余が足下を疎外せしを悔ゆべきか。足下、今や、眞實の我友なり」。

『偖、この第一の友とは、金錢及び利慾に譬へたるものなり。人皆之がために、無量の危險、無量の痛心を忍べども、死の時至れば、其報ゐに、只葬儀用の言ふに足らざる布

片を受くる而已。第二の友は、妻子を初め、其他の近親及び友人に似たり。愛の紐は、堅く相互を繋ぎ合せて、離れ難からしめ、殆んど我が靈肉をさへ犧牲に供せしむと雖も、其中、一つだに、死の時の用をなすものなく、我遺骸を送りて墓地に到りし後は、直ちに歸宅して、自利の經營に多忙を極め、土を墓上に盛りし後は、直ちに、我を忘却す。第三の輕蔑せられ、無視せられ、擯斥せられ、遠ざけられし友とは、信仰、希望、仁愛、慈善、深切等の如き德行に似たり。是等は、我等死する時、我等に先だち行き、我等に代りて主に悃願し、我等に負債の償却を迫りて苦役を課するに至る、貪婪他くとなき者の手を免かれしむ、是れ我が僅かばかりの善行をも忘るゝとなく却て之に利子を付して償却する善且つ愛すべき友人なり」。

イヨアサフ滿足の意を表し、世の無常の說明を求め、此中にありて、如何にすれば、平和安全なり得べきやと問ひぬ。

バーラーム答へて曰く、「我一つの大なる都會に行はるゝ、一風習に就きて聞き及べることあり。此の都會にては、都民の全く知らざる、而して該都の法律習慣に全く通せざる一人を撰びて之を王と仰ぎ、之に許すに一年間專斷無限の權能を行ふことを以てす。斯くて王は、其身全く安全なりと思ひ、奢侈放逸に其日を過ごし、國家萬歲を夢みる際、都民突然として蜂起し、其の王服を褫ぎ、之を裸にして凱旋軍の行列の如くに市中を練り歩き、次で之を衣食の便なき遠島に竄して、飢渴に苦ましむ。彼は不意に奢侈快樂を得たりしが、今や不意にまた悲哀と困厄とに陷ぬれり。こゝに又此の國の風習に從ひて、王に擧げられし人ありしが、此人は頗る才智あり。其の不慮の榮華に惑ふことなく、恃むべからざることを恃みて、無情の追放を受けし先任者に倣ふことなく、鞠躬如として、自家の利益のために其の備をなしぬ。即ち日夜に思ひを廻らし且つ又他日の計をなす爲め其の國の風習及びかの流竄地のことに通せし賢人に質問せり。斯くて其のいふ所を聞き、且つ遠からぬ中に、流竄に過ひて、國土の權、他人に移るべきを知るや、王は、其頃尙ほ其の權內にありし府庫を開き、腹心の臣下に、多量の金銀寶石を托し、豫じめ之を其の流竄せらるべき孤島へと運搬せしめたり。既にして、王の任期の終りし時、都民例に由りて蜂起し、其の衣を褫ぎて、之を其前の者同樣に流竄に處しぬ。當時、前諸王が何れも非常の究乏に陷ゐり居たるにも拘らず、此王のみは、豫じめ其の財を蓄へ居たれば、無法惡逆の都民に

煩はされずして安逸榮耀の生活をなし、獨り自ら其の計畫の當りたるを祝したり』。

〔バーラーム、此の譬の意味を說明し、イヨアサフ之に對して質問し、財を來世に送致し、充分に氣安く之を樂しまんとすれば、如何にすべきかといひしに、バーラーム即ち答へて曰く〕

『我等は、貧者の手に由りて富を送致す。されば豫言者の一人たる賢者ダニエルいへることあり、「されば王よ、吾諫を容れ、施濟を行ひて汝の罪を贖ひ、貧者を憐れみて其の不義を償ふべし」と（但以書四章二十七節の文にも似たれども符合せず）。救主も亦曰く、「我なんぢらに告げん、不義の財を以て己が友を得よ。こは爾曹死せん時、かれら爾曹を永遠の宅に迎へんがためなり」と（路加傳十六章九節の文と粗相同じ）。且つ福音書を讀む時はその中主が貧者に施濟義捐を勸め給ひしことの屢次なるを知るべし』。イヨアサフ問ふて曰く、『而して捨家棄慾と、それに伴ふ難行苦行の生活は、是れ使徒より今日に傳はれる古傳說か。抑も亦汝が自ら優良の方案として發明せる新法なるか』。老人答へて曰く、『今殿下に言上せるものは、決して近頃のものにあらず。斷じて非ず。却て古代より傳はり來れるものなり。我等の主曾て一富者に命ずるに、其の財產を賣り、之を貧者に惠むことを以てせしが、其時曰く、「爾、天に於て財あらん、而して來り、十字架を取りて我に從へ」と（此語馬太傳十九章廿一節の文と粗相同じ）。此を以て、代々の聖徒、咸な此の誡を念とし、此種の困難に克たんことを期す。即ち一切のものを捨て、之を貧民に分與して、自ら其の財寶を天に貯ふ。而して或者は、十字架を負ふてキリストに從ひ、又或るものは、殉教を遂げ、又或者は、遁世の生涯を送り、我等の教の旨を奉じて、少しも殉教者と逕庭あることなし』。

イヨアサフ即ち既往の浮華なる生活を棄て、死に至る迄バーラームと共に住みて、變遷無常のことのために、永遠不朽のことを棄てざらんとする望を告白せり。

老人曰く、『殿下若し然かせば、我が聞き及びし富貴の家の一賢子の所爲と宛たり。此子の父は、富貴なる其友の娘と婚約を整へ置きたりしが、此の女子も非常の美人なりき。然るに父、この少年に其の計畫せしところを語りし時、少年は、之を訝かり、且つ不興に感じて、父を捨てゝ家を去りぬ。斯くて逃走の途すがら、暫らく其日の暑さを休めんとて貧しき一老人の家に入りしが、其家にも一人の若き娘あり。恰かも其家の入口に座して、手を働かせながら、口には、心の底より出づる聲もて、神を

讃美し居たり。此の歌を聞き居たる少年、即ち曰く、「貴嬢よ、今貴嬢は、そも何事をなしつゝあるにや。かばかり貧しき身にてありながら、如何なれば、大なる賜物を感謝し、亦之を與ふる者を讃美するや」と。少女答へて曰く、「貴郎には、少量の藥劑、時に、恐るべき病を癒すとあるを知り給はざるか。之と等しく、少しの惠みに對して、神に感謝するは、即ち大なる祝福を受るの源なり。妾や誠に貧しき一老人の娘に過ぎざるも、神の賜物に對しては、之に感謝し奉る。かばかり多くのものを賜ひし神は、更に是よりも大なるものを賜ふべきを知ればなり。妾等は、此世の財産に乏し。されど之に富める人、必ずしも、眞の幸福あるにあらず。否、時としては却て其の害を受く。之に乏しきものに至りては、人間の一生と、人間の死とより打算して、何等の害をも受くることなし。さはいへ、最も必要にして、且つ眞に大切なる種類の賜物に至りては、妾や無限に之を我主より拜受しつゝあり。妾や、神の像に造られしものにて、神を知る者となり、推理の力を賜はり、神の惠みに由りて、死の中より生に召されたり。妾また神の秘密に參ずることを許され、樂園の門は、妾のために開放せられ若し之に入らんとすれば、何人の妨げをも受けずして之に入り得べし。凡そ是等のものは、貧富を問はば等しく神の賜ふものにて、妾若し神を讃美せずば、爭で罪なしといふを得んや」。

「少年深く此の賢しき言に感じ入り、其父を呼びて之に謂て曰く、「我に汝の娘を得させよ。我その善意と敬神とに感佩したればなり。老人曰く、「貴郎は名家の子なれば、貧人の娘を娶るを得ず」。少年曰く、「されど汝若し彼女を與ふるを拒まずば、我之を娶るべし。我は富豪の娘を娶るべき筈となり居たるも、之を棄てゝ逃走せしものなればなり。今や我、汝の娘の敬神と知慮とを見て、之を愛し、而して之を娶らんことを願ふ」。老人答へて曰く、「我は彼女を貴郎に與ふること能はず。貴郎之と父母の家に携さへ歸るべければなり。彼女は我が獨娘なれば我は之と分るゝに忍びず。少年曰く、「然らば、我は汝の家に止まり、汝の職を我職となさん」。斯くて少年は、其の美々しき衣服を脱し、老人の與へし粗衣を着したり。また老人は、樣々にして此の少年を試驗し、其の目的は堅固にして、只娘の愛に惑へるものにあらず、敬神の動機に基き、榮華歡樂の生活に換へて、貧究の生活を取るものたるを確認し、一日その手を捕へて、之を奥の間に伴ひ來り、少年が未だ曾て見しこともなきほどの多量の財

寶を示し、而していふ「是等凡てのものを我貴郎に授く。貴郎は我娘の婿ならんとするが故に又我財産の相續者なり」。少年此の財産を讓り受けし時は、その富天下の富豪に冠たりき。

〔斯くてバーラームは、尙ほ基督教の教義に關してイヨアサフに說明す〕。

終りてニケヤ會議に於て定められし信條を敎へ、其の邸內の池中に於て、父と子と聖靈の名に入て、之に洗禮を施こせしに聖靈の恩寵其上に下りぬ。バーラーム之を伴ふて、其室に歸り來りこゝにて、血なき犧牲の聖典を執行し、キリストの無垢機密を之に傳へしかば、イヨアサフ心に之を喜び、その神、キリストに榮光を歸し奉りぬ。

斯くて太子の侍講及び侍臣は、バーラームの出入漸く頻繁なるを認むるに至り、其中のザーダンと名づくるもの、太子に謁して、王若し此事を承聞し給ふが如きことあらば、由々しき大事に至らんを恐るといへり。太子即ちザーダンに旨を傳へ、室內の幔後に潛みてバーラームの說くところを立聞せしむ。ザーダン即ち其の命の儘にして、太子が已に基督教を信じ居るを發見し、驚くこと一方ならず。太子に說いて曰く、王若し此の消息を承聞し給はゞ、其感如何を思念し給ふべしと。太子即ちザーダンに乞ひて、當分のところ、王には、一切無言ならしむ。

恰かも、此頃に當り、バーラームは、歸國の止むを得ざるに至れる由を太子に漏らせしに、太子は、之と訣るゝを悲むと切なるにも拘らず、ザーダン或は王に萬事を漏らすに至るべきを恐れ、其の歸國を抑止せじといへり。且つ太子は、バーラームに賜金せんとせしが、バーラーム拒んで之を受けず。然らば、其の着古したる法衣は之を、遺物として止め給へ。その代りに新衣を參らせんと言ひしに、バーラームその古衣を止め置くことには、同意を表せしも、新衣を受くるは逆法なりといひ、只毛衣の古物あらば、之を受領せんと答へ奉りぬ。斯くてバーラームは太子のために祈り、而して歸國の途に就けり。

バーラームの歸國後、太子は專ら其身を祈禱に委ね、日夜の勤行怠りなし。ザーダンを見て、太子が恐るべき害を受くるに至るべきを憂ひ、即ち一切の顚末を擧げて之を王に承聞せり。王之を聞きて頗る驚愕し、王の顧問長官にして權威王に次ぐ高きアラケスと名くるものを直ちに召し出しぬ。アラケスは、太子が、其の信仰を

掛つに至るも遠からざるべきを以て、慨くに及ばずといひ、且つ第一に先づ兵士を派してバーラームを捕へ、之を慘刑に處すべしと獻言せり。王即ち此の獻言を容れ、兵士を派して遠近を搜索せしめしが、アラケス自らも亦、一隊の騎兵を率ゐて出發し、シナルの地まで追跡せり。彼等は山河を跋渉し、嶮岨を冒じたれど、其の勞未だ功を奏するに至らず。己にして一高處に上りし時、出家の一隊、列をなして過ぐるを認めたり。アラケス直ちに其の部下をして、之が捕縛に向はしめしに、彼等、恰かも犬の如く、また血に渴したる野獸の如く之を取り圍めり。されど一同を捕へてアラケスの許に曳き至りしに、アラケスは一見、バーラームの其中にあらざるを認めたり。是れアラケスは豫てよりバーラームを見知れるものなればなり。アラケス即ち、一同のものに對して、汝等バーラームを知れりや、また何處に在りやと鞫問し、バーラームは、其の兄弟、其の敎友なれば、之を熟知すれど、其の所在は、知らずとの答を得たり。アラケス此の答を信ぜず。是非とも彼等をして口を開かしめんものと慘酷なる拷問を加へしも、目的を達するに至らず。由て之を王の前に曳き至りしに、王は、死を以て一同を脅嚇し、バーラームの所在を告げよと强迫せり。されど彼等は、敢然として其の信仰の爲めに證明し、王に從ひ、若しくは王の脅嚇に應ずることを拒みて、遂に酷刑に處せられ了りぬ。

さて王等の第一策は、斯くして失敗に終りたりしかば、王は、他の方法に出でざるべからざることをアラケスに告げ、顧問官ナコルなるものゝ意見を徵するため、之を召し出さしむ。アラケス即ち深夜その探索に向ひ、彼がとある洞中に隱れて卜筮をなしつゝあるを發見し、こゝにて、兩人協議を凝せし末、朝に至りて、アラケスは王の許に歸りぬ。己にしてアラケスは、再びバーラーム探索を名として出發し、一老人の谷間より出で來るに遇ひぬ。アラケス即ち其の部下のものを派して之を捕へしめ、其の近づくを見るや、汝は何人にて、其の宗敎は如何と問へり。其者答へて、我は基督信徒にて、我名はバーラームなりといふや(是れ豫じめ定めたる策なりしを以てなり)アラケス之を王の許に曳き至りぬ。王曰く、汝は直ちに死に處すべきものながら、寬典を以て、時を與へ、果して我命を奉ずるか、或は又死の極刑を望むかを決せしむと。

之と同時に、バーラーム捕へられたりとの報、諸方に傳はりしが、太子之を傳聞して

歎くことこの方ならず。涕淚滂沱、必要の時に臨みて、神の此の老人を助け給はんことを神に求めしに、神は之を聞き給ひ、一の幻象を示して、其の謀計を明かにし給へり。由て太子は、其の目の覺めたる時、其の悲みは、却て喜びとなりしを感じぬ。此後二日を經て、王は太子の許に行幸あり。されど王は、平常の如き挨拶をなさず、怒りと憂の面色もて、我が嫌忌し、迫害する宗教を信ずるは、是れ我に恥辱と苦心とを與ふるものなりと詰責せり。太子之に答へて、我は自らなせることを包まざるべく、我は、暗より光に移されたるものにして、偶像禮拜を抛ちて、キリストの弟子の數に加へられしものなりと陳辯せり。王、この言を聞きし時、憤激甚だしく、大聲叫んで曰く、『げにや、汝、誕生の時、汝は、專横不孝の極惡人とならんと豫言せる占星學者ありしが、今こそ思ひ合されたれ。汝若し我忠告を容れず、我に對する義務を顧みることなくば、我も亦汝に背き、如何なる敵も敢てせざるべき酷待を加ふべし』と。太子は泰然自若として、たとひ如何なることありとも、主を捨つる能はずと答へしかば、王再び脅嚇を加へつゝ還幸せり。次で王は、再びアラケスと相談し、太子の決心の牢固にして、信仰を捨つるの意なきを語り、王自ら再び他の方法を用ゐて之を試むることに協議一決せり。此に於てか、其の翌日、王は、太子をその御前に召し、極めて深切なる挨拶をなし、孝順の義務を記憶せんことを要求し、また自ら是れまでに充分眞理の途を探究しつれども、其の結果、只ガリラヤ人等の宗教と、彼等が現世に對する態度共に虚僞なるを悟れりと斷言し、我望に從ひ、我勸告に從ふべしと忠告せり。太子、此時、父母に對する孝順の義務には、異議なしと答へたるも、事、正邪に關する場合には、人に從ふよりも、寧ろ神に從ふべきものなりといへり。

王は此時、脅嚇を以てするも、將た温言を以てするも、太子をして其の信仰を捨てしむる効なきを悟り、即ち之に告げて曰く、『汝は我命令に從ひ、我望に應ずべきものなるに、汝は之を拒絶せり。由て我等は、公會を開くべし。汝を欺けるかのパーラームは、我捕虜たり。我、凡ての基督信徒を召集するの令を發すべく、又彼等に身体の保安を誓ふべし。斯くて、審議討論を竭くし、汝と汝のパーラームが我を服するか、或は又我、汝をして我命を奉せざるを得ざらしむるかを試みん』と。太子は天の啓示に導かれて、此の方案に同意し、斯くて基督教徒召集の布告は發せられぬ。されどかの所謂るパーラームに助力を與ふとて、來り會せし、信徒としては、只バラキアス

と名づくるもの一人ありたる而已。その他の者に至りては、或は余り老年に過ぎ、或は遠く山谷に潜み、或は王を憚かるもありて、來り會する能はざりしなり。

斯くて無數の偶像教徒は、蟻の如くに集まり來り、太子及び太子に、贊成のものに反對して審議討論せり。諺に牝鹿と獅子と相鬪ふとは、斯くの如きことをこそいふならめ。そは、太子は、至高者を其の避難處となし、至高者の翼の蔭を頼みとするものなるに、之に反對する者は、此世の主權者と、此世の主權者を願使する暗の君とを頼みとするものなるを以てなり。

己にしてバーラームに粧ひたるナコルは曳き出されぬ。此時、王は其の辯者及び學者一同に告げて曰く、『こゝに榮辱安危の分岐點たる大切の問題ありて、一同の前に横はれり。汝等若し我宗教のために勝を制し、バーラーム及び其の同志の謬見者を確信せしめ得ば、我も之を賞すべく、全會また之を讃嘆し、勝利の冠汝等の頭上にあらん。されど汝等若し失敗せば、慘刑を以て辱めらるべく、其の財産は沒收せられ、令名は世に傳はらす。遺骸は、野獸に投げ與へられ、子孫は永く奴隷とせらるべし』。

王斯く言ひ終れる時、太子起立して曰く、『陛下公明、主また陛下の目的を贊することならん。乞ふ今臣をして、臣の師と相語らしめよ』。此に於て、バーラームを粧ひつゝありしナコルを顧みて、之れに謂て曰く、『我最初、王族の威嚴を以て汝に接見し、汝が救に化せられて、我國の風習傳說を拋ち、遂に父王の怒りを買ふに至れるは、是れ汝が知るところ。記せよ、今汝は、勝敗を決すべき機に臨めり。汝若し議論に勝ちて、敵をして其の非を悟らしめば、我益々汝を敬ふべし、我、汝を眞理の先驅として之を敬し、死に至るまで、基督教の信仰を守るべし。されど若し、僞りにもせよ、實際にもせよ、敗北するが如きとあらば、我直ちに汝に復讐せん。即ち我、手づから汝の心臟と舌を裂き、遺骸を犬に投げ與へ、王の子を欺く者の見せしめとなさん』。

ナコル之を聞ける時、恐怖戰慄せり。而して熟考の後太子のため、辯護の勞を執るの決心をなさん。是れ太子が其宣言を實行するに至るべきかを畏れたればなり。されど、萬事は皆、神の攝理に指導せられたるに相違なし。王の辯者等、議論をなさんとするに際し、ナコル起立して、手を以て一同を緘默せしめ、自ら其口を開きて、恰もバラムの驢馬の如く自ら念頭に浮ばざるべきことを吐露したればなり。即

ちナコルいふ、此の世界の住民は、之を分ちて三種となすを得べし。多神教徒、猶太教徒、基督教徒是れなり。多神教徒にまた三種あり。カルデヤ人、希臘人、埃及人是れなり。カルデヤ人は、天地の諸物体を禮拜するものにして、之を繪畫彫刻に顯し、之を殿堂の内に置く。されど、天地萬物は神たるを得ず。是れ皆朽廢遷移すべきものなればなり。天は、神たるを得ず。是れ動くものなればなり。是れ法則に從ふものにして且つ組合せしものなればなり。是れ即ち其の宇宙（コスモス）と稱せらるゝ所以なりとす。さて宇宙なるものに、其の手工者ありて、これに造られしものなり。已に造られしものたる以上は、是れに始めと終りとなきを得ず。また天体の運動、四季の交綏は、天が法則に從ふものたるを示す。從つて天は神にあらず。只神の工たるのみ。

地も亦神たるを得ず。地は人に由り、火に由り、雨に由りて損するべきものなればなり。人の足下に踏み付けられ、又種々に汚さるべきものなればなり。

水は神たるを能はず。是れ人の使用に供せらるべきものにして、且つ樣々の形樣々の色に變ずるものなればなり。火は、神たるを能はず。是れ人に左右せらるゝものなればなり。或は處々に持て運ばれ、或は種々の目的に使用せられ、而して遂には、熄さるゝものなればなり。風は神たること能はず。是れ舟をして水上を走らしむるため、神の與へしもの、命のまに〳〵起伏せるものなればなり。太陽は、神たる能はず。是れ往來し、出沒し、他の諸天体と等しく軌道を回轉し、時々蝕虧あり、また自ら其の運動を制する能はざるものなればなり。太陰も亦神たること能はず。是れ太陽よりも劣等のものにして、且つ太陽よりも甚しき變化を受くべきものなればなり。人類また神たること能はず。是れ法律の支配を受くるものにして、また惡念病魔老死の犧牲となるものなればなり。此故にカルデヤ人の宗教は、誤謬たらざるを得ず。

希臘人は、自ら智慧あるものを以て許せども、其實はカルデヤ人よりも尙ほ恐なるものなり。彼等は多くの女神及び男神を信じ、而して此の神々は、種々なる情慾の犧牲となり、あらん限りの罪惡を犯すものたるを信ず。

埃及人に至りては、希臘人よりも更に劣れり。即ち彼等はカルデヤ人や、希臘人の禮拜する諸物体に滿足せず。獸類、魚類の如き不合理的動物より、草木の類をも、神

とし崇むるものなればなり。

猶太人は、成程、眞の神を知るの識力を與へられたれど、忘恩悖德彼等のために大なる業をなしたる神の子を犧牲に供するに至る。

されど基督教徒は、自らキリストの流れを汲めるものと稱し、之を信ずるよりして即ち此名あり。彼等はキリストの教に從ふ。げにキリストの教は、眞理の途にして、之を進むものは、永遠の生命に達するを得べし。

王このナコルの言を聞きし時、痛く憤激せり。而も、之を如何ともする能はざりき。是れ自ら宣言して、基督教徒にも發言の自由を與たればなり。王は、暗號を用ゐて、其の論鋒を一變せしめんと試みたるも、彼は、只益々雄辯となる而已。而して時は移りて、已に夕刻となりしを以て、討論は、翌日まで延ばさるゝことゝなりぬ。斯くて會の散ずるや、太子は、その夜、その師と同泊せんことを乞ひ、王の許可を得て、之をその宮殿に伴ひ還れり。而して之に告げて、汝がバーラームにあらず、占星者ナコルなるは、我熟知する所なりといひ、其日不故意にして彼が陳辯せし所を說き聞かせ、終夜、その占星術と偶像教を擲ちてキリストの信仰を取るべきことを勸告せり。

ナコル遂に屈し、再び王の御前に出でざるべきを約し、その翌早朝、太子の宮殿を辭して、修道者の隱栖まで尋ね行き、こゝにて洗禮を領したり。

翌日、王は、ナコルの出發を聞き、隨つて、其策の全然失敗せるを悟れり。斯くて王は議論に破れし學者等を酷待したりしが、當時未だその眼を開かれて、キリストの光を受くるに至らざりしと雖も、尙ほ其の禮拜する神々の無力、なすなきを悟れり。

又太子は、此事のありたる後ち、暫らくの間は、宮中に平安の日月を送り居たりしが、或時、偶像の大祭、その市中に於て、行はるべきことゝなりしことあり。僧侶等、王のその宗教に對する熱心、冷却せるを看取し、大祭には、行幸なかるべくして、常例の恩物を受くる能はざらんを恐れ、チユーダスと名づくる熱心の偶像家にして、且つ知略に富める者を訪ひ、一臂の力を貸されんことを懇請せり。此に於てか、チユーダスは、王に拜謁し、王が太子を改信せしめんとするの策、悉く敗れしを說くを聞き、即ち、現今の太子の侍從たるものを悉く廢し、之に代ふるに、美人を以てして、其の肉情を誘ふべしとの建策をなし、而していふ、「會て、子なきがために、非常の憂慮に陷ゐりし王ありけり。時を經て、一子生れたりしかば、其心は喜びに滿たさるゝに至れり。

然るに醫師は、王に告げて、此の太子の目を見るに、十二年間若し太陽若しくは火を見るが如きことあらば失明するの相ありといへり。由て王は、光線の全く遮天せざる暗黑の洞穴を撰びて、太子を此中に置くこと十二年。期限の果つると共に、之を洞外に出したるが、王は、之と共に、一大展覽式を催ふし、太子が未だ見ざりしものを順次に之に示さんとする志あり。由て、男女、金銀、眞珠、寶石、美服、乘輿、牛羊に至るまで、凡ての物をその適所に配置したりしに、太子は、一々の物に就て其の名稱を尋ね、遂に女の名稱を問へり。此時王の武官戯れに、こは人を惑はしむるものなるを以て、惡魔と稱すと答へしに、太子は、何物よりも深く此の女をその腦裏に止めたり。此故に、侍臣等太子を伴ふて、王の許に至るや、王之に何物を最も好むやと問ひしに答へていふ、「人を惑はすといふ惡魔なり。今日見しものゝ中、此物ほど我心を喜ばせしものは候はず」。王喫驚し、婦女に對するの愛が、男子の心に如何なる魔力あるかを知れりといふ。さすれば、陛下も此の方法によりて、太子の心を翻へし得べきなり」と。

王此の忠告を容れて、先づ窈窕たる美人幾個かを連れ來らしめ、之れに命じて盛粧を凝さしめ、凡て太子の侍從を廢して其代りとなす。されば、太子は此の美人の外、また他に語らふべきものなく、又食事を共にするものもなきに至りぬ。チユーダ即ち其の洞穴に往き、呪文を唱へて惡鬼を呼び、其の惡鬼をして一層兇惡の惡鬼を伴ひ來らしめ、太子の室に至りて、其の肉情の焰を燃さしめ、美人をして、嬌態以て、その燃料を供せしむ。

太子は、此時、熱心なる祈禱をなして、己れの前に置かれし苦を脫し得んことを求め、以て、その淸衣を汚さゞらんとせり。されば、太子は祈禱をなし、斷食と自制を行ひて、誘惑に克ち、我が靈魂を覗ふ敵等をして失望せしめたり。されど、之に次ぎて、又强力の誘惑は來れり。即ちこゝに才色双美の一佳人ありて、こは、曾て或王の娘なりしも廢となりて、此のアベチル王に贈られしものなりと、いふ。今や此の佳人は、他の美女等の失敗せしことを果さんとて、太子の許に送られしが、太子、その近づくを見て、直ちに活ける神に事へ、不死の新郎と結婚すべしと勸めたり。女この言を聞ける時、殿下若し左までに、我救を望み給はゞ、我請を容れて妻となし給はずやといへり。太子の怒りて、之を拒絶するや、即ちいふ、「殿下

の賢明を以てして、何故斯ることを言ひ給ふや。如何なれば、結婚を以て汚れたること、不潔なることと言ひ給ふや。妾また全く基督教の聖書を知らざるものにあらず。故國に在りて之を讀みしこと多く、又基督信徒の話をも聞けり。聖書の中にいなずや『はんぢら婚姻の事を凡て貴め又牀をも汚すと勿れ』(希伯來書十三章四節)。又曰はずや『婚姻するは胸の熾るよりも愈る』(哥林多前書七章九節)。又曰はずや、神の合はせ給へる者は人之を離すべからず』(馬太傳十九章六節)。又聖書の中には、昔の聖徒、列祖、預言者たち結婚せりと謂ふにあらずや。使徒たちの中の首たるペテロには、妻ありしといふにあらずや。然るを殿下、いかで之を汚れしことと言ひ給ふや。殿下は、聖書に矛盾するもの丶如し』。太子答へて曰く、婚姻は、獨身の誓を立てし者以外のものに取りては合法なり。されど我は、洗禮を受けて、少時知らずして犯せし罪より潔められし時、獨身の誓を立てたりと。女此時、最後に、己が思ひに從はせんとて若し妾と結婚し給はゞ、妾は救はるべし。そは妾また基督教を信ずべきを以てなりとの見込を主張せり。太子は、この一言に接して、我勇猛心の搖めくを感じぬ。且つ敵も亦此時、その滅亡のために全力を集めたりしかば、再び祈禱に其の難を避けぬ。

其の祈れる時、太子は、睡眠狀態に入り、光り輝ける野と金銀寶石を以て飾りたる市とを觀、次でまた、暗黑の中に投げ込まれし者の恐ろしき、住處とを見たり。やがて、太子は、目を覺まし、甚だしく戰慄し、同時に、破廉恥なる此の美女と、其他一切のもの丶美とは、汚れたるもの、朽ちたるものよりも、更に厭ふべきものと見ゆるに至り、かの夢現を心に浮べて、天を慕ひ、地獄を畏る丶より、牀上に呻吟して、身を動かし得ざるほどの大患に陷かれり。

王は、太子、病に罹れりと聞きし時、之を慰問すとて來れり。されど、太子は、その父を見たる時、罟を掛けたる處置を非難し、且つ此の宮殿を辭し、沙漠に入り、その友にして且つ師たるバーラームに面會するの自由を與へられんことを乞へり。王之を聞きて甚しく悲痛し、萬事休すとも思ひしかど、また其氣を取り直し、再應その策を試むることに決心せり。由て、再びチユーダスを其の御前に召し、何か他に良策はあらざるかと下問せり。チユーダス此時、太子と直接面唔の許可を得んことを求め、王の同意を得て、相共に太子の許に赴けり、チユーダス激烈の論鋒を以て、偶像禮拜を棄てたる所爲を非難せしに、太子また之に應じ、偶像禮拜の無意味不道理なる

ことを論じ、此の迷信に對してキリストの福音の純粹なる信仰を主張せり。チユーダスは、之を聞ける間に、恰かも雷震に罹りし者の如く感じ、暫らく無言なりし後、王を顧みて絶叫して曰く、『陛下、げに、神の靈、太子の中に宿れり。我等は、辨倒せられたるものにして、又その地位を辯護すべき辭を有せず。我等は、太子の論勢を無視すること能はず。基督信徒の神は大なるかな。基督信徒の信仰は、大なるかな。基督信徒の機密は、大なるかな』。斯くてチユーダスは、我既往の罪の大なるにも拘らず、神は尚ほ我をも受け給ふべきかと太子に問へり。太子之に答へて、凡て、悔改めし罪人には、歡迎を約束せられたりと言ふや、チユーダス即ち太子の宮殿を辭して、己が洞穴に歸り、魔術に關するもの一切を燒き棄てゝ後、ナコルに面會し、一應その指揮を仰ぎて、遂に洗禮を領したり。

是等のことのありたるに由りて、王は一層困却し、顧問官を召集して、其の意見を徵したり。此時、前にも擧げたるアラケス、その國を二分して、一部を太子に讓るべしと建策せり。その理由にいふ、太子若し牧民の事務に多忙ならば、其の宗教的熱心は之がために冷却せん。よし、又冷却せすとするも、陛下は、全く其子を失ひしにあらざるを感じて、心に滿足あるを得んと。王、熱心に此策に贊成し、而して喜ばしきことには、太子も亦之に同意せり。太子いふ、我れ萬事を抛擲し、余日を其の或る友と送るの志なりしかど、父の願に從ふは、正しく且つ賢きことなりと。

此に於てか、國は兩分せられ、父王は、太子を擧げて王となし、國王相當の侍臣を授け、人家稠密の一大市を撰びて其の住處となさしめ、その他、その威嚴と華美とを添ふるためには、殆んど手段の盡さゞるものなかりき。

イヨアサフ即ち其都に遷り、主、受難の記號たるキリストの十字架を、凡て之を內に安置せるあらゆる塔の上に置き、偶像の殿堂祭壇を毀ち、市の中心に輪奐たる一教堂を建てゝ之を主キリストに獻げ、市民に命するに、屢次こゝに詣し、十字架を讃嘆して禮拜を神に捧ぐべしといふを以てせり。斯くてイヨアサフ自ら公禮拜の率先者となり、市民をして偶像を抛ち、之をキリストに至らしむるため、所有る力を盡せり。加之、イヨアサフは福音を宣傳し、神の道の無限の謙遜、其の化身の不思議、其の我等を救ふための十字架上の苦痛、其の昇天、其の生者と死者とを審判するための再臨を說明せり。

イヨアサフ、其の性質温厚にして、其の施政公平なりしかば、其の感化に由りて偶像教を棄てしもの無數なり。神品、修道者、司祭等のものも、之を傳へ聞き、その避難所より出て來りて、此の都に出入せり。中にも、或司祭は、曾て迫害のために其の管轄教區より放逐せられしものなるが、イヨアサフ之を擧げて、新建教堂の任に就かしめぬ。

またイヨアサフは洗禮施行所を設け、こゝにて、文官、武官、及び平民に洗禮を授けたり。而して洗禮を受けし者等は、只靈的の祝福を受けし而已ならず、また其の患ひ居たる肉体の疾病をも癒されたり。斯くして、其の國は、益々擴がり、イヨアサフは、專ら其の人民の幸福に一身を委ねたり。即ち貧者を憐れみ、罰せられて坑夫となりし囚人と、負債の爲めに投獄せられし者とを問はず之を顧りみ、寡孤の友となり、困難の淵にある者の救助者となれり。斯くて其の名譽は隆々として揚がり、父王の配下に在りし者すら次第に之を慕ふに至り、イヨアサフの家は、愈榮え、アベチル の家は益衰へ、恰かも、列王紀略のダビデ及びサウルに關する記事の如き有樣となりぬ。アベチル此の事情を看取したる時、今更の如くに偶像の倚むべからざるこ

とを悟り、再び顧問官を召集して、基督教を信ずるの決心をなせしことを報告せり。此時、顧問官一同、王の意見に同意したりしかば、王即ち一書をイヨアサフに送り、如何にすべきかを問へり。

イヨアサフ此書を得て、喜ぶこと一方ならず。先づ、神に感謝を捧げ、次で、父王訪問のために出發せり。父王、イヨアサフの來訪を聞き、出でゝ之を迎へ、熱心に之を歡迎し、盛典を以て、其の入京を祝したり。斯くて、父子水入らずの間にて長時間の會談あり。その結果、イヨアサフは、前にも擧げしかの司祭を召し、以て父王に洗禮を授くることゝなれり。其際イヨアサフは、教父の任に當りしが、之がため、子は、却て父の父たる奇結果を生じぬ。即ちイヨアサフは、己が肉体の親をして、靈的に復活せしめたる親なればなり。

爾後、王はあらん限りの力を盡して、基督信徒の幸福を進捗するに熱心せり。隨つて曩きに基督信徒に對して酷薄なりしを悲むこと大方ならず。イヨアサフ百方辯議して初めて、其罪は、神の赦しを得べからざる迄に深きにあらざるを悟らしめ得たり。幾許もなく、王は痛悔の中に、その靈魂を神の手に托して崩ず。イヨアサ

フ、涙ながらに篤信家の所有にかゝる墓に之を葬り、その王衣を以てするの代りに、痛悔の衣を以て遺骸を包めり。また其後七日間は、連日墓邊に於て祈禱を捧げ、父の前非を記臆し給はずして、却て無限の憐憫を垂れ給はんことを神に乞ひぬ。第八日に至りて、イヨアサフその宮殿に歸り、凡ての財寶を集めて、之を貧民に分與し、貴顯と武官と平民との大集會を召集して、告げて曰く、曩きには、我遁世の生活を送らんとせしに、父王の熱心なる望に由り、暫らく之が實行を見合せたり。されど父王今や己に世を逝り給ひしが故に、何の故障もなし。即ち汝等に訣別して、我誓を實行せんと欲すと。

此時、全會聲を放ちて之を惜み、皆その止まらんことを乞へり。否、啻に、それのみならず、一同々盟して其の去るを許さずといふに至れり。王は非常の苦心を以て多少之を宥め、一應之を歸宅せしめてバラキアスを召し出し、之に王位に即かんことを乞へり。バラキアスとは、かのナコルがバーラームを紐ひたりし際、其の味方として、出頭せしことある人なり。バラキアスは絶對に王の乞を拒絶し、王位若し善きものならば、王自ら之に止まるべく、若し惡しきものならば、之を他人に讓ることを正しからずといへり。王は之を强ゆるも益なきを悟り、口を噤んで又いはず。その夜自ら國民に告ぐるの書を草し、彼等今後の生活法に關して忠告する所あり。且つバラキアスの外、王位に即く者あるべからずと言へり。斯くて王は、此書をその寢室に止め置き、早朝何人にも知らせずして、出奔せり。夜明けて、此報の傳はるや、全市を擧げて搜索に從事し、遂に發見せられし時は、王は急流の中に立ち、兩手を天に擧げて、第六時に定められし祈禱をなしつゝありき。衆再び其の還御を乞ひしも、王は其の決心の動かすべからざるを說き、之を强ゆるも益なしといへり。斯くて王は、バラキアスの手を取り、東方に向ひて、之がために祈り、之を王として、國民に紹介せり。次で、神の律法に從ひて、國を治むべしと命じ、衆民に告別せり。衆民涙を流せる間に、王は飄然として去る。之を見て或は追跡するものもありしが、夜に入りて、その影を見失ひぬ。

イヨアサフの王宮を去るや、恰かも久しき間、外邦に虜たりしものが、その故國に歸る時の如く、欣々として去れり。その服は、通常の服なりしかど、下にはバーラームの與へたる毛衣を着し居たりき。斯くて、イヨアサフは、その夜、一貧民の茅舍に泊

し、最終の慈善として、其の着用したる服を之に與へ、パンもなく、水もなく、その他、日常の必需品は、一切之を携さふることなく、只永遠の王なるキリストを愛するの心を以て、逃世者の生活に入れり。その目的の堅確なる、只前を見て背後を顧みず。砂漠の中心に達するや、その喜び無限なりき。是れ、之を負ふに苦しき重荷及び軛と感じたりし現世の煩累より脱し得たりしに由る。

然るに、善を嫉惡する惡魔は、イヨアサフの目的堅固なるを見て、種々なる誘惑を以て、之を苦めたり。即ち從前の榮華、知己、朋友、快樂などを追懷せしめ、また德の道は嶮峻にして幾多の困難あることを思ひ起さしめ、己れの弱くして飢渴は甚しく、快樂を望み、勞苦の休止を求むるも益なきを感ぜしむ。されば、イヨアサフの心は、恰かも萬丈の黄塵の如き千々の思ひに滿てること、かの有名なるアントニーの記事に似たるものありき。而もイヨアサフが此の誘惑に克つや、惡魔は、之を脅嚇せんと試みたり。即ち其の有りの儘なる恐ろしき姿を顯し、手に白刃を握りて突進し、イヨアサフにして避けずんば、之を斬らんとするの狀を顯せり。次で、種々なる野獸の形を取り、或は高く嘯き、或は物凄く吼えて之を恐怖せしめんとし、又龍となり、蛇となり、蜥蜴となれり。されどイヨアサフは、此の各種の試法を通じて動かざること泰山の如く、道がに至高者を其の避難所とせるものゝ所爲と思はしめぬ。即ちイヨアサフは惡魔を叱し、且つ十字架の記號を畫きければ、野獸毒蛇恰かも烟の如く消え、火前の蠟の如く融けたり。由て、イヨアサフは、尙ほ前路を取りて進み、種々の危難にも遇ひたれど、愛心能く恐怖を制したるを以て、泰然として動かざりき。」

イヨアサフは、かのバーラームの住居せるシナルの地にとは到着せり。而して、二年の間、此の曠野の間を往來して搜査したれども、未だ之を發見するに至らず。或時極めて熱心に、其の住處に至り得んことを祈りしに、神の攝理に由り、洞中に住へる一修道僧と相遇ふに至り、此の修道僧よりして、バーラームの住處を知るを得たり。即ち、其の敎へられたる洞穴に近づき、其の外に立ちて、『火よ、我を祝せよ、我を祝せよ』と連呼せしに、バーラーム出で來り、其の外貌は、櫛風沐雨の辛酸に、いたく變り果て居たるに拘らず、彼はその心眼を以て、イヨアサフたることを認めたり。イヨアサフまたそのバーラームたるを認めしが、此時、バーラーム東に向ひて神に感謝し、祈禱終るや、兩人聲を合せて、『アーメン』といひ、相抱きて深く其の再會を喜びぬ。

イヨアサフはバーラームが問ふが儘に、其後の一伍一什を語れり。バーラーム即ち種子の斯る良土に落ちて、斯く多くの果を結べることを神に感謝せり。

イヨアサフ、バーラームと共に住すること年あり。その禁欲主義を實行するの嚴なる、バーラームさへも驚嘆し、其の自制は、我の及ぶ所にあらずと思ひし程なりき。

イヨアサフまた此の曠野に住する間、一時間たりとも、之を徒費せしことあらず。否一瞬間たりとも、之を徒費せしことなし。是れ靈的修行をして間斷なからしむるは、修道僧たるものゝ義務なりしを以てなり。

それより年月を經て、バーラーム一日、イヨアサフに語りて曰く、我れ死の時の近づけるを覺ふと。また我が遺骸を地中に埋めよ、且つ我知らずして犯せる罪、我靈魂の進歩を害することもあるべきを以て、我ために祈をせよと乞へり。また汝が撰びし修道者の生活は之を終りまで、忍耐すべしと勸めたり。斯くてバーラームは、聖なる犧牲に必要のもの一切を整へ、先づ神に献ぐるに血なき供物を以てせる後ち、自ら聖餐を守り、次で、イヨアサフにも聖体機密を守らしむ。而して此夜は、師の死期切迫せるを思ふて悲めるイヨアサフを慰諭し、夜の明くるや、神に祈りを捧げ、十字架の記號を畫し、恰かも樂しき旅路に上るものゝ如くに平然として死せり。

イヨアサフは悲しき中にも、あらん限りの敬意を盡して、其の遺骸を地中に葬り、式の如くに詩篇を唱へ、孤身煢々、祈禱三昧に其身を委ぬ。然るにイヨアサフ或時睡眠狀態に入り、曾て一たび見しことある美麗なる都へ生れ出でしと感じたり。而して此の都に入りたる時、後光を戴ける天使出て來りしが、其手には、人類の未だ曾て見しことなかるべき程に美麗なる冠を携さへたり。イヨアサフ之に問ふて、其冠は、誰に與へらるべきものかと謂ひしに、天使の答にいふ、一は、汝イヨアサフのためなり。是れ汝が多くの靈魂を救に導びきしと、又今、現に一身を遁世的生活に委ねゐるに由る。又第二の冠も汝イヨアサフのものなるが、こは、汝よりして邪を棄て正に歸したる汝の父に與ふべきものなりと。イヨアサフ之を聞きて、不平らしく叫びて曰く、『我は、斯ばかりの忍耐をなし、父は只一回の痛悔をなせしに過ぎざるに、我と父と同等なるは如何』と。此時、バーラーム現はれ出で、イヨアサフを叱して曰く、『汝若し富まば、寛仁なるを得じとは、是れ我曾て汝に告げし所にあらずや。而も、其の當時、汝は驚けり。今果して、汝父と同等に置かれたりとて、之を喜ばずして、

却て之を怒る」と。其時、イヨアサフは宥恕を求め、且つバーラームが何處に住し居るかを問ひしに、バーラーム曰く、我は此の美なる都に住む。而して我特別の居所は此の都の中央の一街、燦爛たる光輝を發する所にあり。イヨアサフ汝も亦、終りまで忍耐ならば、肉体の重荷を取り卸さるゝと共に亦こゝに來り得べきなりと。

イヨアサフ目覺めて心に慰藉と、力とを感じぬ。

イヨアサフは終りまで、其の遁世的生活を繼續せり。その王宮を出でたりしは、二十五歳の時にて、遁世者たりしこと三十五年間なりき。彼、その馳場を走り盡せしとき、平安にして瞑目し、榮光の冠を得たり。前にイヨアサフに告ぐるに、バーラームの住處を以てしたりし修道僧は、神の默示に由りてイヨアサフの死期近きを知り、其の恰かも死したる時に來着して、基督教の禮典を執行し、之を其の父バーラームと同穴中に葬れり。また此の修道僧は夢の告に基きて、印度に赴き、事の顚末をバラキアスに報知せしに、即時其の墳墓に參詣の爲出發せしもの尠からず。バーラームとイヨアサフの遺体が少しも腐敗せず、恰かも活けるが如くなるを見て、王は、一同に命令し、之を美麗なる棺に收容し、印度に持ち歸らしむ。此事國民の耳朶に達するや、此の聖骸を觀覽禮拜せんとて、各市各郡より集まり來りしもの、其數を知らず。何れも皆、之に對して讃美歌を唱へ、多くの炬火を點じ、(光の子、光の嗣子の傍に光を置くは、是れ適當の所爲といふべし)遂にイヨアサフの建てしかの教堂の中に之を葬れり。此の遺骸の改葬中、及び其後も、主は、此の遺骸に由りて、多くの奇蹟を行ひ、且つ病を癒し給へり。バラキアス及び國民皆此の奇蹟を見、また不信者にして主を知らざりし隣國の者等この墓邊の奇蹟を見て信仰を起せり。凡て遠近見聞の輩、イヨアサフの生活天使の如くにして、神に對する愛到らざるなきに駭き、愛する者と共に在して無量の惠みを與へたまふ神を讃美せり。

以上、余は、信ずべき人より聞きし眞の話を書き綴りて此に筆を擱くことゝなりぬ。願はくは、此の有益の話を讀み若しくは聞く我等、主イエス、キリストを經て祈禱と仲保に由り、神を喜ばせしバーラーム及びイヨアサフの二聖徒同樣、我等の分を受くるに至らんことを。又願くは主イエス、キリストに、父及び聖靈と同樣今も後も萬代を通じて、聲譽、權能、尊嚴、榮光あらんことを。アーメン。

* * * * * * * *

釋迦の傳を見るに、釋迦の父は、即ち淨飯大王と稱せらる。釋迦の生るゝや、阿私他仙人なるものあり。太子若し家に在らば、轉輪聖王とならん。若し出家せば一切種智を成し、廣く人天を度せんと預言したりといふ。爾後、淨飯王は、太子の出家せんことを憂へ、五百の青衣、賢明多智の者を撰びて、種々に太子を養視せしめ、また三所に於て別殿を作り、温涼寒暑處を異にして慰樂せしむ。然るに、太子、王の許可を得て、園林に出遊するや、途に老病死を見たりとは、是れ釋迦傳中、最も著名の話柄なり。今我等ダマスコのヨハヂの話を以て、之と相比するにイヨアサフが少年時代なるものは、全く釋迦の少年時代と符節を合するが如し。即ちイヨアサフもアベヂルと稱する王の子にして、其の生るゝや、占星學者の預言あり。由て別に宮殿を建て、娛樂の限りを盡さしめしが、遂に或時門を出でゝ老病死を見、修道僧に遇ひて、基督教の人生觀に達したりといふ。其他父王を感化したりといふに於て、兩者相等しく肉と惡魔を敵として激戰せりといふに於ても、亦兩者相等し。或は其の固有名詞さへ、之を釋迦傳に取たるものかと疑ふ人あり。例せばマクス、ミューレルは釋迦が踰城出家の時の御者車匿をイヨアサフの臣ザーダンに擬し、ゲッチンゲンのベンファイ教授は、釋迦傳中の提婆を魔法師チューダスと同一なりといへり。又マックス、ミューレルは太子出門の際に於て邂逅したりといふ、老人の形容、梵文原本と、希臘原本の相符合せるを示し、ヨハヂは單に印度より至れる人の口頭の話說を聞しのみならず、或は、梵文原本を机上に具へ居たるにあらざるかといへり。即ち余が、『顏に青海の波を寄せ』と譯したるは、希臘語 ἐρρυνωμένος τὸ πρόσωπον（その顏に皺ありの義）にして、梵語 bali-nikitakâya（全身皺に掩はるの義）なり。『腰に梓の弓を張り』と譯したるは、希臘語 συγκεκυφώς にして、梵語 kubga なり。『手足痿え』と譯したるは、希臘語 παρειμένος τὰς κνήμας（其膝弱しの義）にして、梵語は Pravedhayamânah sarvângapratyangaih（四肢皆戰くの義）なり。譯者曰く、余は、語句の排列上、『腰に梓の弓を張り』と『手足痿え』とを前後倒置せり。讀者之を諒せよ。『髮白く』と譯したるは、希臘語 πεπολιωμένος にして梵語 paditakesa なり。『齒脫け落ちて』と譯したるは、希臘語 ἐστερημένος τοὺς ὀδόντας にして、梵語 khandadanta なり。『聲頭ふ』と譯したるは、希臘語 ἐγκεκυφμένα にして梵語 khurakhurâvasaktakantha なり。凡て是等の符合を點檢し來る時は、決して偶然の符

合を以て見るべからず。一千八百五十九年、佛國のラブーレーが初て之を發見したる以來、獨逸のレープレヒト、英國のビール等、皆之を指摘して、ヨハヂが釋迦傳を換骨奪胎せしものなるを稱す。其他此の書中に、載せられたる御伽話、及び譬喩話の多くが、印度的なることも亦注意せざるべからず。かの一角獸の話の如きは其中の最も著しきものなり。是れヨハヂが想像上の小説にあらずして印度思想に接觸したるの結果たることいふを待たざるなり。

明治四十二年六月廿四日印刷
明治四十二年六月廿七日發行

不許複製

著作者　田中達
東京京橋銀座四丁目一番地

發行者　堀田達治
東京京橋銀座四丁目一番地

印刷者　デー、エス、スペンサー
東京京橋銀座四丁目一番地

印刷所　敎文館印刷所
東京京橋銀座四丁目一番地

發行所　敎文館

324
136.

324
136

324
136

013754−000−1

324−136

比較宗教雑話

田中　達／著

M42

ABA−0243